東京都国分寺市

恋ケ窪遺跡調査報告Ⅱ

1980. 10

国分寺市教育委員会
恋ケ窪遺跡調査会

序

恋ケ窪遺跡は，国分寺市内を流れる野川の源流に位置し，縄文時代の遺跡として以前よりよく知られていました。この遺跡については，過去幾回か調査が行われ，今日にあっては昭和51年12月に発足した恋ケ窪遺跡調査会によって多くの調査実績をあげてまいりました。この調査実施にあたりましては，文化庁，東京都，国分寺市文化財保護審議会の関係者をはじめ，恋ケ窪遺跡調査会の役員，団長，調査員の方々にご指導ご援助いただきながら進めてまいりました。

また，地元住民の皆様からの暖かいご協力とご理解をいただきましたことなど，この機会に心からお礼申しあげます。

さて，このような文化遺産は，調査，保存と同時にその内容を広く公開しなければなりません。その一環として，すでに恋ケ窪遺跡調査報告Ⅰを刊行しましたが，本書はこれに続く調査報告書であります。また遺物等は，昭和55年８月にオープンした国分寺市文化財資料展示室に展示してあります。

終わりに，関係者各位のご協力に深く感謝申しあげると共に，恋ケ窪の古代文化を伝える貴重な資料として本報告書を広く活用されることを願ってやみません。

昭和55年10月

恋ヶ窪遺跡調査会

会長　興津精二

例　　言

1. 本書は，東京都国分寺市西恋ケ窪に所在する恋ケ窪遺跡において，1976年度から1978年度に恋ケ窪遺跡調査会が発掘調査を行った第４次から第８次までの発掘調査報告である。なお，これらの発掘調査は国庫補助対象事業である。
2. 本調査会の発掘調査は1980年３月末現在で第12次を数えているが，このうち第１次については報告済みであり，第２次・第３次は"立ち合い"である。また，調査及び調査区の名称には，ほぼ調査実施順に年度を越えて連続番号を付し，「第４次調査（地区）」，「第５次調査（地区）」等と表示する。なお，「恋ケ窪遺跡調査報告Ⅰ」では予備調査を１次，本調査を２次調査と記載したが，予備調査，本調査の双方合せて第１次調査と訂正する。
3. 第４～８次調査の報告書作成作業は1979年９月から1980年７月まで恋ケ窪遺跡調査会事務所で行った。
4. 本調査会は会長を興津精二国分寺市教育長，調査団長を永峯光一東京都文化財保護審議会委員が担当し，国分寺市教育委員会に事務局を置いた。
5. 本書は永峯光一団長を中心に広瀬昭弘，秋山道生，小松眞名が分担執筆し，その文責は文末に記した。なお，「まとめ」に関しては安孫子昭二氏に加除筆していただき，石器の文章に関しては砂田佳弘が加除筆した。
6. 発掘調査から報告書作成にいたる過程で，次の方々の参加協力を得た。

発掘参加者

原川雄二・渡辺裕水・高麗正・桐生直彦・入江渉二・大橋利行・土屋千年・西山和成

整理作業参加者

山崎和巳・安藤健一・石川朗　（学生）

入江渉二・西山和成・小松明美・深瀬恵津子　（一般）

7. 発掘調査から報告書作成にいたる過程で，次の方々や機関から御教示，御助言を賜った。厚く御礼申しあげます。（敬称略，順不同）

浅野晴樹・有吉重蔵・伊藤富治夫・宇野信四郎・上村昌男・塩野半十郎・舘野孝・田中重雄・中西充・西中義郎・西脇俊郎・早川泉・福田信夫・藤村由香里・堀井晶子・本多義章・本多章吉・松井新一・村越昭明・行田裕美

東京都教育庁文化課・武蔵国分寺遺跡調査会・国分寺市立第一中学校

目　　次

序

Ⅰ　第4次調査

1.　調査概要・層序 …… 3

2.　遺　構 …… 4

3.　遺　物 …… 6

a．土　器 …… 6

b．石　器 …… 6

Ⅱ　第5次調査

1.　調査概要・層序 …… 9

2.　遺　構 …… 9

3.　遺　物 …… 12

a．土　器 …… 12

b．石　器 …… 14

Ⅲ　第6次調査

1.　調査概要・層序 …… 18

2.　遺　構 …… 20

3.　遺　物 …… 24

a．土　器 …… 24

b．石　器 …… 26

c．中世陶器 …… 29

Ⅳ　第7次調査

1.　層　序 …… 30

2.　遺　構 …… 30

3.　遺　物 …… 32

a．土　器 …… 32

b．石　器 …… 33

Ⅴ　第８次調査
1.　調査概要・層序 …… 33
2.　遺　構 …… 34
3.　遺　物 …… 36

Ⅵ　1964年度発掘資料
1.　再整理にいたる経緯 …… 37
2.　遺　物 …… 37
a．土　器 …… 37
b．石　器 …… 45

Ⅶ　まとめ
勝坂式土器に関して …… 51
「連弧文土器」に関して …… 52
釣手形土器に関して …… 58

あ　と　が　き …… 60

引用参考文献 …… 61

付　篇
恋ケ窪遺跡発掘調査概要 …… 66

挿図目次

第1図　恋ケ窪遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 1
第2図　調査地区の位置 …… 2
第3図　第4次調査発掘区全体図（1／200） …… 3
第4図　第4次調査地区層序（1／60） …… 4
第5図　第4次調査10号土壙，11号土壙，12号土壙，13号土壙，5号集石実測図（1／40） 5
第6図　第4次調査出土石器実測図（1／1・1／3） …… 8
第7図　第5次調査発掘区全体図（1／150） …… 9
第8図　第5次調査4号住居址実測図（1／60）） …… 10
第9図　第5次調査10号住居址・11号住居址実測図（1／60） …… 11
第10図　11号住居址埋甕実測図（1／20） …… 11
第11図　第5次調査2号土壙実測図（1／40） …… 11
第12図　第4次・第5次調査出土土器実測図（1／6） …… 13
第13図　第5次調査出土石器実測図（1／1・1／3） …… 15
第14図　第5次調査出土石器実測図（1／3） …… 16
第15図　第6次調査発掘区全体図（1／400） …… 19
第16図　第6次調査18号住居址実測図（1／60） …… 20
第17図　第6次調査14号土壙実測図（1／40） …… 21
第18図　第6次調査15号土壙実測図（1／40） …… 22
第19図　第6次調査遺物集中実測図（1／40） …… 23
第20図　第6次調査地下式壙実測図（1／60） …… 24
第21図　第6次調査出土土器実測図（1／6） …… 25
第22図　第6次調査出土石器実測図（1／1・1／3） …… 28
第23図　第7次調査地区全体図（1／200） …… 30
第24図　第7次調査19号住居址，20号住居址，21号住居址断面図（1／60） …… 31
第25図　第7次調査出土土器実測図（1／6） …… 32
第26図　第7次調査出土石器実測図（1／3） …… 33
第27図　第8次調査発掘区全体図（1／200） …… 33
第28図　第8次調査地区層序（1／60） …… 34
第29図　第8次調査16号土壙，17号土壙，1号ピット実測図（1／40） …… 35

第31図　1964年度調査出土土器実測図（1／6）…… 39
第32図　1964年度調査出土土器実測図（1／6）…… 40
第33図　1964年度調査出土土器実測図（1／6）…… 42
第34図　1964年度調査出土土器実測図（1／6）……45
第35図　1948年調査出土土器実測図（1／6）…… 46
第36図　1964年度調査出土石器実測図（1／3）…… 47
第37図　a・b段階，加曽利E式の口縁部文様帯モチーフ …… 53
第38図　a・b段階，加曽利E式の頸部・胴部文様帯モチーフ …… 53
第39図　「連弧文土器」の form …… 53
第40図　c段階，加曽利E式の口縁部文様帯モチーフ …… 54
第41図　c段階，加曽利E式の胴部文様帯モチーフ …… 54
第42図　a～c段階の代表的住居址の土器組成 …… 55
第43図　a～c段階の土器組成概念図 …… 58
第44図　釣手形土器の form …… 58

表　目　次

表1　第4次調査出土土器一覧 …… 48
表2　第5次調査出土土器一覧 …… 48
表3　第6次調査出土土器一覧 …… 48
表4　第7次調査出土土器一覧 …… 48
表5　第8次調査出土土器一覧 …… 49
表6　1964年度調査出土土器一覧 …… 49
表7　第4次調査出土打製石斧計測値 …… 49
表8　第5次調査出土打製石斧計測値 …… 49
表9　第6次調査出土打製石斧計測値 …… 50
表10　第7次調査出土打製石斧計測値 …… 50
表11　第8次調査出土打製石斧計測値 …… 50
表12　1964年度調査出土打製石斧計測値 …… 50

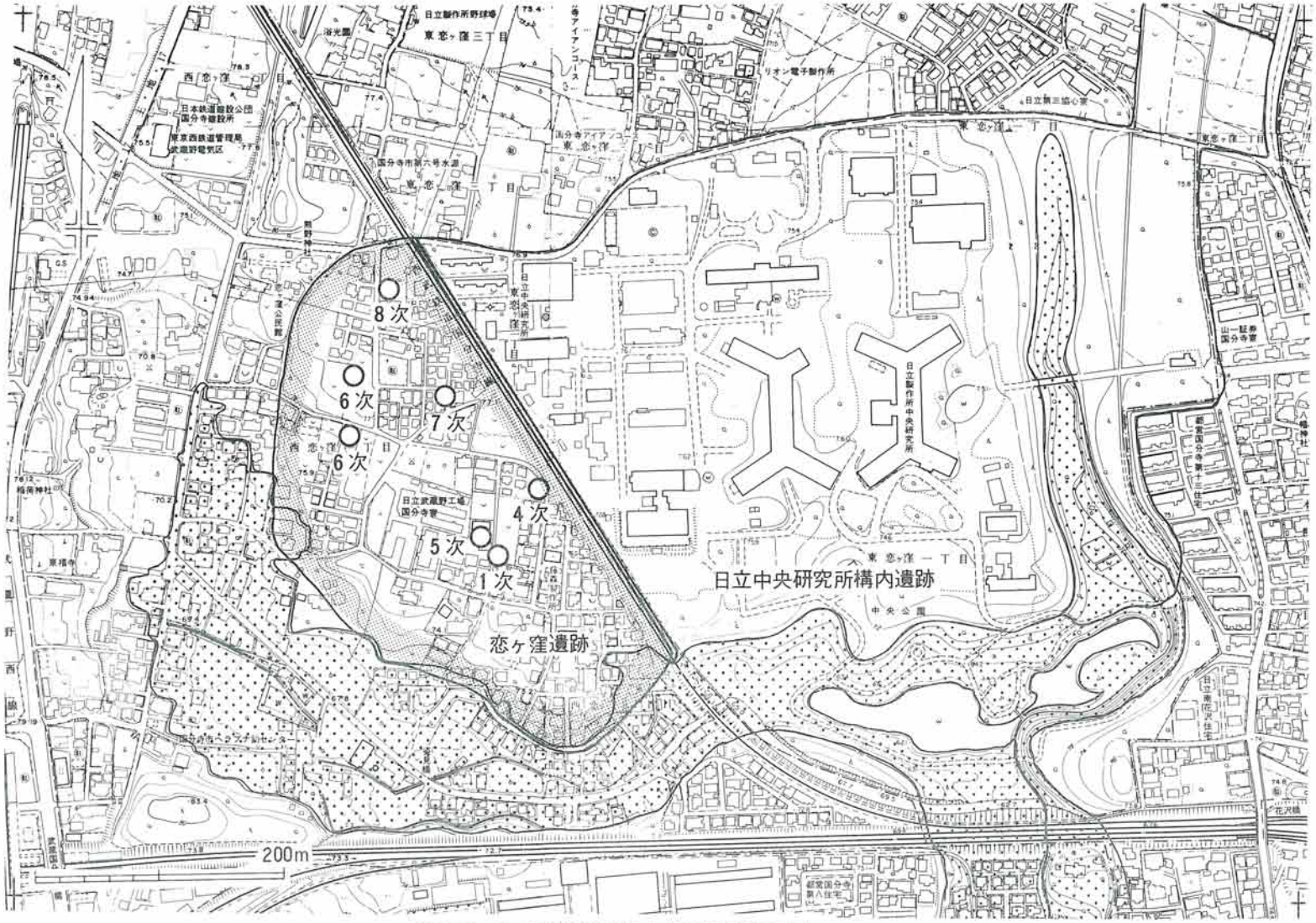
図版目次

図版　1　遺跡遠景・第4次調査
図版　2　第4次調査
図版　3　第4次調査
図版　4　第4次調査
図版　5　第4次調査
図版　6　第4次調査
図版　7　第5次調査
図版　8　第5次調査
図版　9　第5次調査
図版　10　第5次調査
図版　11　第5次調査
図版　12　第5次調査・第6次調査
図版　13　第6次調査
図版　14　第6次調査
図版　15　第6次調査
図版　16　第6次調査
図版　17　第4次調査・第5次調査・第6次調査
図版　18　第6次調査
図版　19　第6次調査・第7次調査
図版　20　第7次調査・第8次調査
図版　21　第8次調査
図版　22　第8次調査
図版　23　第7次調査・第8次調査・1964年度調査
図版　24　1964年度調査
図版　25　1964年度調査
図版　26　1964年度調査
図版　27　1964年度調査
図版　28　1964年度調査
図版　29　1964年度調査
図版　30　1964年度調査
図版　31　1964年度調査
図版　32　1964年度調査
図版　33　1964年度調査
図版　34　1964年度調査
図版　35　1964年度調査
図版　36　1964年度調査
図版　37　1948年調査

凡　　例

1. 遺構番号は原則として確認順に連続番号を付したが，整理工程の事由により必ずしも調査次数順とはしていない。
2. 土器実測図で▨は欠損を，▒は隆帯の剥落を表現する。
3. 遺構挿図のうち，土器は●（完形土器は◉），石器は□，礫は○，土製品・石製品は△で表現した。
4. 土器写真は縮尺¼を原則とするが，一部不統一である。
5. 石器写真は実寸大と⅓の縮尺がある。

第1図　恋ヶ窪遺跡の位置と周辺の遺跡



第2図　恋ヶ窪遺跡を中心とする発掘調査地点

Ⅰ　第４次調査

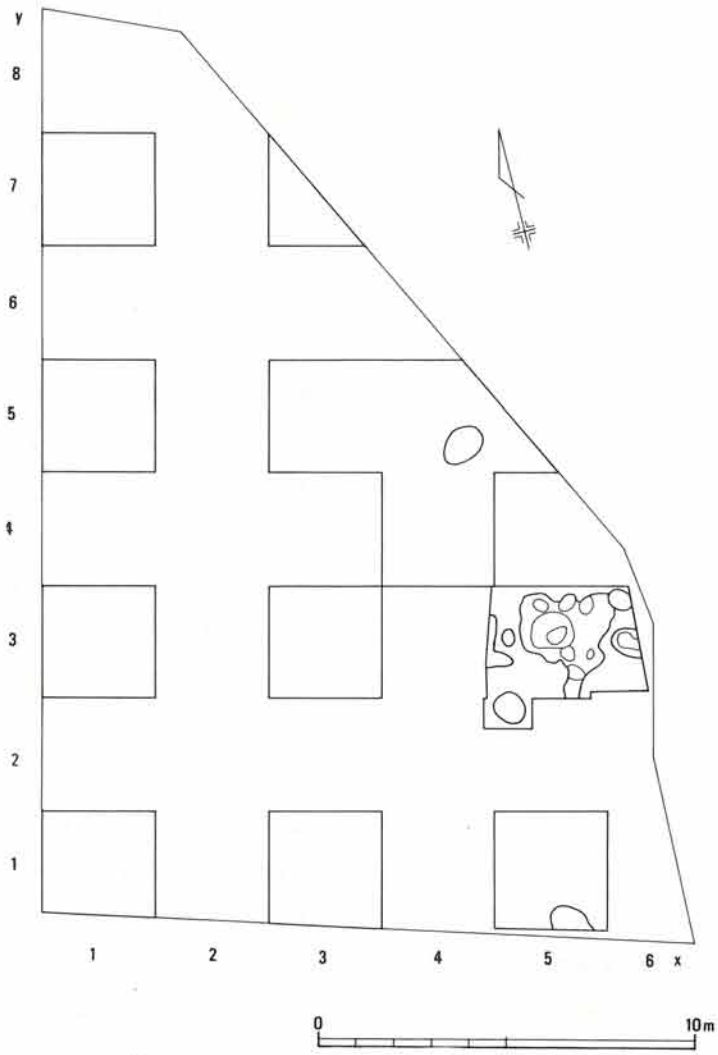
第４次調査地区は，西恋ケ窪１丁目 165番地で恋ケ窪遺跡の北東域に位置する。本次調査は，当畑地の宅地化が予想されたため恋ケ窪遺跡の範囲確認調査の一環として実施したものである。調査期間は1977年３月20日より３月30日までである。

１　調査概要・層序

発掘区は調査地南西隅に基点を設け，３ｍグリッドを設定した。調査は隔区ごとに行うこととし，（1，１・３・５・７），（３，１・３・５・７），（５，１・３）を調査対象とした。調査の状況はｘ－１列，ｘ－３列では遺構は検出されず，遺物も（３・５）区ではややまとまって土器が出土したほかは僅少であった。一方，ｘ－５列では数基の土壙が検出されたため，一部拡張して調査を行ったが，遺物は少ない。調査面積は約110㎡で，調査地点はほぼ平坦である。

層位は表土よりローム層まで50～80㎝の層厚を測り，３層に分けられる。

Ⅰ層　表土。耕作土で色調は黒色を呈し，パサパサして締りがない。層厚は各区により異なり，調査区北側では20㎝と薄く，南側では70㎝と厚い。

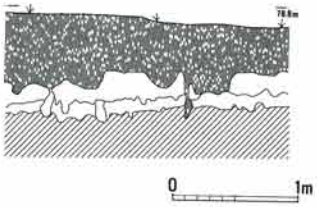


第３図　第４次調査発掘区全体図（1/200）

Ⅱ層　黒褐色土。堅く締り，粘性をもつ。10～30cmの厚さを測り，Ⅱ層下部よりⅢa層にかけては漸移的に移行する。

Ⅲa層　ローム漸移層。10cm前後の層厚を示すが，ところによっては本層が認められない部分もある。

Ⅲb層　黄褐色軟質ローム層。



第4図　第4次調査地区層序(1/60)

（広瀬昭弘）

2　遺　構（第5図・図版2～5）

本次調査で検出された遺構は，土壙4基，集石1基である。

10号土壙

（5，1）区に位置し，南側は調査区域外にのびるが形状は楕円形プランを呈すると想定される。遺構確認面からの深さは35cmで，壁はほぼ垂直に立ちあがり，床面は平坦である。南東の壁際にピットを有し，深さは床面より25cmを測る。土壙覆土は，下部に若干の炭化粒子を含む黄褐色土と，上部の黒褐色土に分けられる。土壙内からの遺物出土数は少なく，加曽利EⅡ式の土器がやや目立つ程度である。

11号土壙

（4，5）区に位置する。長軸120cm，短軸80cmの不整円形プランを呈し，断面は浅い鍋状を示す。床面はほぼ平坦で，遺構確認面からの深さは20cmを測る。土壙内はローム粒子を微量に含む褐色土が堆積している。遺物は若干の土器片が出土したのみである。

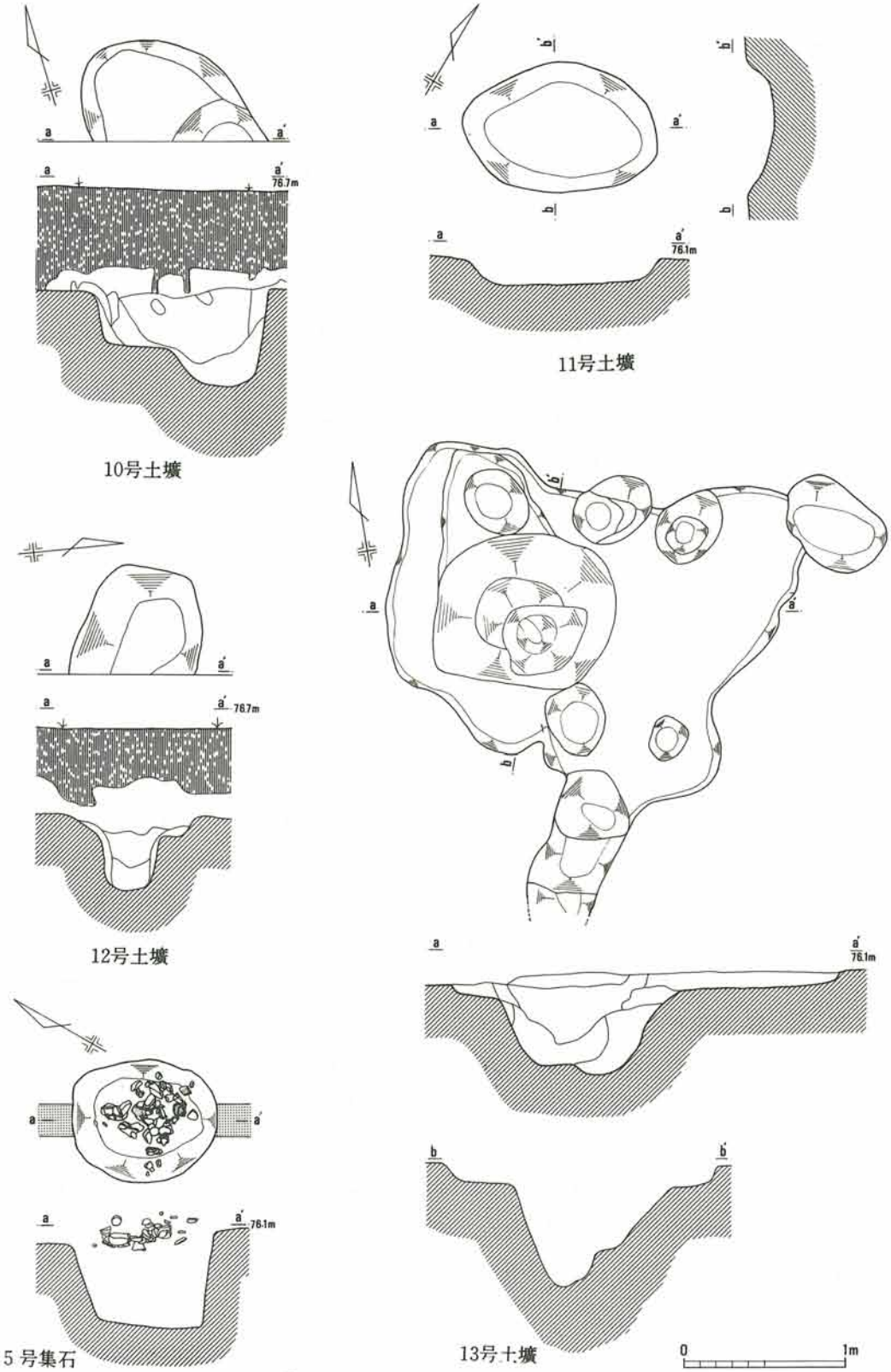
12号土壙

（6，3）区に位置する。東側は道路下にのび未調査であるが，不整円形プランを呈すると思われる。遺構確認面からの深さは50cmを測り，壁は下部ではほぼ垂直に，上部ではやや緩やかに立ちあがっている。壁面，床面とも明瞭である。土壙内からは加曽利E式の土器片が数点出土したにとどまる。

13号土壙

（5，3）区に位置する。土壙周辺にはピット，性格不明の浅い落ち込み等が複雑に重複している。中央部の長軸110cm，短軸90cmの不整円形を呈する落ち込みが土壙主体部である。深さは40cmで，壁面，床面とも明瞭であり，壁は急角度で立ちあがっている。土壙南東部には本土壙構築以前の遺構が重複している。

土壙の周囲には，ローム層を5cm程掘りくぼめた性格不明の落ち込みと，壙内には本土壙と接するようにして深さ10～20cmのピットが数基認められる。



第５図　第４次調査10号土壙、11号土壙、12号土壙、13号土壙、５号集石実測図(1/40)

土壙及びその周辺からは150点程の土器の細片が出土し，その時期は，加曽利ＥⅡ式・同Ⅰ式とされる。

５号集石

（５，２・３）区に位置する。70cm×70cmの範囲に礫の集中が認められ，集石下部には土壙を伴っている。

集石は62個の礫で構成されており，中央部にまとまりが集中して認められる。集石下部は土壙覆土内に食い込むが，覆土下部までは達していない。礫は拳大のものが多く，その大半は焼礫である。完形及び完形に近い礫が全体の⅓で，他は破砕礫である。礫以外には土器片が11点出土している。

集石下部の土壙は長軸90cm，短軸75cmの楕円形プランを呈する。深さは60cm程で，壁は垂直に近い立ちあがりを示す。土壙覆土内からは遺物は出土していない。

集石中に伴った土器は加曽利ＥⅡ，同Ⅲ式である。

（広瀬）

３　遺　　物

a．土　器　（第12図１，図版６）

第４次調査地区では住居址は確認されず，土器総数も少ない。実測可能個体は一個体のみで，それ以外は復元実測の可能な破片もない。

第12図１，（３，５）区出土。現高33.5cm，底径13.8cm。頸部より上は欠失しているが，キャリパー形を呈すると思われる。現存部の上端には胴部と頸部を画する隆帯が一本認められ，そこから，貼付けの隆帯による懸垂文と蛇行懸垂文が交互に垂下している。蛇行懸垂文を間に挟む懸垂文間を一単位とすれば，全周では４単位であり，地文はＬ{ の撚糸文である。

（秋山道生・山崎和巳）

b．石　器　（第６図　図版６・17）

４次調査で出土した石器は，削器，打製石斧，凹み石，敲石，石核，使用痕を有する剥片，剥片，砕片の８器種33点である。（第６図１～15）。また，礫は72点出土している（完形礫２点，破礫７点，焼破礫63点）。剥片は17点，砕片は１点出土し，剥片17点のうち，14点は石質が砂岩であり，大きさ形状等は不定である。ほか３点の剥片と１点の砕片は，石質が黒曜石で，接合はしなかったもののいずれも同一母岩と認定されうる。剥片には石鏃の製作を目的とした剥片も含むと考えられよう。３点のうち１点には加工痕が認められる。

以下，各器種毎に述べる。

1. 削器　（第６図２）

石質は頁岩で横長，大形の剥片を素材とし，刃部は，素材のほぼ全周にわたっている。また，全体に被熱による赤化が認められるが，自然面と剥離面の赤化の度合いが同程度であるところから，製品完成後に熱を受けたと考えられる。（３，１）区出土。重量90.0 ｇ。

2. 打製石斧　（第６図３～11）

９点出土している。完形品は４点で，残り５点は欠損品である。石質，出土地点，法量等は表７に示した。

3. 凹み石　（第６図12）

石質は安山岩で，小破片のため原形は不明である。表面に直径 1.9 cm，深さ 0.6 cmの比較的深い凹みが一箇所認められる。（１，３）区出土である。重量（残存値） 156.5 ｇである。

4. 敲石　（第６図13・14）

２点出土している。13は石質は砂岩で偏平な円礫を素材とし，左側縁の一部と下端の一部に敲打痕が認められる。（３，３）区出土。重量 326.0 ｇ。14は石質が片岩でやや偏平の長楕円形の礫を素材とし，その下端に敲打痕が認められる。（１，３）区出土。重量 281.5 ｇを計る。

5. 石核　（第６図１）

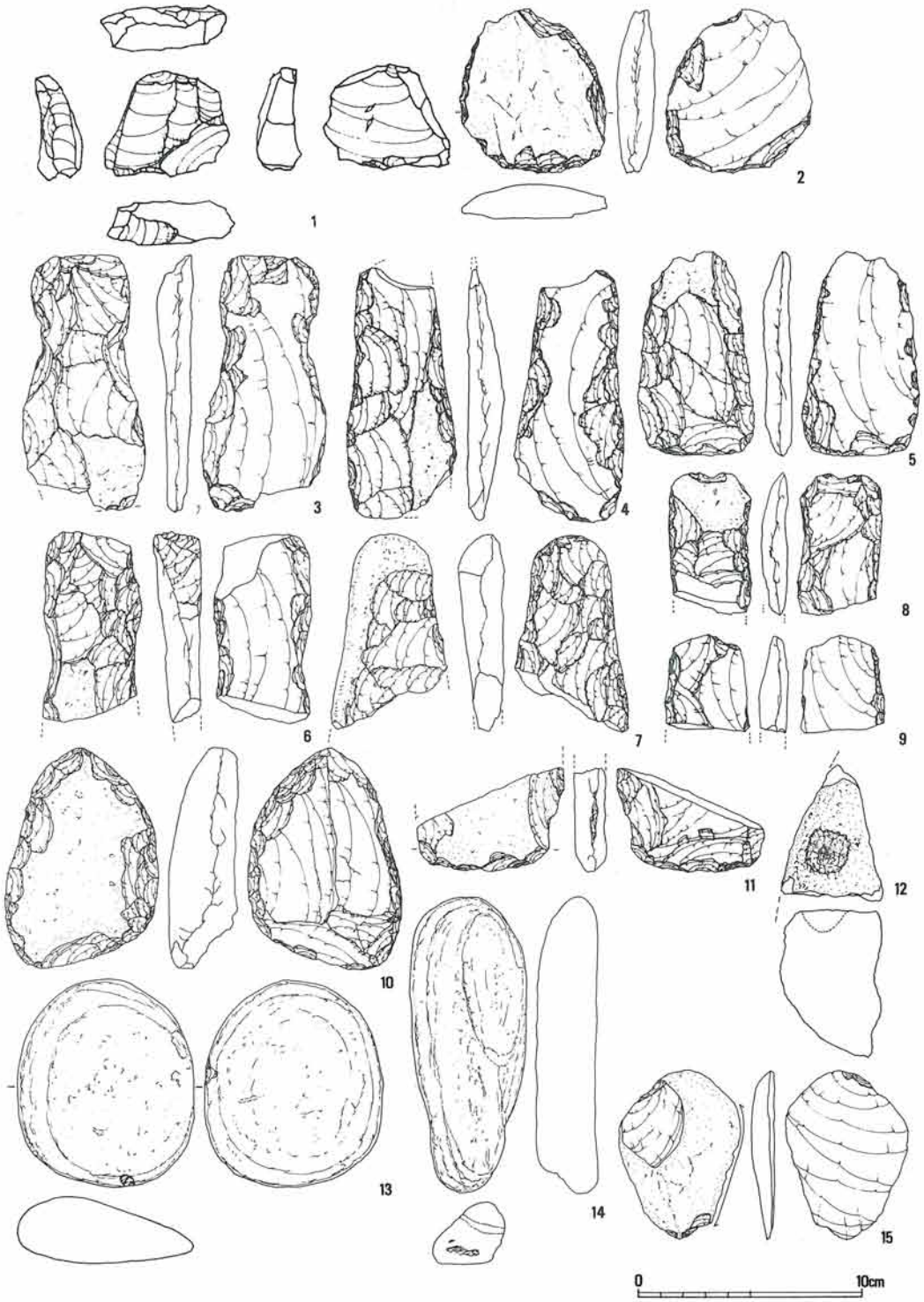
石質は黒曜石で，全面が剥離面によって構成されている。本石核から剥出された剥片等は検出されていない。（５，２）区出土。高さ 1.6 cm，幅 1.9 cm，厚さ 0.7 cm，重量 1.5 ｇを計る。

6. 使用痕を有する剥片　（第６図15）

石質は珪質頁岩で表面の大半に自然面を残し，打面は残置していない。こうした剥片は，打製石斧の製作に際し，素材となるのであろうが，本剥片に関しては，何ら加工を施されることなく，そのまま刃器とされたのであろう。右側縁から先端にかけて刃こぼれが著しい。（３，３）区出土。重量41.5 ｇである。

以上，４次調査時の出土石器を概観したが，その製作・使用時期は共伴する土器より縄文時代中期勝坂式期ないし，加曽利Ｅ式期の所産として間違いないであろう。

（小松眞名）



第６図　（１～15）第４次調査出土石器　〜〜〜：使用痕　———：敲打整形痕　1/3（但し１は実寸大）

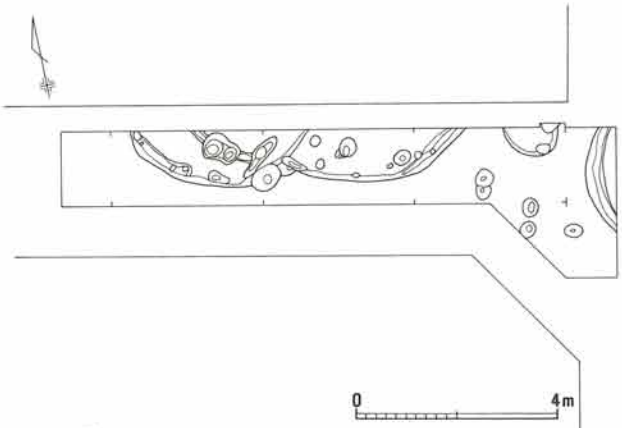
Ⅱ　第5次調査

西恋ケ窪1丁目168番地が調査地区である。当該地一帯は過去数回にわたる調査[*1]等により恋ケ窪遺跡の中心域にあたり，住居址等の遺構が集中するものと想定されていた。1977年9月上旬，この地に個人の宅造建築に伴う発掘届が市教育委員会に提出された。そして，協議の結果工事に先立つ緊急調査を実施する事となった。

調査は水道管，排水管等の埋設される私道部分に限られ，建物部分は盛土を行い調査は実施しなかった。調査期間は，1977年9月26日より同年10月15日までである。

1　調査概要・層序

発掘区は1.5 m幅の東西トレンチで，西より3 m毎に1区から5区まで設定した。調査面積は約20 ㎡である。2～4区の北壁にかけて2軒の住居址が検出され，5区東壁際では第1次調査の際完掘できなかった住居址の西壁部を検出した。層位は表土よりローム層まで80cm前後である。



第7図　第5次調査発掘区全体図（1/150）

Ⅰ層　表土。　黒色を呈し，粘性は弱い。上部は盛土されている。Ⅱ層とは明確に分けられ，40～60cmの厚さを測る。

Ⅱ層　暗茶褐色土。粘性があり良く締っている。スコリア粒を微量に含む。遺物包含層であり，20～40cmの層厚である。

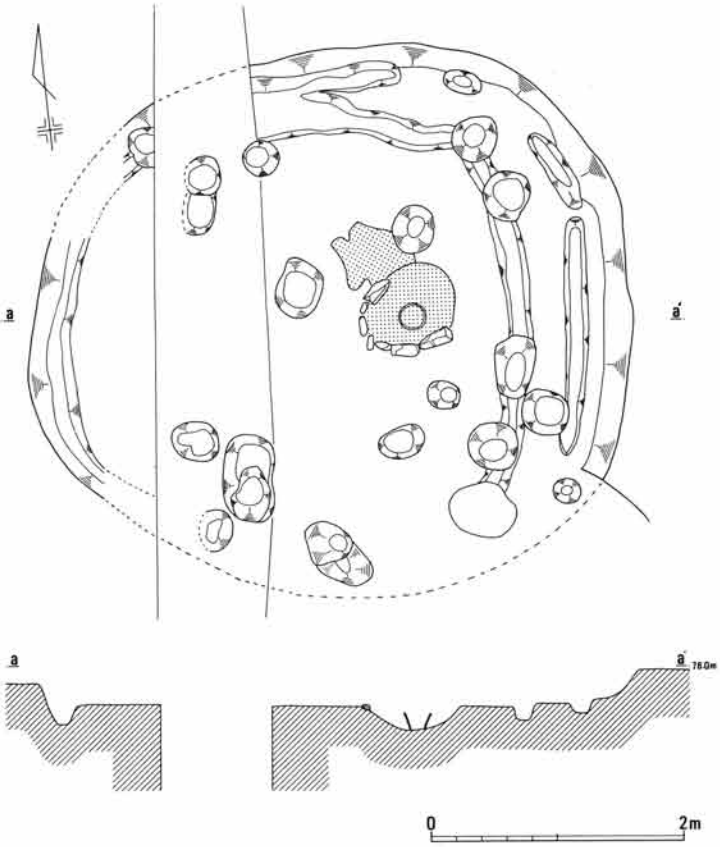
Ⅲa層　　ローム漸移層。Ⅱ層及びⅢb層とは明確に分けられない。

Ⅲb層　　黄褐色軟質ローム層。

なお，本調査地に東接する道路は，1977年4月より6月上旬まで調査を行い，住居址9軒のほか多量の遺物が出土している[*2]。　（広瀬）

2　遺　構（第8～11図・図版8，9）

検出された遺構は住居址3軒，土壙1基である。



第８図　第５次調査　４号住居址実測図（1／60）

４号住居址

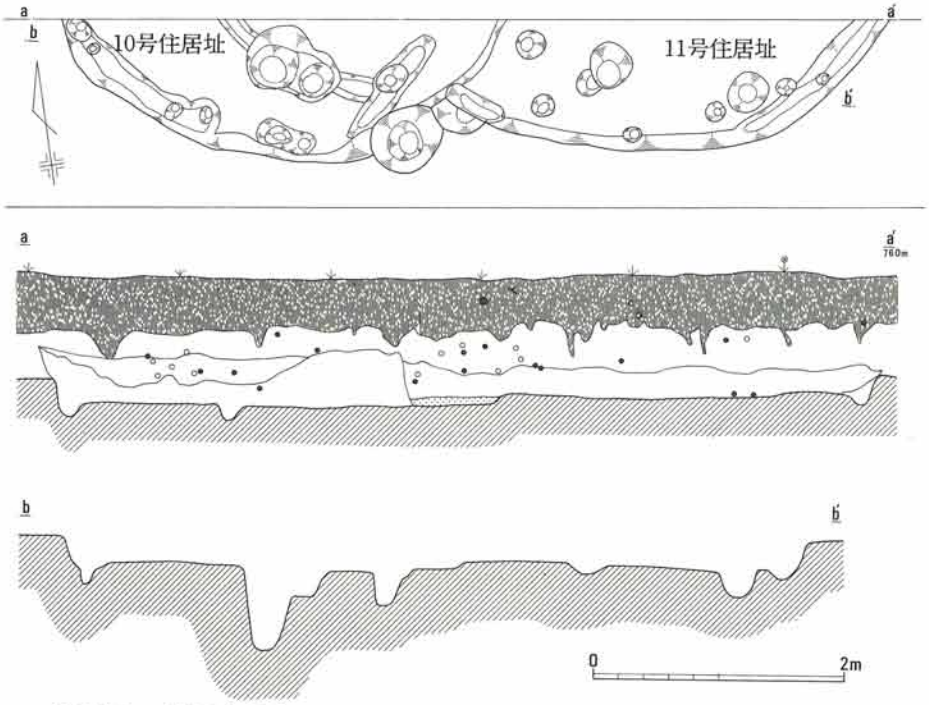
第１次調査で炉を含む中央部分が検出されている住居址である。今回の調査では住居址西壁部を確認した。なお，第８図の平面図は第１次調査，本次調査及び 1979 年度実施の第10次調査で検出された東壁部も含め示してある。

形状は，長径4.8 *m*，短径4.4 *m*程の不整円形プランを呈し，南側は勝坂式期の住居址（３号住）と重複し，重複部分には貼床が認められる。

本次調査で確認した西壁部は，壁下に幅10*cm*，深さ10～15*cm*の周溝がめぐる。壁高は20*cm*を測るが明瞭ではない。床面も堅固でない。また，今回確認部分では柱穴等は検出されていない。住居址の時期は第１次調査の出土遺物からして加曽利ＥⅡ式であり，「連弧文土器」がまとまって出土している。この他４号住居址の詳細は第１次調査報告に詳しいのでここでは割愛する。

10号住居址

２，３区に位置するが，大半が調査区域外に広がっており，南側⅓程を調査したにとどまる。形状は直径4.5 *m*前後の円形プランを呈すると思われる。また，東側は11号住居址と重複する。壁高は20*cm*程であり，壁はさほど明瞭でない。周溝が壁下に断続的にめぐり，周溝内には小ピットが検出された。さらに，その周溝の内側にもう一本周溝が検出され，ローム質の土が推積していた。このことより本住居址の内側に他の住居址が重複しているとも考えられるが調査がおよばず判然としない。床面は凹凸があり堅固でない。炉址は調査区域内では検出されず，柱穴は３本検出された。覆土はスコリア粒を含む黒褐色土で，下部はやや明るい色調を示す。出土遺物は土器の細片が多く，まとまった個体は検出されなかった。破片数としては勝坂式期の土器が多い。



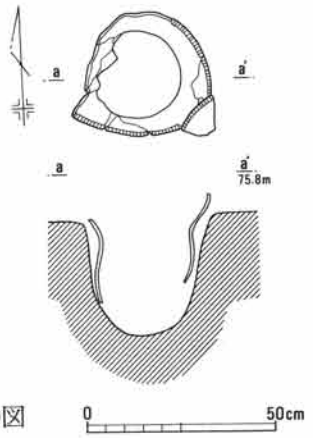
第９図　第５次調査　10号住居址・11号住居址実測図（1/60）

11号住居址

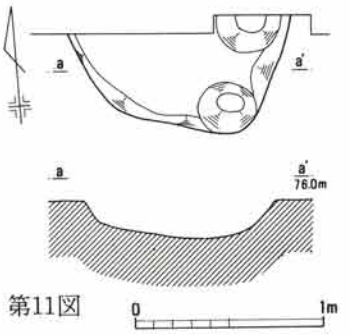
３区検出。西側に位置する10号住居址を切って構築されている。10号住居址同様南側⅓程度の調査にとどまり，大半は北側調査区外に広がる。形状は直径５*m*程の円形プランを呈すると思われる。壁高は15～20*cm*を測り，床面はほぼ平坦であるが堅固ではない。10号住居址と重複する部分は６*cm*程の厚さで貼床が認められる。また，東壁部には幅15*cm*，深さ５*cm*の周溝がめぐるが全周には及ばない。炉址は調査区域内では検出されず柱穴が周溝内の細いものも含め８本検出された。さらに，南東隅の壁際に，胴下半部を欠失する曽利式土器の埋甕が口縁部を床面より８*cm*程とびだして検出された（第10図）。住居址覆土は壁際ではローム質の黄褐色土が，中央部では黒褐色土が堆積している。住居址内の出土遺物は，ほとんど細片であるが，時期は埋甕から判定して加曽利ＥⅠ式後半期の住居址であろう。

２号土壙

４区北壁にかかり検出された。形状は楕円形に近いプランを



第10図　11号住居址埋甕実測図　(1/20)



第11図　第５次調査２号土壙実測図　(1/40)

呈すると思われる。遺構確認面からの深さは20cmで，断面は鍋底状を呈し，壁面，床面とも明瞭でない。土壙内に２本のピットを有し，何れも床面からの深さは15cm程である。遺物は土壙内ピット中より勝坂式土器片が数点出土したにとどまる。

（広瀬）

3　遺　　物

a・土　器　（第12図２～８　図版10・11）

第５次調査地区では住居址３軒，土壙が１基検出されたが，３軒の住居址とも住居址の中央部が調査範囲外であるため，遺物量は少ない。

11号住居址（第12図２・３）

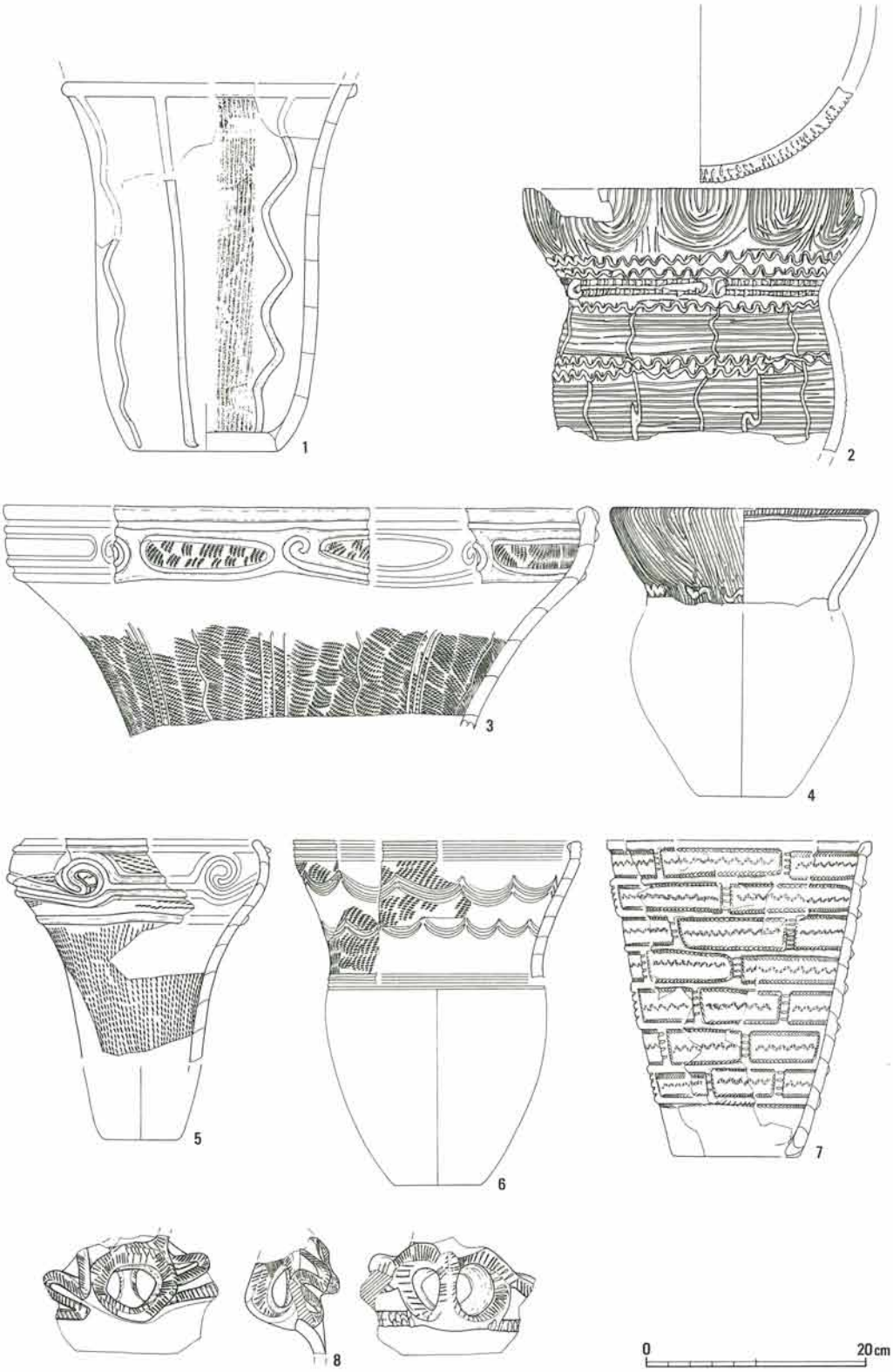
2.　口径32cm，現高22cmを測り，埋甕として使用された土器であり，底部は意識的に欠失させている。口縁部には半截竹管状工具による２本１単位の沈線にて，いわゆる重弧文状に表出しており，それが全周では12個表出されている。口唇部上にも同工具による刺突が施されているが，重弧文モチーフとは連接していない。頸部括れ部には半截竹管状工具の背を利用した連続刺突文が２条廻り，その上に，小突起が５箇所貼付けられている。また，口縁部の重弧文モチーフの下位と胴部に，合わせて５本の，貼付けの隆帯による波状文が廻っているが，この隆帯は押捺により，背が丸味を帯びず明瞭な稜を持つ特徴的な隆帯であり，その裾には竹管状工具による刺突が施文されている。なお，胴部に付されている懸垂文は背に丸味を持つ通常の粘土紐の貼付けである。

3.　口径54cmを測る大形の土器で，現高は20.4 cmである。器形は，口縁部がほぼ直立するキャリパー形を呈する。口縁部文様帯は楕円区画間に渦巻文を表出し，楕円区画内にはＬＲの縄文を横方向に回転させている。本土器には頸部と胴部を画する隆帯や沈線は認められないが，地文を頸部まで施さず，無文帯を表出している。胴部には沈線による３本単位の懸垂文と，蛇行沈線文が交互に，縄文ＬＲの縦方向回転の地文上に表出されている。本土器は大形破片が多いが，足らぬ部分も多い。その部分はおそらく調査範囲外に存在するものと考えられる。

４号住居址（第12図４）

本住居址は，本章第２節で述べられている如く，１次調査（「恋ケ窪遺跡調査報告Ｉ」1979）で検出された４号住居址の西側の一部である。やはり住居址の端なので遺物量は少ない。

4.　口径24cm，現高９cmを測り，胴部以下を欠失している。口縁部に斜行沈線を表出する特徴的な土器であり，１次調査で本住居址より出土した一土器（「恋ケ窪遺跡調査報告Ｉ」第24図８）と同 type である。なお，本土器の口唇折返し部の沈線は斜行沈線と連接している。



第12図　第４次・第５次調査出土土器実測図（1/6）

遺構外出土土器（第12図５～７）

5.　３区出土。口径21.2 *cm*，現高19.8 *cm*。器形はキャリパー形を呈し，口縁部文様帯には，横走するＬ{{の撚糸地文上に隆帯にての字状モチーフを表出している。胴部は口縁部施文と同原体を縦回転させているが懸垂文は認められない。胎土に小石及び細砂を多く含む。

6.　３区出土。口径26*cm*，現高13*cm*を測る「弧線文土器」である。破片は多いが，ことごとく小片であり，あまり接合しない。文様は口縁部と胴部括れ部に３本の沈線を廻らし，その間に３本単位と２本単位の弧線文を上下二段に廻らしている。地文はＲＬの縄文で，胎土には細砂をやや多く含む。

7.　５区出土。口径24*cm*，器高28.8 *cm*。現存部は全周の約⅓程であるが，口縁部から底部まで接合する。器形は単純な深鉢形であり，文様は貼付けの隆帯による矩形区画が，煉瓦を積むように７段廻っている。隆帯の裾と区画内の波状文は何れも三角押文を用いており，さらに矩形区画の縦の隆帯上には，竹管状工具による刺突が認められる。

（秋山・山崎）

b・石　器（第13・14図，図版11・12・17）

５次調査では，石器，礫の総計2,454点が出土している。石器の内訳は，石鏃（未製品含む），削器，打製石斧，磨製石斧，石皿，磨石，敲石，石核，使用痕・加工痕を有する剥片，剥片，砕片，その他の13器種 421点である。剥片・砕片は，総数303 点のうち52点の石質が黒曜石（砕片は31点すべて）で，ほか251点の大半は砂岩である。また，黒曜石を除く剥片の半数は程度の差こそあれ何らかの熱を受けている。また，地点別にみると，４区が92点と最も出土数が多く，なかには長さ十数*cm*で，打製石斧の素材と考えられる剥片がいくつか含まれている。礫についても，この４区が最も出土数が多く，完形礫が 433点，完形焼礫が48点，破礫が 1,206 点，焼破礫が 346点である。遺構覆土出土数は，１号土壙14点（焼礫１点），４号住居址15点（焼礫４点），10号住居址106 点（焼礫12点），11号住居址88点（焼礫15点）である。残り 1,807 点の遺構外出の礫はすべてⅡ層より出土している。

以下，器種毎に述べる。

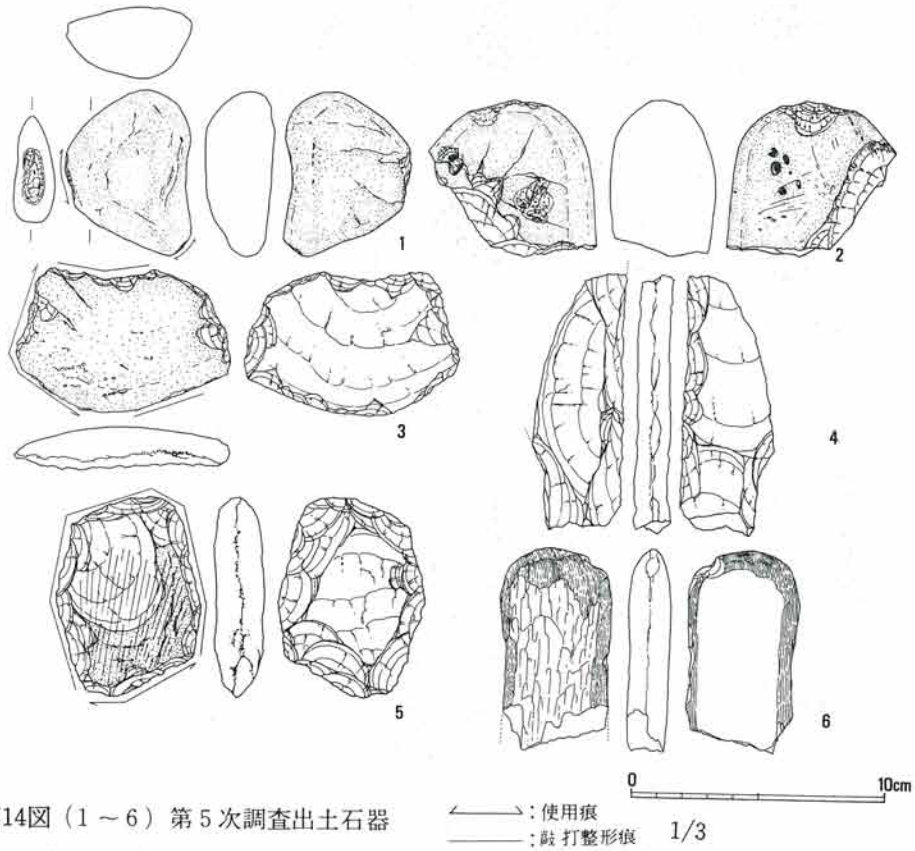
1.　石鏃　（第13図１～４）

石質はすべて黒曜石で，製品２点と，未製品７点が出土している。１は，左脚部欠損ののち再調整を施したと考えられる。未製品としたもの（３・４）は，製品に比べ，一まわり以上大きく，製作工程の一面を暗示するものであろう。１は９区，ほかは 3, 5 区出土である。

2.　削器　（第13図５）

石質は砂岩で横長剥片を素材とし，整形は粗い調整剥離を左右側縁から施している。右側縁に刃こぼれが著しい。上端が赤化し，ススが付着している。５区Ⅰ層の出土で，長さ 8. 7 *cm*，

第13図　(1～17) 第5次調査出土石器　〈———〉: 使用痕　———: 敲打整形痕　1/3 (但し 1～4は実寸大 13～15は縮尺1/6)



第14図（1～6）第5次調査出土石器

幅3.0 *cm*，厚さ1.3 *cm*を測る。

3. 打製石斧　（第13図6～11）

47点出土している。図示した打製石斧の石質，法量等は表8に示した。

4. 磨製石斧　（第13図12）

石質は砂岩で，一点のみの出土である。いわゆる乳棒状磨製石斧の基部片で，欠損部には僅かな潰痕が認められる。3区出土で，重量172.5 *g*を計る。

5. 石皿　（第13図13～16）

23点出土している。石質は16が緑泥片岩，13は閃緑岩，14・15は花崗岩である。出土した石皿は使用面がくぼみ，さらに雨垂れ石と称されるくぼみを使用面に有するもの（16），使用面がくぼむもの（13・14），使用面がくぼまず断面が長楕円形を呈するもの（15）に分けられる。13・14は2区，15は1区出土である。

6. 磨石　（第13図17）

石質は砂岩で表裏ともに一定方向に磨られている。また下端を除く全縁辺には敲打痕が顕著にみられ，敲石としても使用されたと思われる。5区Ⅰ層出土で，全長8.9 *cm*，最大幅4.7 *cm*，

最大厚 2.7 *cm*を測る。

7. 敲石　（第14図１・２）

１は石質が硬質の砂岩で自然礫を素材とし，左端及び右下端を使用している。３区Ⅱ層の出土である。２は石質が砂岩で，上端に敲打痕がみられる。また，欠損部がまさしく使用による欠損かあるいは破礫をそのまま素材としたのかは，定かでない。４区Ⅰ層出土である。

8. 使用痕・加工痕を有する剥片　（第14図３・４）

使用痕を有する剥片５点，加工痕を有する剥片４点の計９点が出土している。図示した２点を除き，ほかの７点は石質が黒曜石の剥片である。３は石質が砂岩で，右側縁に磨滅痕と刃こぼれが，基端・先端には加工痕が，先端中央には入念な敲打痕が認められる。５区Ⅱ層出土である。４は石質が片岩で，右側縁に加工痕がみられ，基部左側縁を欠損している。３区Ⅱ層出土。

9. その他　（第14図５・６）

５は石質が砂岩で，打製石斧と同様の調整剥離を全縁辺に施し，さらに敲打し，整形されている。とくに基端の敲打痕が顕著である。表面は刃部に対しやや右上に斜行して磨痕が認められる。５区Ⅰ層出土で，長さ 8.0 *cm*，幅 5.9 *cm*，厚さ 1.9 *cm*を測る。６は石質が緑泥片岩で，上端及び両側縁がよく研磨されている。下部は欠損し，原形は不明である。３区Ⅱ層出土で，長さ 4.4 *cm*，幅 1.7 *cm*を測る。

（小松）

註

＊1　1964年の松井新一氏らの調査（松井・藤間　1965），1965年の國學院大学久我山高校による調査（未報告）（「恋ケ窪跡調査報告Ⅰ」第２章３参照），本調査会が1977年に実施した調査（第１次調査）を指す。

＊2　安孫子・広瀬・秋山・小松　1979「恋ケ窪遺跡調査報告Ⅰ」

Ⅲ　第6次調査

恋ケ窪遺跡の調査は，今日まで幾度となく実施されて来たが，そのほとんどが集落範囲の中心部分と想定される地点を対象としてきた。しかも開発行為等に伴う事前調査といった極めて限られた範囲の調査であり，恋ケ窪遺跡全体における集落形態等はほとんど検討されてこなかった。そこで遺跡西域の状態を把握することを目的として第6次調査を実施した。調査地区は西恋ケ窪1丁目172～178，201～204番地で，調査期間は1978年1月10日より同年2月16日までである。調査面積は約337㎡である。

1.　調査概要・層序

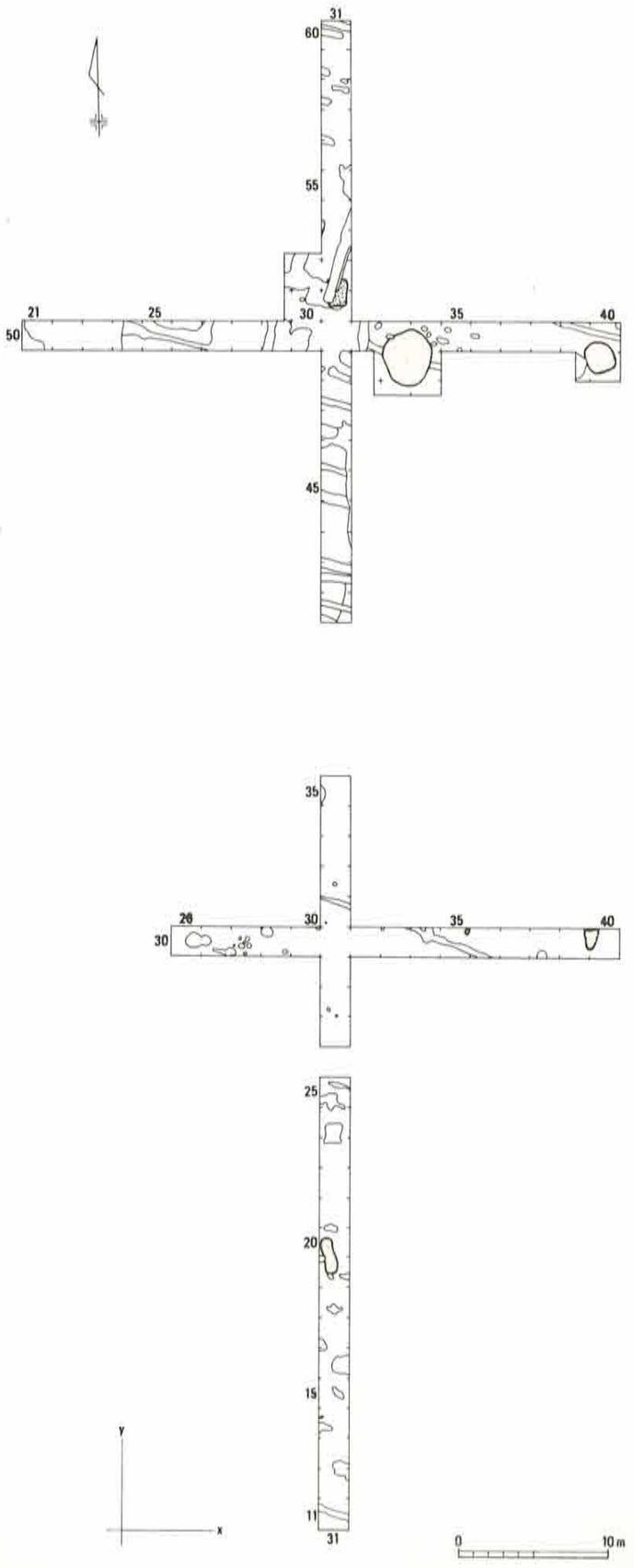
発掘区は調査対象とした畑地の南東隅を基点とし，座標軸を磁北に合わせ2m幅のトレンチを設定した。トレンチは長さ100mの南北トレンチと，これに直行する長さ40mと30mの2本の東西トレンチの計3本を設定した。南北トレンチの中央部に農道が走り調査区が区切られるため，ここを境として北側と南側に調査区が便宜上分けられた。調査前の表面採集によると北側調査区の畑地では遺物の散布がほとんど認められず，南側調査区の畑地では東側にやや密な遺物散布が認められ，南側から西側にかけてはまばらな状況であった。こうした点から南側調査区東西トレンチの東側付近が恋ケ窪遺跡における集落範囲の西限にあたるのではないかと想定した。調査の結果北側調査区でも住居址1軒，土壙1基が検出されたが，遺構内からの遺物出土も希少であり，ほかの地点では縄文時代の遺物は皆無であった。一方南側調査区では土壙1基，遺物集中1箇所が確認され，遺構外においても，縄文時代の遺物が僅かであるが検出された。なお，北側調査区では地下式壙1基が検出されている。このほか調査区全域にわたって現代の耕作によると思われる溝や落ち込みが多数検出され，何れもロームブロックを含む黒色土が充塡されていた。

層序は，

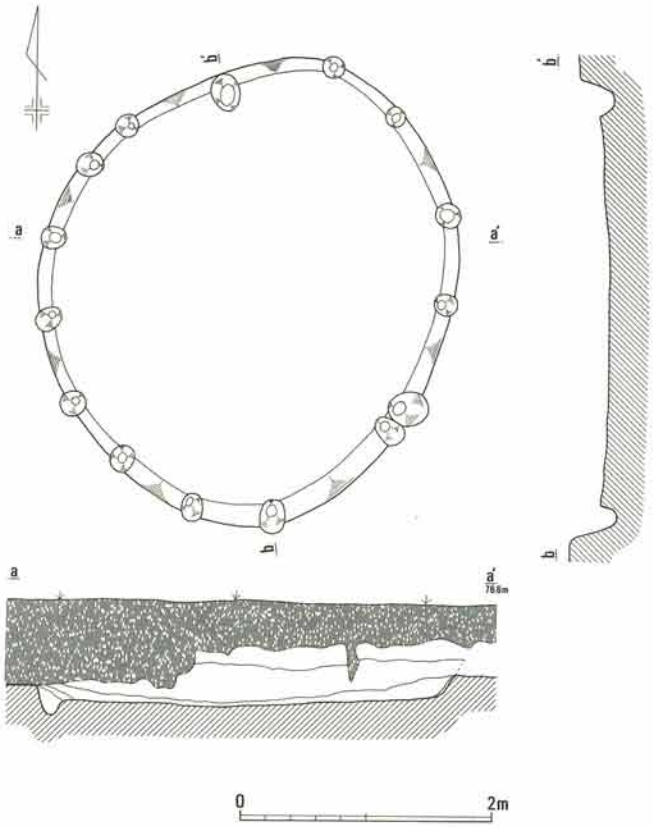
Ⅰ層　表土。黒色を呈し，耕作土で軟らかくパサパサして締まりがない。25～50cmの層厚を測る。

Ⅱ層　黒褐色土。堅く締まり，遺構はこの層中より掘り込まれる。本層は，南側調査区で10～20cmの層厚を測るが，北側調査区においては遺構の検出された東西トレンチ東側（32～40，50）で僅かに確認されるにとどまる。また北側調査区の南北トレンチ（31，41～60）及び東西トレンチ西側（21～31，50）ではⅡ層が全く認められずⅠ層より直接ローム層へ移行している。

Ⅲa 層　ローム漸移層。



第15図　第６次調査発掘区全体図（1/400）



第16図　第６次調査18号住居址実測図　(1/60)

Ⅲｂ層　黄褐色軟質ローム層。

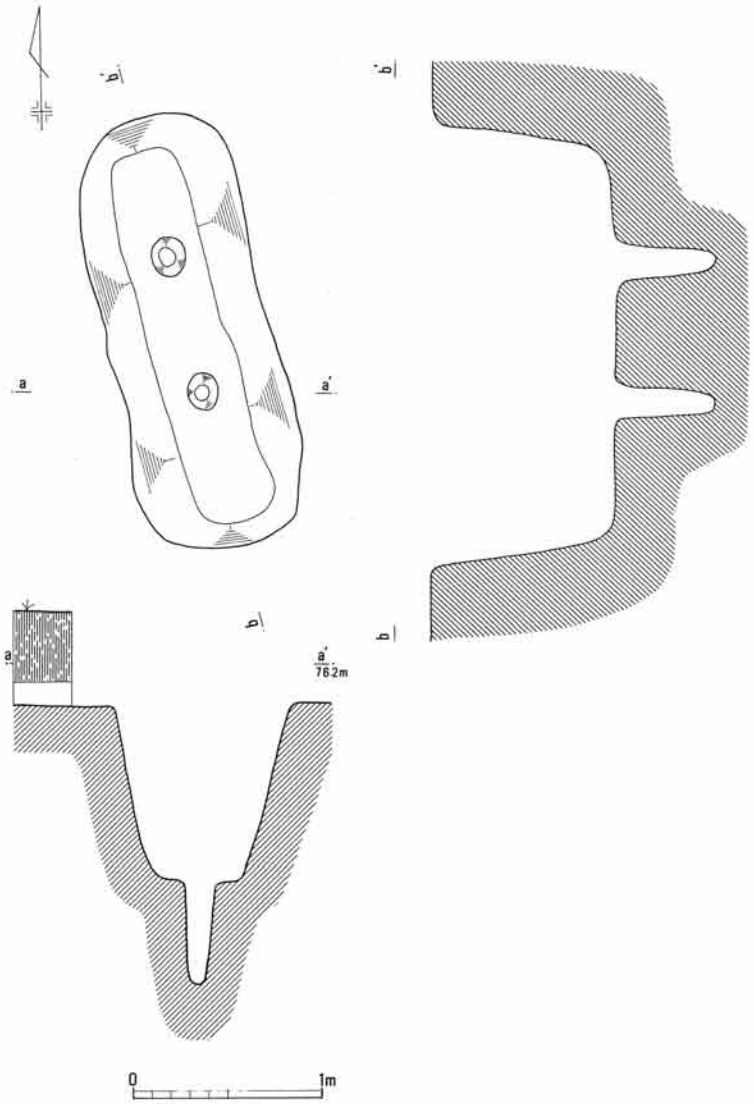
（広瀬）

2.　遺　構（第16～20図，図版14～16）

第６次調査で検出された遺構は住居址１軒，土壙２基，遺物集中地点１箇所である。

18号住居址

（33・34，49・50）区に位置し，やや小形の住居址である。形状は長径3.8ｍ，短径3.2ｍの楕円形プランを呈する。壁は緩やかに立ちあがり，壁高は12～24cmを測る。床面は壁際がやや高く中央部が僅かにくぼむ形状を示す。炉址は認められず，柱穴は15本検出されすべて壁に沿い50～70cmの間隔で廻っているが，南東隅だけが１ｍと間隔をやや広げている。柱穴の径は20～30cmで，床面下の深さ10cm程と浅く，心持ち外に開く形状を呈している。住居址覆土は壁際に黄褐色土が僅かに認められ，中央上部では赤色スコリア粒を含む黒褐色土，下部床面から

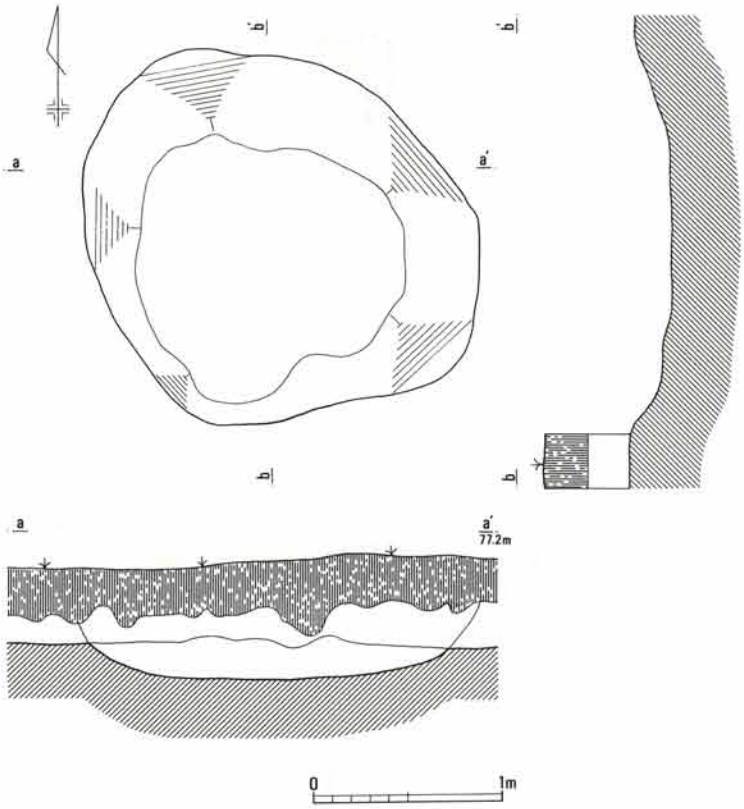


第17図　第６次調査14号土壙実測図（1/40）

壁際にかけては上層よりやや暗く炭化物を多く含む土層を示している。遺物は非常に少なく，土器は140点のみである。

14号土壙

（31，19・20）区にかけて検出。形状は長軸235㎝，短軸85㎝の長楕円形プランを呈する。遺構確認面からの掘り込みは90～95㎝と深く，壁は明瞭で，ほぼ垂直に立ちあがっている。床面は平坦で，２本のピットが等分に位置し，ピットは双方とも径が20㎝で，深さは床面下55㎝を測る。土壙覆土は２層に分けられ，上層は炭化物を若干含む黒色土，下層はローム質の黄褐色土である。土壙内より遺物は検出されなかった。なお，本土壙の両側にはローム層が若干掘



第18図　第６次調査15号土壙実測図（1/40）

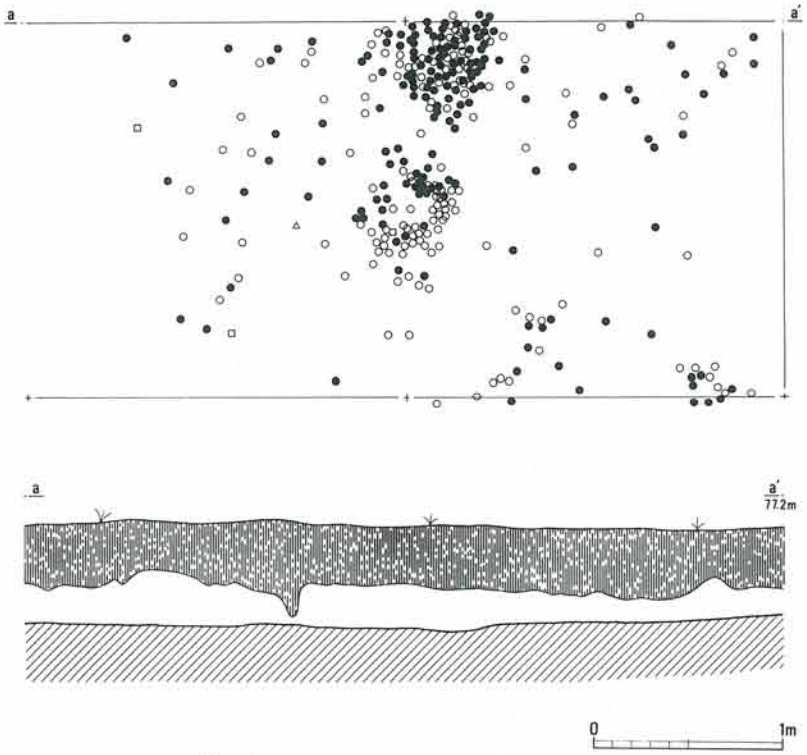
り込まれ，また土壙南壁付近より加曽利ＥⅠ式土器（第21図６）が出土していることより，本土壙と重複して何らかの遺構が存在するとも考えられよう。

15号土壙

（39～40，49～50）区に位置する。形状は直径２ｍ程の不整円形プランを呈し，断面は浅い皿状を示し，立ちあがりは緩やかである。遺構確認面からの深さは15cmと浅く，壁，床面とも不明瞭である。覆土はスコリア粒，炭化粒を含む暗茶褐色土である。遺物は土壙覆土上部より勝坂式期の土器が出土している。

遺物集中

（39～40，30）区のⅡ層中に遺物が比較的まとまって出土する箇所が検出された。集中する範囲はトレンチ北側の調査区域外に広がっており明らかでない。東西の広がりは3.5ｍ程で，中央部に２箇所の密に集中する部分が存在し，その周辺は散漫となっている。なお，２箇所のうち南側の集中部は大きな礫を中心に80cm×60cmの範囲に多量の破礫と石皿の破片が一点，そして，僅かながら土器の出土をみる。北側では東西80cm，南北80cm以上の範囲に，多量の土器片と少量の礫が集中している。周辺には礫が散漫に分布し，土製円板，打製石斧が各１点出土



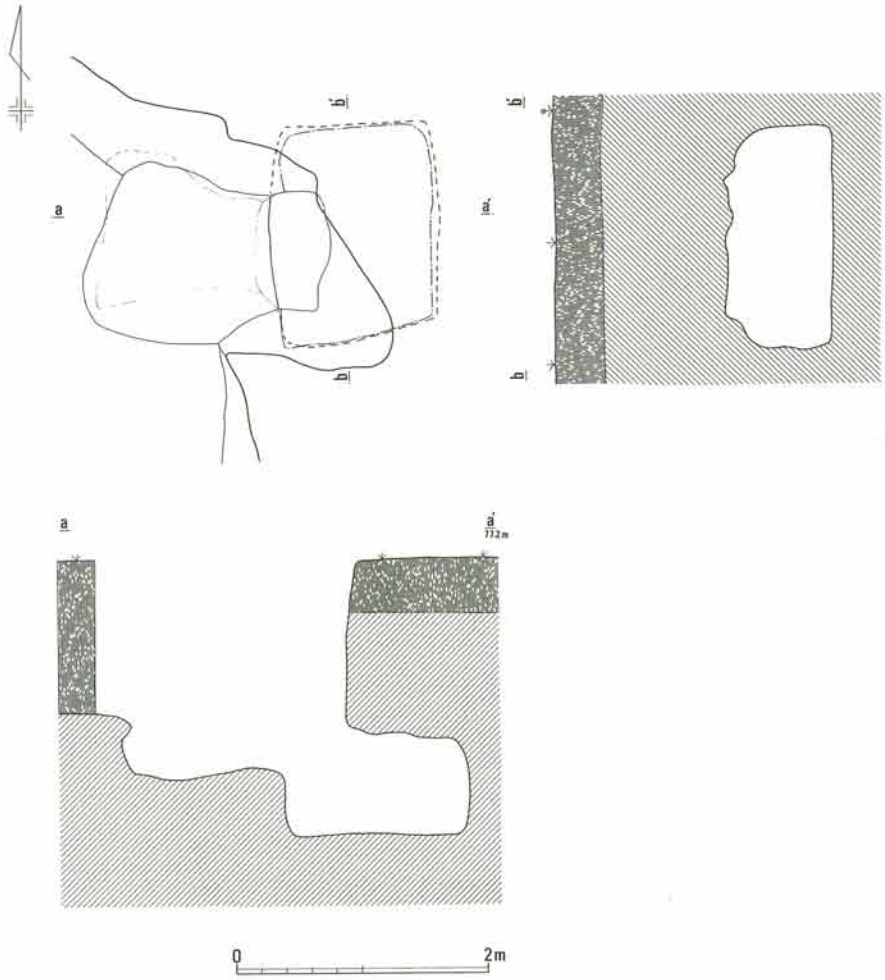
第19図　第６次調査遺物集中実測図（1/40）

している。また，出土した土器で時期の判明したものは，すべて勝坂Ⅲ式であり，５個体を図示し得た（第21図１～４・７）。

地下式壙

（31，51～52）区に位置する。西側に入口部をもつが上部を削平されている。入口部は120㎝×80㎝～120㎝の方形を呈する。本体は1.5ｍ×1.8ｍの隅丸方形を呈し，天井部までの高さは80㎝である。地下室の壁等には掘削による工具痕は認められなかった。壁面は直立かやや彎曲ぎみに立ちあがり天井部へ続く。床面は平坦でピット等は存在しない。地表より床面までは約2.2ｍ，入口部床との段差は50㎝程である。覆土は入口部より流れ込んだロームブロックやローム粒子を多量に含み粘性のない黒色土であるが，下部ではやや粘性が増す。遺物は入口部覆土上部より陶器片が数点出土したにとどまる。

（広瀬）



第20図　第６次調査地下式壙実測図　(1/60)

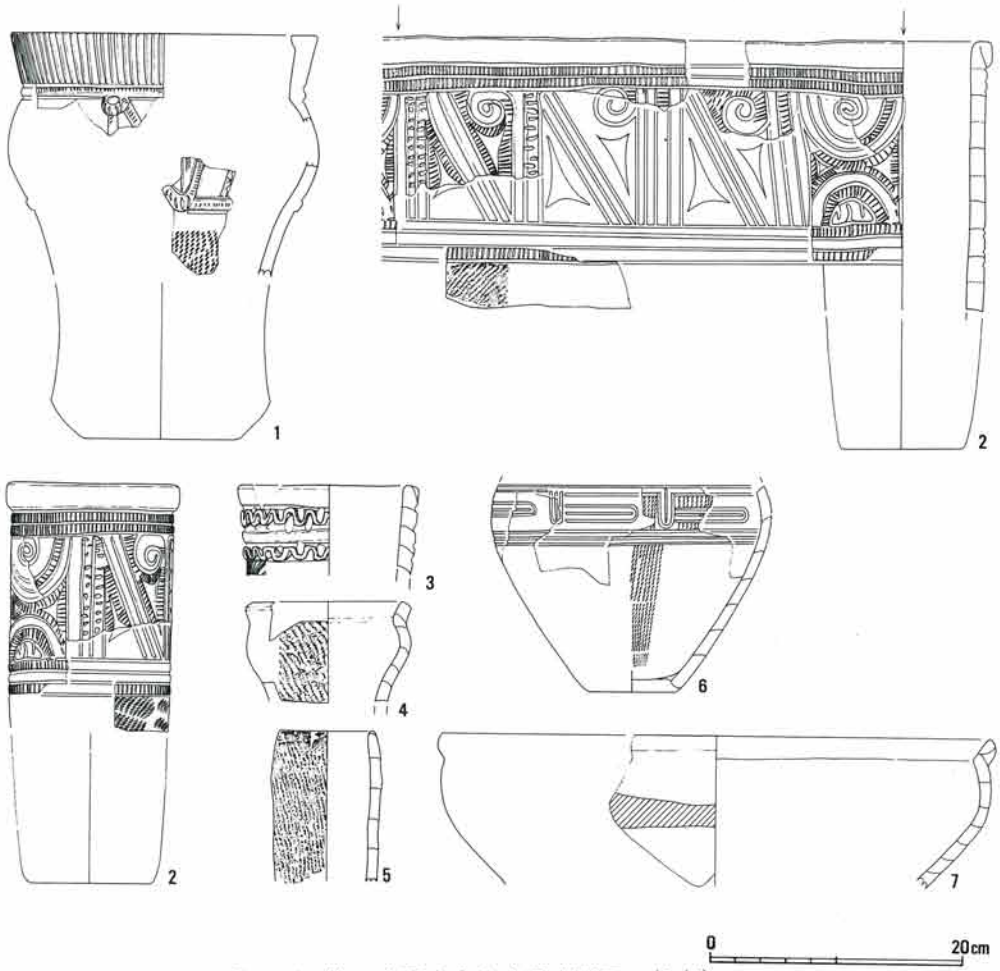
3. 遺　物

a．土　器（第21図１～７，図版17）

第６次調査地区では住居址１軒，土壙が２基検出されたが，これらの遺構からは実測出来得る破片は出土しておらず，写真図版のみとした。（38・39，30）区にて遺物の集中が認められ，そこからは実測可能個体が数個体出土しているが，調査面積が他次調査より広い割には土器量は少ない。

（38・39，30）区「遺物集中」（第21図１～４・７）

４個体図示したが，欠失部が多く実測図をとれない土器も多い。それらは写真図版のみとし



第21図　第６次調査出土土器実測図　(1/6)

た。この「遺物集中」の土器は，皆ほぼ同一期である。

1.　口径24cm。風化の著しい土器である。文様は口縁部に沈線が施され，その下位に隆帯を主体とした文様帯が存在するが，欠損部が多くモチーフの全容は窺い得ない。胴部に付されている縄文はＲＬである。

2.　口径12.6cm，現高20cm，推定高32cm。円筒形を呈する。文様は４単位で，そのうち３単位は三叉文と渦巻文を基調とした文様を表出し，残りの１単位は半円状のモチーフを基調としている。なお，４単位とも区画内に竹管状工具による刺突文を多用しており，胴下半部にはＲＬの縄文が施文されている。

3.　口径10.7cm，現高6.5cm。円筒形を呈する土器であるが，胴部以下を欠失している。文様は，隆帯に交互刺突を加えて波状効果を表出した隆帯が二段認められる。

4.　口径13cm，現高８cm。胴下半部を欠失し，口縁部の括れ以下に，節の太いＲＬの縄文が

施されている。

7. 口径43.2cm，現高12cmを測る浅鉢形土器である。現存部中程に隆帯の剥落が認められる。

遺構外出土土器（第21図5・6）

5. （36，30）区出土。口径7.6cm，現高12cm。小形の土器であり，口唇部を除いた全面にL{r/r の撚系文が施文されている。

6. （31，19）区出土。本区にまたがる14号土壙に伴うものではない。現高16cm，底径7cm。底部は一周しているが，文様の表出されている部分は全周の約⅓のみ現存する。文様は竹管状工具により表出されているが，当然欠失部にも展開していたものと思われる。地文はL{r/r の撚糸文で，全面に施文している。器厚は比較的薄く，焼成も良好である。

（秋山・山崎）

b・石　器（第22図，図版17・18）

6次調査で出土した石器は，石鏃（未成品を含む），石槍，掻器，打製石斧，磨製石斧，石皿，磨石，敲石，加工痕を有する剥片，剥片，その他の11器種 208点である。剥片は127点出土し，遺構別では，1号住居址より17点，1号土壙より8点，「遺物集中」より21点の出土をみる。また，礫は1312点出土しており，内訳は完形礫が180点，完形焼礫が12点，破礫が970点，焼破礫が150点である。遺構別にみると，1号住居址覆土から80点（熱を受けているもの9点），1号土壙から40点（熱を受けているもの2点），1号地下式壙から24点（熱を受けているもの1点），「遺物集中」から213点（完形礫14点，破礫172点，焼破礫27点）であり，ほかは遺構外の出土である。

以下，石器について各器種毎に述べる。

1. 石鏃　（第22図1・2）

2点の製品と1点の未製品が出土している。1は（33，48）区より出土し，石質は黒曜石で，二等辺三角形を呈し，基部には僅かなえぐりを作出している。先端部は欠損している。2は，石質が頁岩で，有柄の石鏃である。整形は入念に施され，裏面には主要剥離面を残す。また，先端・基端・左右両端をそれぞれ僅かに欠損している。（33，45）区出土。

2. 石槍　（第22図3）

石質は硬質の砂岩である。円礫から剥取した剥片を素材として，両側縁から調整剥離を施し，さらに敲打し，先端を作出している。表面基部には自然面を残している。また，先端部には刃こぼれと磨滅痕が認められる。（31，29）区Ⅰ層の出土で，長さ9.8cm，幅2.9cm，厚さ1.8cm，重量56.0gを計る。

3. 掻器　（第22図4・5）

4は石質が砂岩で，横長剥片を素材とし，剥片の先端を中心に，ほぼ半周して，刃部を作出

している。また，右半分は被熱により赤化し，右側縁にはススが付着している。（40，30）区出土で，長さ6.6㎝，幅7.5㎝，厚さ1.8㎝，重量91.5ｇを計る。5は石質がチャートで，縦長剥片を素材とし，刃部表面は，やや丸味を帯びて調整剥離を施している。刃部左側縁を欠損し，表面基部には，僅かながら自然面を残している。（39，30）区Ⅱ層出土で，長さ6.5㎝，幅（残存値）3.7㎝，厚さ1.6㎝，重量30.5ｇを測る。

4. 打製石斧　（第22図6～8）

総数47点出土している。完形品11点，欠損品36点である。図示した打製石斧の石質，法量等は表9に示した。

5. 磨製石斧　（第22図9）

石質は流紋岩で，基部片である。全体は，極めて入念に磨かれているが，基端は，調整剥離，敲打のまま残置されている。折れ口を除いては，被熱による赤化がみられる。（32，30）区Ⅱ層出土で，重量（残存値）120.0ｇを計る。

6. 石皿　（第22図10～13）

13は石質が礫岩で，10が閃緑岩，11・12が花崗岩である。13は，使用面にくぼみがみられ，10～12は使用面がくぼまず，断面が長楕円形を呈する。

7. 磨石　（第22図14・15）

14は石質が砂岩で，偏平な円礫を素材とし，全体に風化が著しいが，使用面は一定方向に磨られ，くぼんでいるのが看取される。重量は371.0ｇを計る。15は石質が閃緑岩で，偏平な円礫を素材とし，表面中央部には，僅かな打痕と，表裏面ともに磨痕がみられる。（31，16）区出土で，重量311.0ｇを計る。

8. 敲石　（第22図16～18）

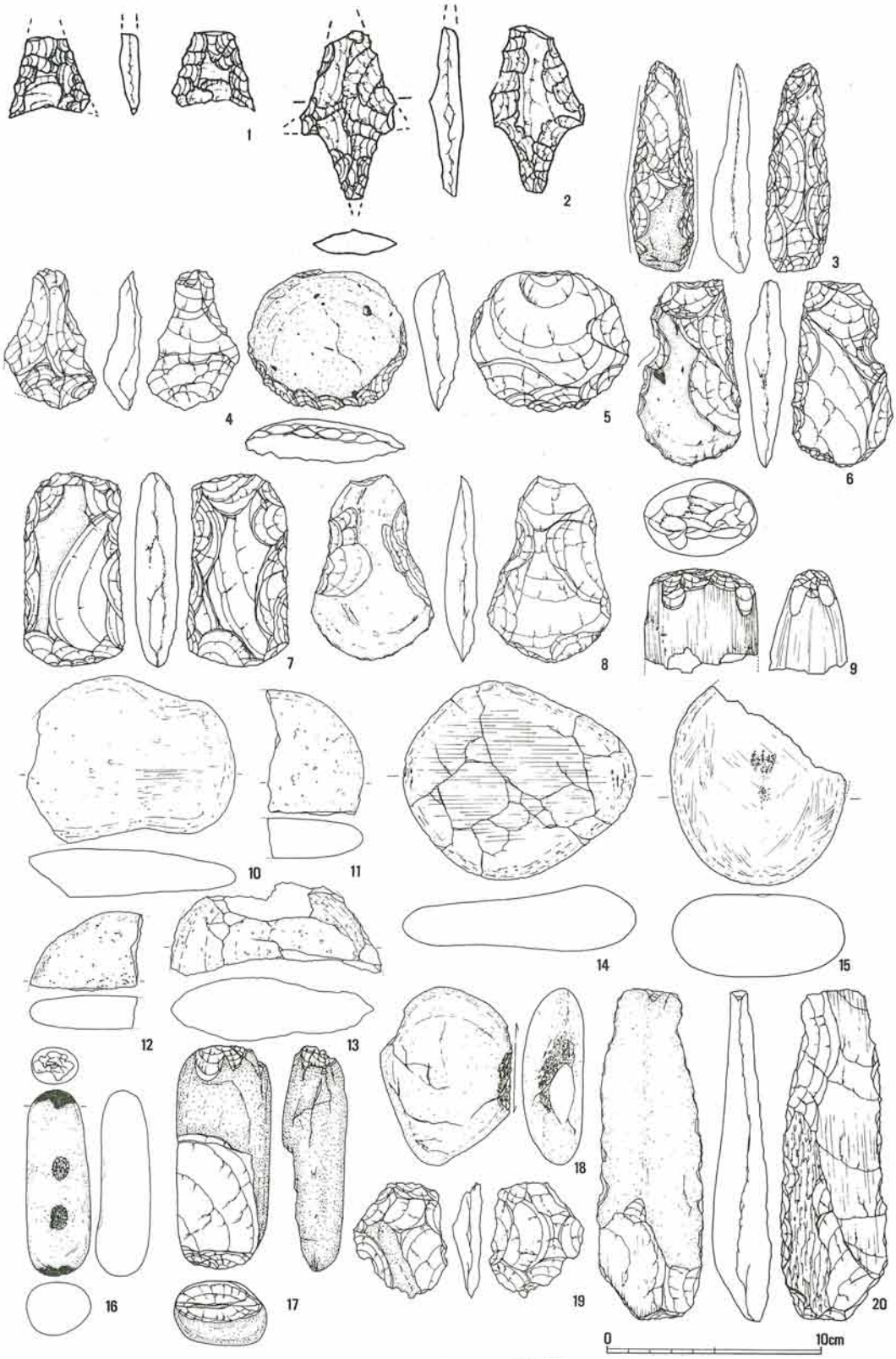
16は，石質が砂岩で，細長い円礫を素材とし，その上下両端に敲打痕が著しい。表面には深さ3㎜のくぼみが2箇所認められる。（37，30）区Ⅱ層の出土で，長さ17.7㎝，径6.0㎝，重量771.0ｇを計る。17は石質が硬質の砂岩で，偏平な細長い礫を素材とし，上下両端に敲打痕がみられる。（31，19）区Ⅰ層出土で，長さ10.6㎝，幅4.3㎝，厚さ3.0㎝，重量131.5ｇを計る。18は石質が砂岩で，偏平な円礫を素材とし，その左端に敲打痕がみられる。（37，30）区出土で，重量は196.0ｇを計る。

9. 加工痕を有する剥片　（第22図19）

3点出土している。うち2点の石質が黒曜石である。19は石質が砂岩で，打製石斧製作時の調整剥片と考えられる。（39，40）区「遺物集中」出土で，重量29.0ｇを計る。

10. その他　（第22図20）

石質は砂岩で縦長剥片の両側縁を僅かに調整している。裏面左側縁は研磨され，僅かに光沢



第22図（1～20）第6次調査出土石器　〜〜〜〜：使用痕　———：敲打整形痕　1/3（但し 1～2は実寸大 13～15は縮尺1/6）

がみられる。また，基端の表面左側には側縁に平行した線状痕が看取される。（28，50）区Ⅰ層出土で，長さ15.4㎝，幅4.9㎝，厚さ2.8㎝，重量191.0ｇを計る。

（小松）

c．中世陶器　（図版19）

地下式壙およびその周辺より常滑焼と思われる5点の中世陶器が出土している。

1は甕口縁部である。口縁近くで外反し，1.5㎝程の縁帯が形成されている。赤褐色を呈し，口縁内面に自然釉がかかっている。2は大甕底部である。色調は淡い赤褐色を呈し，器壁は1.5㎝前後の厚さを測る。内面には刷毛目整形が施され，胴部で横走し，底部近くでは斜走する。3～5は頸部から胴部にかけての破片であり，部分的に自然釉がかかっている。

以上の中世陶器はすべて細片で資料的に限られており，時期を明確にしがたい。ただ，1は口縁部の形態からして13世紀後半から14世紀前半に位置づけられよう。今後恋ケ窪遺跡における該期の遺構，遺物の増加，周辺遺跡[*1]等との関係から検討を加えることとしたい。

（広瀬）

註

＊1　恋ケ窪遺跡の南西500ｍに恋ケ窪堂址が位置し，中世陶器，古銭等が出土している。

＊＊　出土した中世陶器に関しては，埼玉県立歴史資料館の浅野晴樹氏に実見のうえ御助言を賜った。

Ⅳ　第７次調査

個人宅造建築工事による緊急調査である。調査地区は西恋ケ窪１丁目212番地。

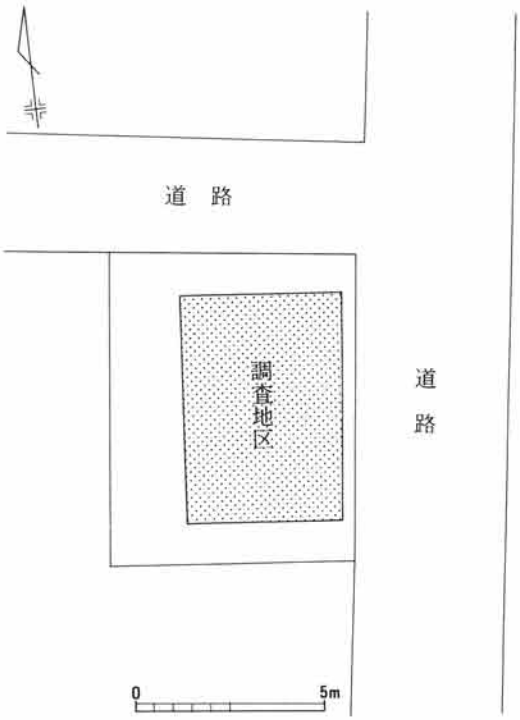
調査の契機は本地点で住宅建築工事により遺物が出土している旨地域住民から市教育委員会に連絡されたことによる。現地は既に敷地全体がローム層まで削平されており，断面に住居址が数軒確認された。ただちに協議を行い，工事を中断し調査を実施することとなった。調査は，削平によって確認された住居址が敷地外の道路にまで広がっており拡張が不可能な状況のため，断面の精査のみにとどまった。調査は1978年７月20日，21日の両日行った。

1.　層　序

断面の層序観察によると

Ⅰ層　表土。黒色土で40～50cmの層厚を測り，パサパサして締まりがない。遺物はほとんど含まない。

Ⅱ層　黒褐色土。30～40cmの層厚で，堅く締まりスコリア粒を微量に含む。遺構はこのⅡ層より掘り込まれている。



第23図　第７次調査地区全体図　（1 / 200）

Ⅲa層　ローム漸移層

Ⅲb層　黄褐色軟質ローム層。遺構は本層を約20cm掘り込んで構築されている。

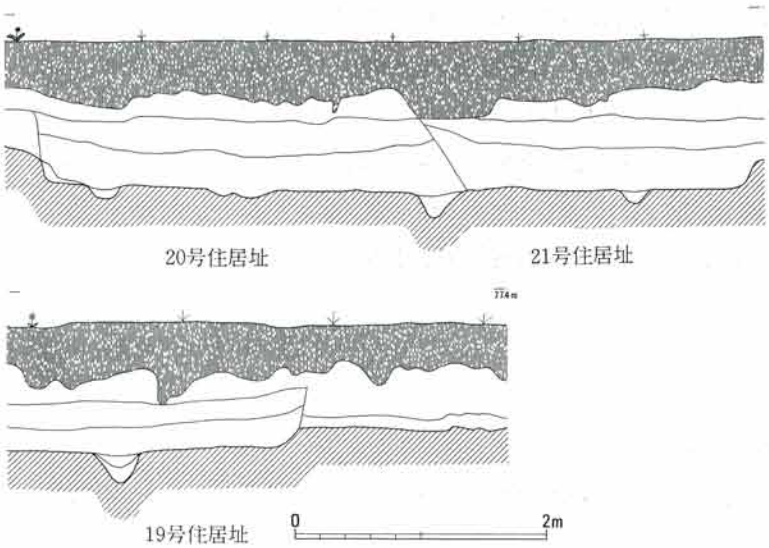
（広瀬）

2.　遺　構（第24図）

断面調査により南壁で１軒，東壁で２軒の計３軒の住居址を検出した。何れも平面形，規模等は明らかでない。

19号住居址

南壁東側で検出された。西壁立ちあがりは明瞭でローム層を15cm程掘り込んでいる。床面は平坦であり，柱穴が１本確認された。覆土は上層がスコリア粒，炭化物を少量含む暗茶褐色土で，下層は上部よりやや暗く，



第24図　第７次調査19号住居址、20号住居址、21号住居址断面図（1/60）

スコリア粒，炭化物を多量に含む層である。柱穴内には褐色土をみる。柱穴上部の覆土中（床面より20cm程上部）で胴下半部を欠失する勝坂式土器が圧潰された状態で１個体出土した（第25図１）。ほかには若干の遺物が検出されたにとどまる。

20号住居址

東壁北側で検出。南壁部は21号住居址によって切られている。北壁の立ちあがりは明瞭ではなく，立ちあがりより30cm程内側に周溝と思われる落ち込みが認められた。また，床面の状態は凹凸があり堅牢ではなく，柱穴が南側で１本確認された。なお，本住居址のほぼ中央で床面がくぼみ，焼土が検出されたが，おそらくは炉址と思われる。覆土は壁際に黄褐色土が認められるほかは21号住居址と大差はない。覆土中からは加曽利ＥⅠ式土器の破片が若干検出された。

21号住居址

東壁南側で検出され，20号住居址を切って構築されている。確認された規模は南北2.2ｍ程である。南壁は急傾斜で立ちあがり，壁面は明瞭である。住居はローム層を20cm程度掘り込んで構築し，柱穴と思われる深さ10cmのピットが１本確認された。床面は20号住居址と同一レベルであるが，本住居址の床面は平坦で堅固である。覆土はスコリア粒，炭化物の量等が若干異なるだけで色調，粘性等は他の住居址覆土と同様である。遺物は加曽利ＥⅡ式土器が若干検出されたにとどまる。

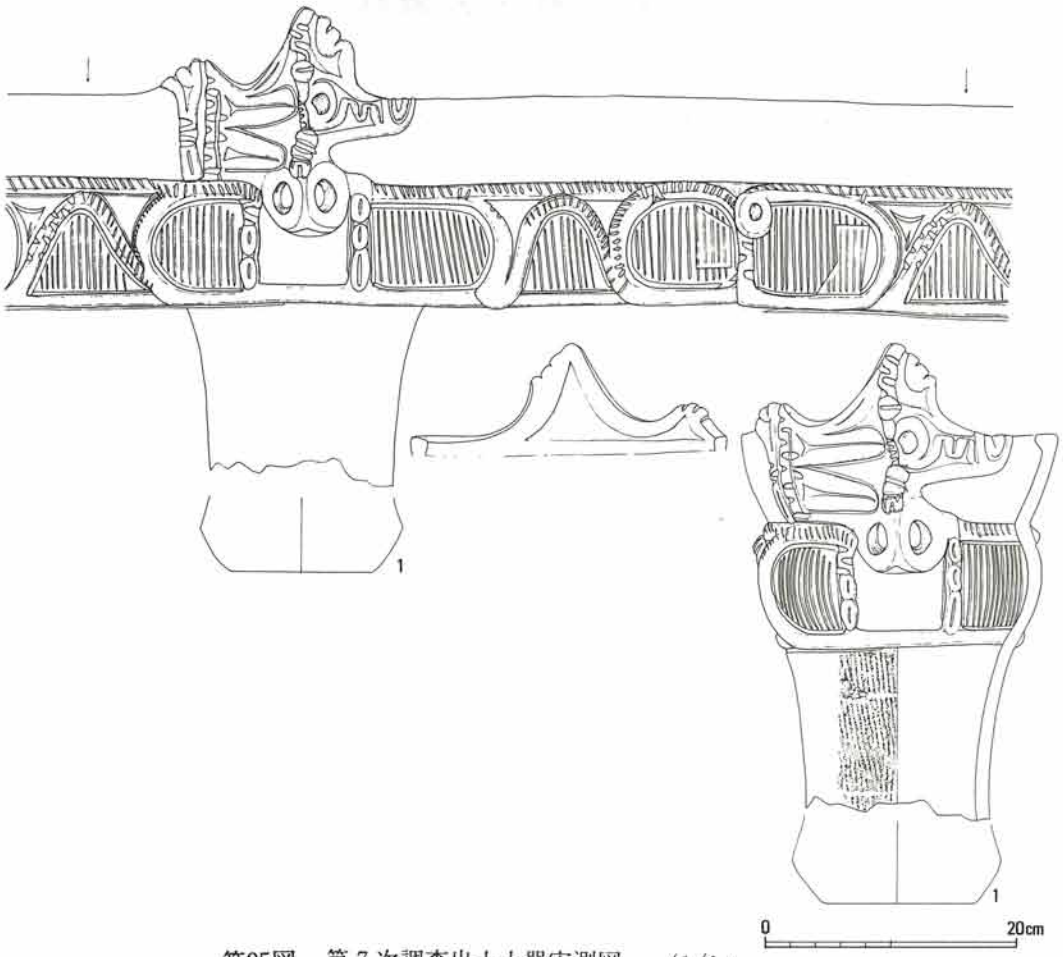
（広瀬）

3. 遺　物

a・土　器（第25図1，図版19・20）

第7次調査にいたるいきさつは本章冒頭で述べてあるとおりであり，ここに図示する1個体はカッティングされた断面に現われていた土器で，19号住居址に属するものである。

1. 口径24.8cm，現高31cm（把手頂まで38.3cm），推定高45cm。器形は口縁部がやや外傾し，頸部にやや膨らみを持つ，そして，底部は屈折底を呈すると思われる。文様帯は頸部に展開しているが，そこから口縁部にかけて半肉彫状に表出された，口縁全周の約⅓にわたる大形の山形状把手が一箇所表出されており，この土器の正面を規定している。頸部文様帯は楕円形及び三角形に区画し，区画内は竹管状工具による沈線が数条表出されている。そして，この文様帯中，把手のちょうど裏側にあたる部分に，円形の小突起が一つ配されている。胴部にはR{L{



第25図　第7次調査出土土器実測図　（1/6）

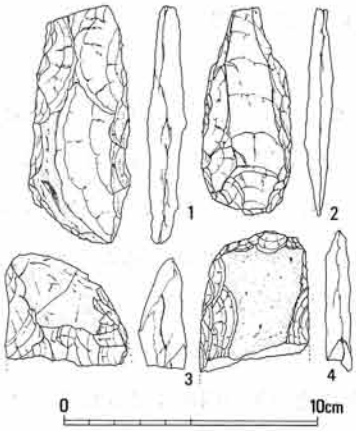
の多條の縄文が付されており，胎土には細砂と金雲母末が多く混入されている。なお，大形の山形把手の裏面には三角形の削り取りが認められる。

（秋山・山崎）

b・石　器（第26図，図版23）

7次調査では，石器4点，礫2点の計6点が出土している。いずれも1号住居址覆土より出土しており，石器はすべて打製石斧である。（第26図1～4）。石質，法量等は表10に示した。

（小松）



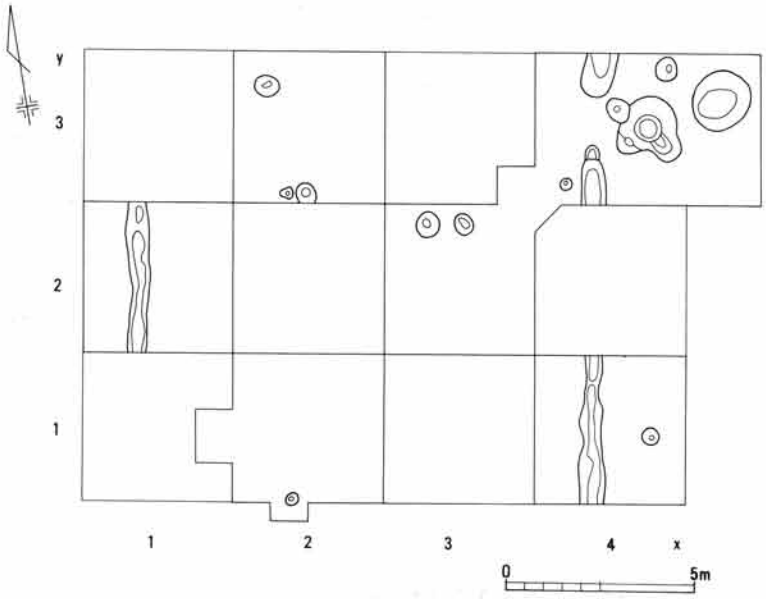
第26図　（1～4）第7次調査出土石器1/3

V　第8次調査

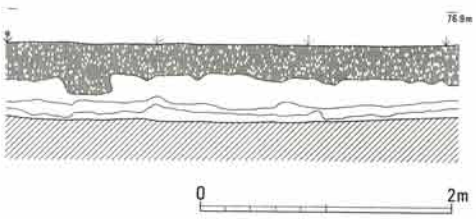
調査地区は西恋ケ窪1丁目206番地に位置し，恋ケ窪遺跡の北縁を占める。個人住宅の建築に伴う事前調査として1978年10月30日より11月20まで実施した。

1.　調査概要・層序

発掘区は敷地南西隅を基点とし，4mグリッドを設定した。調査は市松模様の隔区ごとに行



第27図　第8次調査発掘区全体図(1/200)



第28図 第８次調査地区層序 (1/60)

い遺構等が確認された場合は拡張することとした。調査面積は約107㎡である。調査の概況は（４，３・４）区で土壙が，そのほかは，ピット数基，溝状遺構が２本検出された。また，遺物も極めて少なく調査区全体で土器片22点，石器３点を数えるだけである。

層序は表土よりローム層まで30～50cmと浅く，遺物含包層であるⅡ層もおのずと薄い。

Ⅰ層　表土。黒色を呈し，パサパサして締まりがない。30cmの層厚である。

Ⅱ層　暗茶褐色土。堅く締まりスコリア粒を若干含む。10～20cmの層厚を測り，部分的には５cmに満たないところもある。

Ⅲａ層 ローム漸移層。

Ⅲｂ層 黄褐色軟質ローム層。

（広瀬）

2. 遺　構（第29図，図版21・22）

検出された遺構は土壙２基，ピット11基，溝状遺構２本である。

16号土壙

（４，３）区に位置する。西壁部に２基のピットが重複し，形状は長軸1.9ｍ，短軸1.4ｍの不整円形プランを呈する。遺構確認面からの深さは約50cmである。断面は擂り鉢状を呈し，壁面は明瞭でない。覆土は赤色スコリア粒を若干含む暗茶褐色土である。土壙内に遺物は認められなかった。

17号土壙

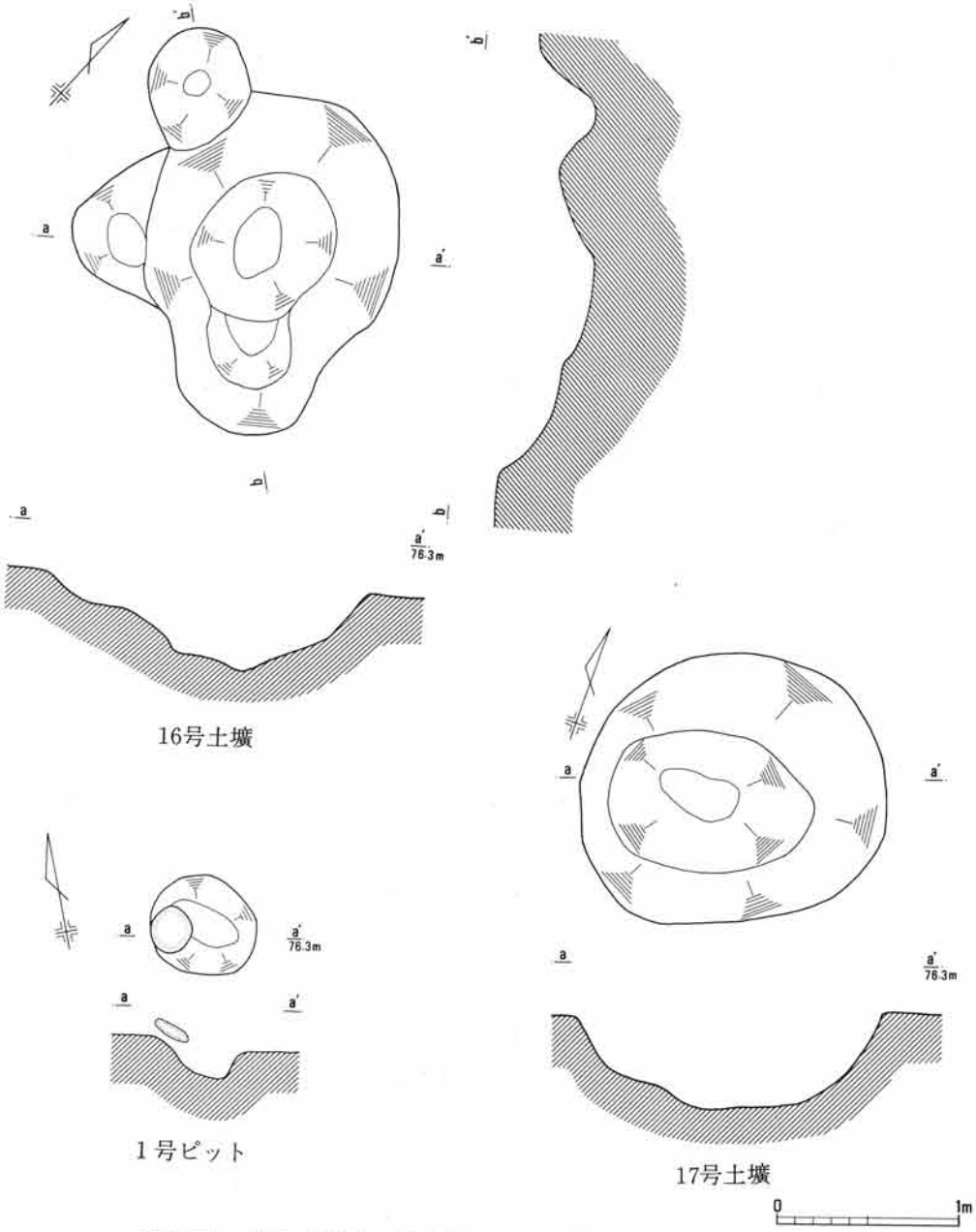
（５，３）区に位置する。形状は径1.7ｍの不整円形プランを呈し，遺構確認面からの深さは50cmを測る。断面は椀状を呈する。本土壙からも遺物は出土していない。

１号ピット

（３，２）区に位置する。Ⅱ層下部より直径25cm程の偏平な石が検出され，周囲を精査したところ下部に落ち込みが認められた。形状は58cm×54cmの円形プランを呈し，遺構確認面からの深さは25cmである。立ちあがりは西側が緩やかであるが，東側ではやや急となっている。検出された偏平な石は，ピット西壁に位置し中央部に傾いた状態であった。なお，ピット内からは遺物は出土していない。

溝状遺構

（１，２）区及び（４，１）から（４，３）区にかけての２本が検出された。何れも南北に



第29図　第８次調査16号土壙、17号土壙、１号ピット（1/40）

走る溝で，幅40～60cm，深さ35～60cmである。溝はⅠ層中より掘り込まれており，覆土はⅠ層と類似した締まりのない黒色土である。溝内からは遺物は出土しておらず，時期，性格等は不明である。

（広瀬）

3. 遺　物（第30図，図版23）

8次調査では，土器22点，石器6点，礫11点が出土している。土器はすべて細片で実測可能個体はない。石器は，打製石斧，敲石，石皿の各1点と，剥片3点である。

1. 打製石斧　（第30図1）

（2，3）区Ⅰ層出土。石質，法量等は表11に示した。

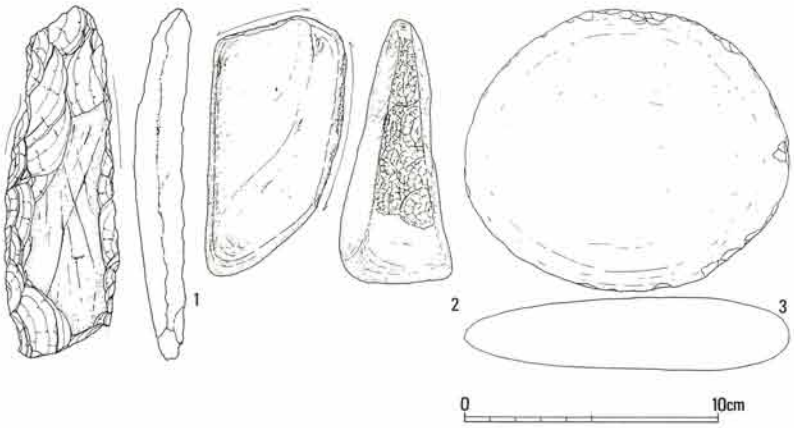
2. 敲石　（第30図2）

石質は砂岩で，やや偏平な長楕円形の礫を素材とし，上端及び右側縁に敲打痕が認められ，とくに右側縁の敲打痕は顕著である。（2，3）区Ⅰ層出土で，重量266.5 g を計る。

3. 石皿　（第30図3）

石質は砂岩で大形の偏平な円礫を素材とし，表裏面ともに僅かな磨痕と，側縁にはほぼ全周にわたって潰痕が認められる。断面は長楕円形を呈する。（3，2）区1号ピット出土で，重量4,350 g を計る。

（小松）



第30図（1～3）第8次調査出土石器　：使用痕　：敲打整形痕

Ⅵ　1964年度発掘資料

1.　再整理にいたる経緯

1964年度の調査は松井新一，藤間恭助両氏が中心となって行われ，報告文も公表されている（松井・藤間　1965）。しかし，それから十数年たった現在，恋ケ窪遺跡にも宅地化の波は押しよせ，既にその全容を究明することは非常に困難になっている。このような状況の中で，少しでも恋ケ窪遺跡の内容を把握し，全容究明に近づくために，発掘調査以外にかつて発掘された資料等についても極力再整理ないし再録を行っていくことも当調査会の一つの活動目標となっている。

そして，1977年に当調査会は1964年度調査地区と一部重複する地区を発掘したことから（第1次調査），整理作業に入る際1964年度発掘資料の再整理が計画された。しかし，諸般の事情により1次調査の整理自体に遅れが出てしまったため，再整理は断念せざるを得なかった。1979年度になり，数件の緊急調査は入ったものの，第4～8次調査の整理作業は順調に進行した。そこで，当調査会は1979年10月に市教育委員会を通じ，保管先である国分寺市立第一中学校（1964年当時松井氏が同校の学校長であったところから，保管はずっと同校でなされている）に連絡をとり借用の許可をいただき，以後1980年3月まで恋ケ窪遺跡調査会事務所において整理作業を行った。

なお，借用した遺物は整理終了後，すべて国分寺市立第一中学校に返却した。

（秋山）

2.　遺　物

a・土　器　（第31図1～第34図35，図版23～31）

1964年度発掘資料は小片に至るまですべて借用し，地点毎に分類・接合を行なった。[*1] 表6に示した如く総数は749点を数え，そのうち実測個体は，復元実測を含み35個体を数える。

以下，地点別に説明していく。

A地点　（第31図1～3）

本地点では住居址が2軒検出されている。

1.　口径29.5㎝，現高13.2㎝。口縁部には隆帯表出の渦巻文による区画が認められ，区画内にはＲＬの縄文が施文されている。頸部は無文であり，また，現存部最下端には，頸部文様帯と胴部文様帯を画する沈線が認められる。

2.　口径17㎝，現高11㎝。口縁部の全周の約½と胴下半部を欠失している。口縁部文様帯に

は楕円区画からのびる沈線にて描き出した渦巻文が見られ，胴部には沈線間を無文化した懸垂文と，沈線による蛇行懸垂文が認められる。なお，口縁部区画内と胴部には，共に複節の縄文ＬＲＬが施文されているが，回転方向が異なり，口縁部は横，胴部は縦回転である。

3. 推定口径44cm，現高20cm。口縁部が外傾し，肩が張る浅鉢形土器である。文様は貼付けの隆帯による楕円区画文を４単位表出し，その区画間の３箇所には隆帯による渦巻文を配している。なお，楕円区画内には，竹管状工具による沈線文を充塡している。

B 地点　（第31図４）

4. 口径16cm，現高11.7cmを測り，胴下半部を欠失している。口縁は緩い波状を呈し，口縁部文様帯には貼付けの隆帯により渦巻文を表出しているが，崩れが目立つ。胴部には沈線間を無文化した懸垂文が認められる。また，口縁部と胴部に施文されている縄文はＲＬである。

C 地点　（第31図５～10）

本地点においても住居址が２軒確認されている。

5. 口径16.8cm，現高12.8cm，推定高18cm。炉に転用された比較的小形の土器である。口縁は緩やかな波状を呈し，文様は条線地文上に，沈線を口縁部に２本，胴部中位に３本廻らせ，その間を２本の沈線により弧線文を表出している。なお，胴部中位に廻る沈線文以下の現存部には弧線文や懸垂文は認められない。

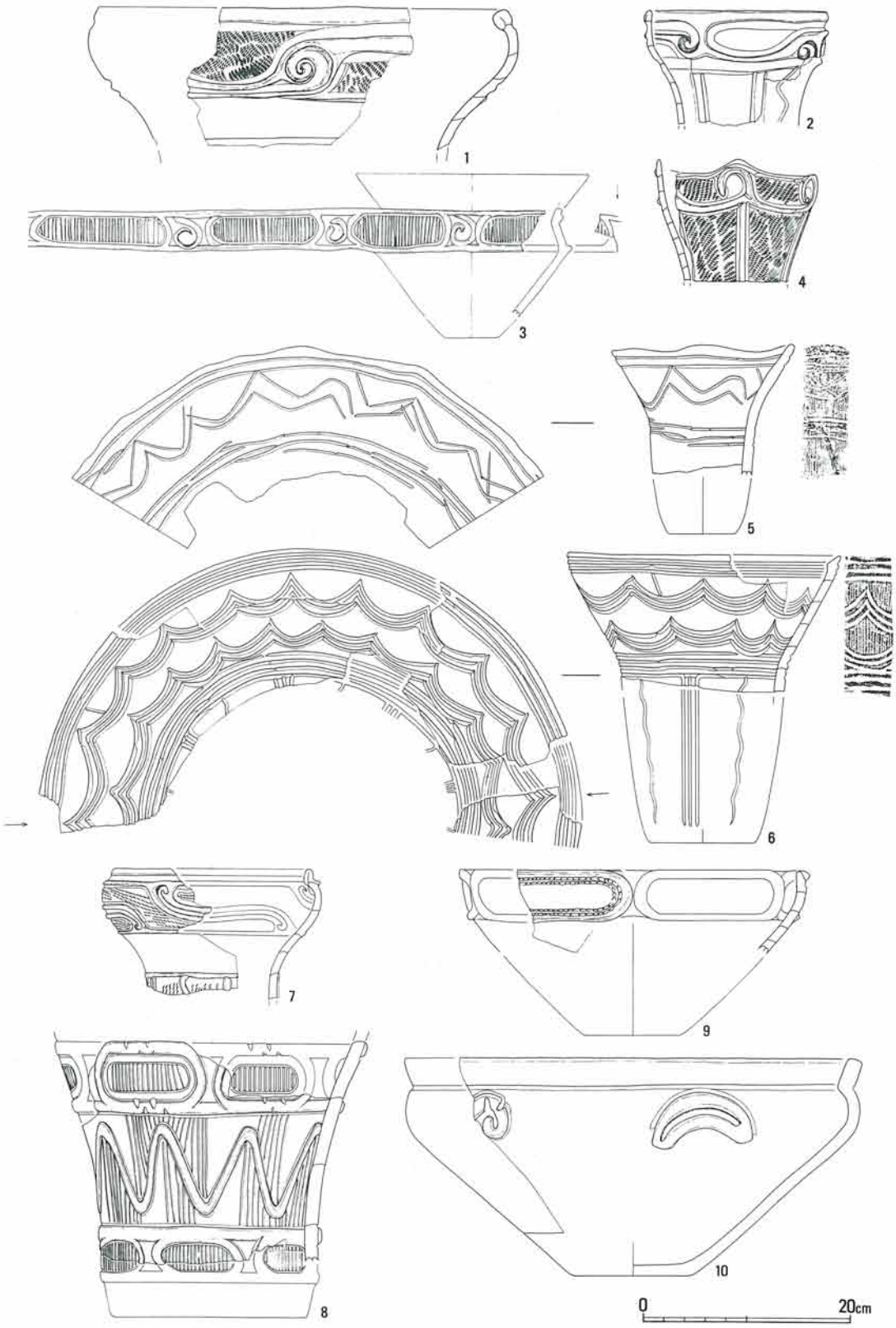
6. 口径26cm，現高13.4cm。器形は，口縁部から胴中半にかけて徐々にすぼまり，胴下半で膨らみを見ずに底部に移行する。文様は，口縁部に３本，胴括れ部に４本の沈線が廻り，その間を３本の沈線にて表出された弧線文が二段描かれている。また，胴括れ部の沈線下には沈線による蛇行懸垂文と，３本単位の懸垂文が認められる。地文は櫛状工具による条線である。

7. 口径18cm，現高12.4cm。キャリパー形を呈する。口縁部文様帯には，横走する撚糸文Ｌ{ｒの地文上に，隆帯によりやや崩れたクランク状のモチーフが表出されている。頸部は無文であり，胴部は頸部と画する隆帯より，やはり隆帯により表出された懸垂文と蛇行懸垂文が交互に垂下している。胴部の地文も口縁部同様Ｌ{ｒの撚糸文である。

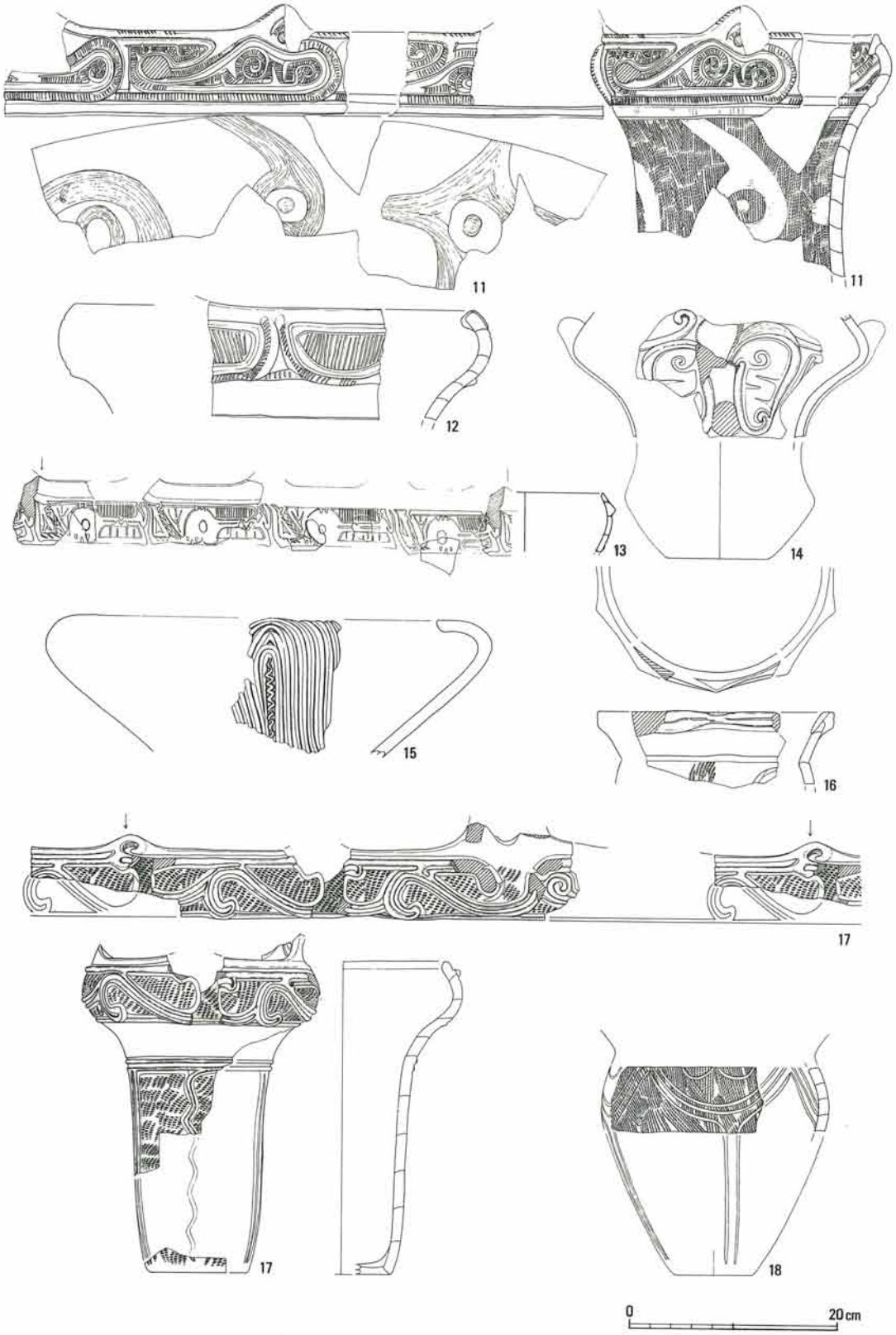
8. 現高21cm。口縁部と底部を欠失しているが，キャリパー形を呈すると思われる。現存部における文様は上から楕円区画文，大波状文，楕円区画文の順に表出されており，欠失している口縁部には重三角区画文が表出されていたものと思われる。なお，楕円区画文及び大波状文の文様単位は８単位であり，整形の丁寧な土器である。

9. 口径23cmを測る浅鉢形土器である。口縁部に貼付けの隆帯による楕円区画文が表出されており，その区画どうしの連接部は競り上がりを見る。区画内には隆帯に沿って阿玉台式に特有の丸味を帯びた連続刺突文が二列施されている。胎土には金雲母が多く混入されている。

10. 口径44cm，器高21.7cm，底径12cmを測る大形の浅鉢形土器であり，全周の約½が現存す



第31図　1964年度調査出土土器実測図（1/6）(但し、3は1/12)



第32図　1964年度調査出土土器実測図　(1/6)　(但し、13は1/12)

る。文様は口縁部の括れ下に貼付けの隆帯が認められるが，全容は不明である。また，器表裏面とも良く研磨されている。

E 地点　（第32図11～第33図24・第34図35）

本地点は「日時の余裕がなく調査を打ち切って埋め戻した。」（松井・藤間　1965）区域であるが，復元個体が多いこと，しかもそれらが時間的にもまとまりを見ることより，2軒ないし1軒の住居址の存在が充分予想される。

11．口径25.6㎝．現高22㎝，突起頂まで24㎝。胴下半部を欠失するが，口縁部は全周の約60％，胴部は約70％現存する。口縁部文様帯は隆帯にて区画を表出し，区画内は沈線と竹管状工具による連続刺突文にてモチーフを表わしている。また，口縁には小突起が1個現存しているが，本来は4箇所に配されていたと思われる。胴部にはL{$^{r}_{r}$ の撚糸文の地文上に暗文が3箇所表出されているが，欠損部にもう一つ表出されていたかも知れない。なお暗文には磨消す際の擦痕が看取出来る。胎土，焼成とも良好で，整形も丁寧な土器である。

12．口径38㎝，現高10.6㎝。貼付けの隆帯による区画が認められるが，欠失部が多く全容はうかがい得ない。整形は丁寧で焼成も良い。

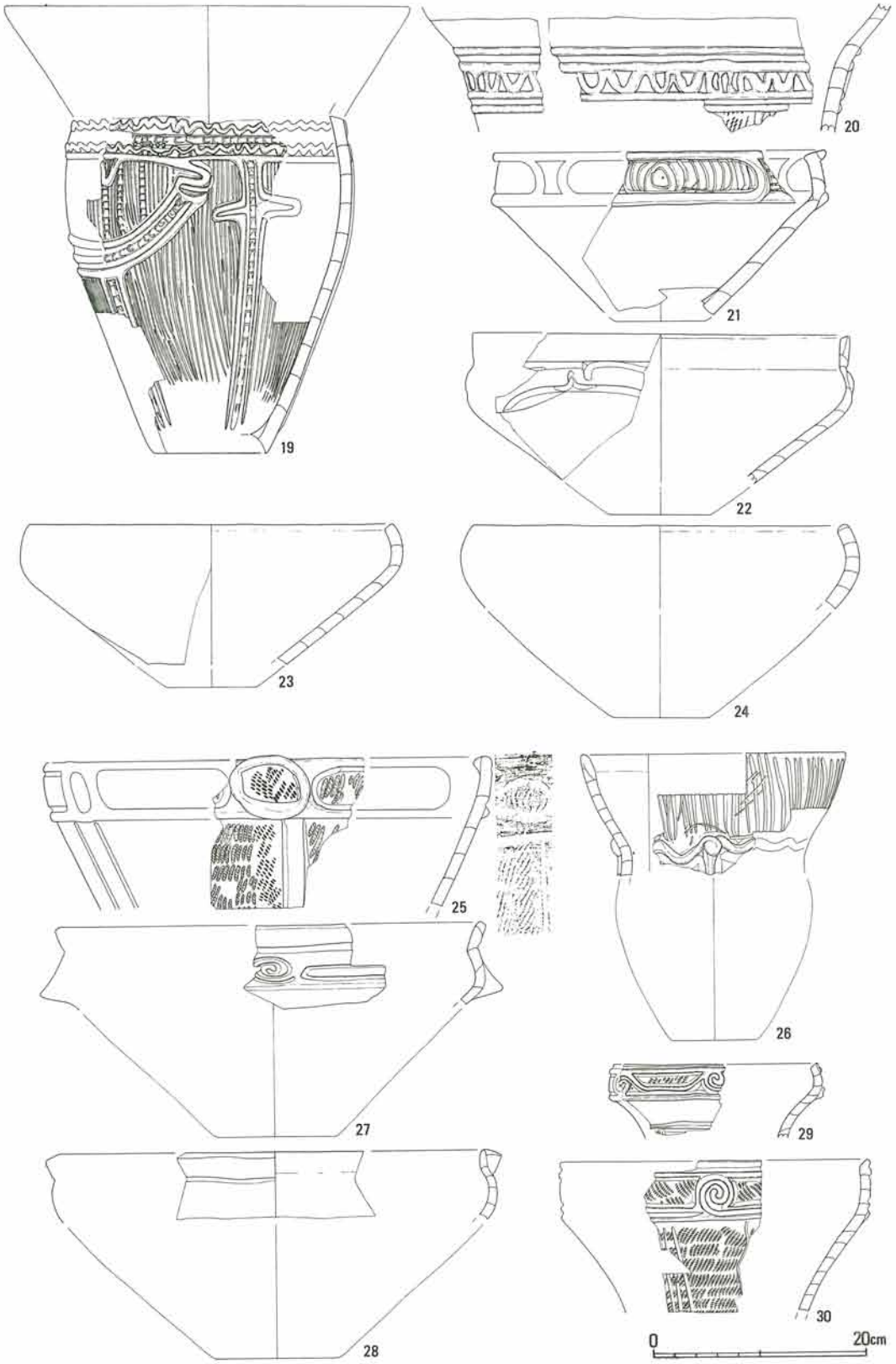
13．口径29㎝，現高10.8㎝。破片自体は比較的大きいのだが，互いに接合はしない。口縁には波状突起（把手）が4箇所表出されていたと思われるが，すべて欠失している。口縁部文様帯も4単位表出されている。

14．口径30.5㎝，現高11.5㎝を測り，口唇部と胴下半部を欠失している。文様は粘土を貼付けて浮き上がらせた部分に，半肉彫状にモチーフを表出している。なお，現存部中央に把手が付されていたと思われるが，欠失している。

15．口径32㎝，現高13㎝。口縁部文様帯は貼付けの隆帯により文様を表出している。胎土，焼成とも良好で，整形も丁寧な土器であり，いわゆる櫛形文土器であろう。

16．口径11㎝，現高7㎝。胴上半部以下を欠失している。文様は口唇部に連鎖状文を廻らし，無文帯を挟んで，胴部には多條の縄文R{$^{L\{^{r}_{r}}_{L\{^{r}_{r}}}$ の地文上に，沈線による円形等のモチーフの一部が認められるが全容は不明である。

17．口径20㎝，器高31㎝。口縁部文様帯は，ＲＬの縄文の地文上にの字状モチーフを基調とした文様を表出しており，そのの字状モチーフの連接部には x 字状の把手が3個所表出されていたと思われるが，いずれも欠失している（スクリントーン部分）。また，x 字状把手の表出されていた部分の口縁には，小突起が1箇所認められるが，これも本来3箇所表出されていたと思われる。加えて，口縁部文様帯の欠損部の左側（展開図参照）には，吹上貝塚2号住居址出土土器（栗原文蔵　1957　第6図7）に見られるような大把手が表出されていたと思われるが，これも欠失している。頸部は無文で，胴部には，やはりＲＬの縄文地文上に貼付けの隆帯



第33図　1964年度調査出土土器実測図（1/6）

による２本単位の懸垂文と，蛇行懸垂文とが垂下している。胎土に小石の混入が目立つが，整形は丁寧である。

18. 現高6.5㎝。文様は３本の沈線にて弧線文を描いているが，最下端の弧は中央より垂下し，懸垂文を表出している。また，現存部上端には沈線による小さな弧線文も認められる。地文はL{$^{r}_{l}$の撚糸文である。

19. 推定口径38㎝，現高31.8㎝，底径10.8㎝。外傾する口縁部無文帯を欠失する。文様は頸部に２本の蛇行隆帯が廻り，胴部には半截竹管状工具により表出した（櫛状工具ではない）条線上に貼付けの隆帯により意匠文を表出している。頸部，胴部とも半截竹管状工具による刺突文が見られ，さらに頸部の蛇行隆帯の裾には円形の刺突も認められる。

20. 現存部最大径44㎝の頸部破片であり，文様は貼付けの隆帯により表出している。また，一部残存する胴部には，貼付けの懸垂文の一部とL{$^{r}_{l}$ の撚糸文の地文が看取出来る。

21. 口径30㎝，推定高16㎝。肩がやや張る浅鉢形土器である。口縁下に文様帯が存し，隆帯により楕円区画を表出するものと思われる。区画内の文様は竹管状工具による沈線で施文しており，楕円区画間には竹管状工具による連続刺突文が施されている。なお，胎土には小石を少量含むが，整形は丁寧である。

22. 口径35㎝，推定高16.8㎝。口縁部が直行し，肩が丸味を持つ浅鉢形土器である。口縁部下に，竹管状工具にて浮彫り状に文様を表出している。器面は表裏とも良く研磨されており，口縁部には丹彩が一部認められる。

23・24，ともに無文の浅鉢形土器であり，23は口径34㎝，推定高15㎝を，24は口径35.6㎝，現高7.8㎝，推定高15㎝を測る。

35. 口径19.8㎝，器高23.4㎝，底径８㎝。口縁部は４単位の波状口縁を呈し，その波頂部の２箇所に渦巻きが表出されている（１箇所は欠失）。また，この波頂部の文様帯下には３箇所に円形のくぼみが認められる。頸部には胴部文様帯と画する２本の沈線が廻り，胴部には，やはり沈線にて，上部が半円状を呈する懸垂文と蛇行懸垂文とが交互に表出されている。胴部の縄文はＲＬである。大木８ｂ式に比定されよう。

Ｆ地点　（第33図25・26）

25. 口径42㎝，現高14㎝。口縁部文様帯は，沈線による楕円区画間に隆帯による円形区画を配す。胴部にはいわゆる磨消しの懸垂文帯が認められる。口縁部区画内及び胴部にはともにＬＲの縄文が施文されているが，一般的な撚りの原体と極めて撚りの弱い原体の二通りを使用している。

26. 口径25㎝，現高11.4㎝。口縁部には竹管状工具にて，浅い沈線をほぼ縦方向に施文し，頸部括れ部には波状の隆帯が廻っており，さらに胴部にも隆帯による懸垂文が表出されるよう

である。なお，口縁の裏面には沈線及び刺突等は施されていない。

G 地点（第33図27～30）

本地点では住居址が1軒確認されている。そして，1965年報文では「少量の加曽利E式を除いてはほとんど勝坂式の土器が多い。」「ここは明確な勝坂式住居址である。」（松井・藤間1965）と記されている。しかし，表6でも明らかなように，破片数も勝坂式より加曽利E式の方が多く，実測可能破片も勝坂式には存在しなかった。このような状況より，本住居址が勝坂式に属するという見解には疑義を感じざるを得ない。

27. 口径39.4㎝，現高7.8㎝。口縁部下に沈線による渦巻文と長楕円文が表出されており，胎土に金雲母を多く含む浅鉢形土器である。

28. 口径21㎝，現高6.2㎝を測る無文の浅鉢形土器で，器表裏面とも丹彩が一部認められる。

29. 口径19㎝，現高7㎝。口縁部文様帯には隆帯による渦巻文を基調とした文様が展開し，現存部最下端には頸部無文帯と胴部を画する沈線が認められる。なお，口縁部区画内の縄文はＲＬである。

30. 口径28.8㎝，現高14.4㎝。口縁部文様帯は貼付けの隆帯により矩形状に区画し，その区画間に，沈線にて描き出した渦巻文を配している。胴部には沈線による3本単位の懸垂文と，蛇行懸垂文が認められる。なお，口縁部の区画内と胴部に施された縄文はともにＲＬであるが回転方向が異なり，口縁部は横，胴部は縦方向である。

以上，各地点毎に深鉢形土器と浅鉢形土器の説明を行なってきた。以下はそれ以外の土器について説明する。

釣手形土器（第34図31　図版27）

Ａ号住居址出土。器高22㎝，鉢部口径12.5㎝，底径13㎝，鉢部最大径18.5㎝，推定最大幅26㎝。鉢部は全周するが，釣手部は½程欠損している。釣手部の文様は隆帯にて渦巻状のモチーフを表出し，さらにＲＬの縄文が施文されている。また，鉢部より釣手部にのびる部位に円形の孔が穿たれている。

有孔鍔付土器（第34図32，33　図版27）

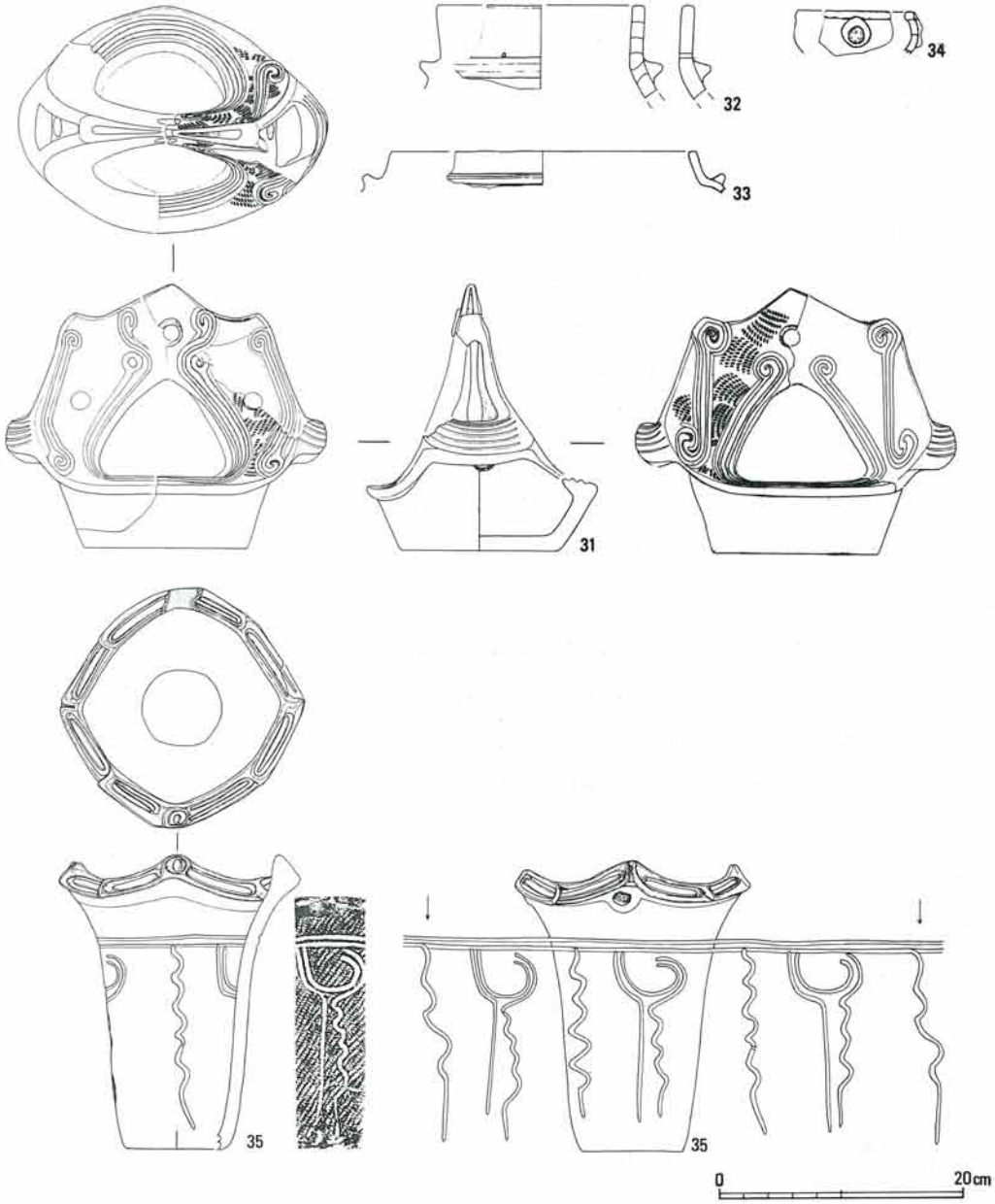
32. Ｇ号住居址出土。孔が鍔状貼付けの上方に表から裏へ向かって穿たれており，器表裏面ともに丹彩の一部が認められる。

33. Ｅ地点出土。口径25㎝。現存部には孔は認められない。

ミニチュア土器（第34図34　図版27）

Ｆ地点出土。口径9.6㎝，現高3.6㎝。口縁下にボタン状の貼付け文が表出されている。

（秋山・山崎）

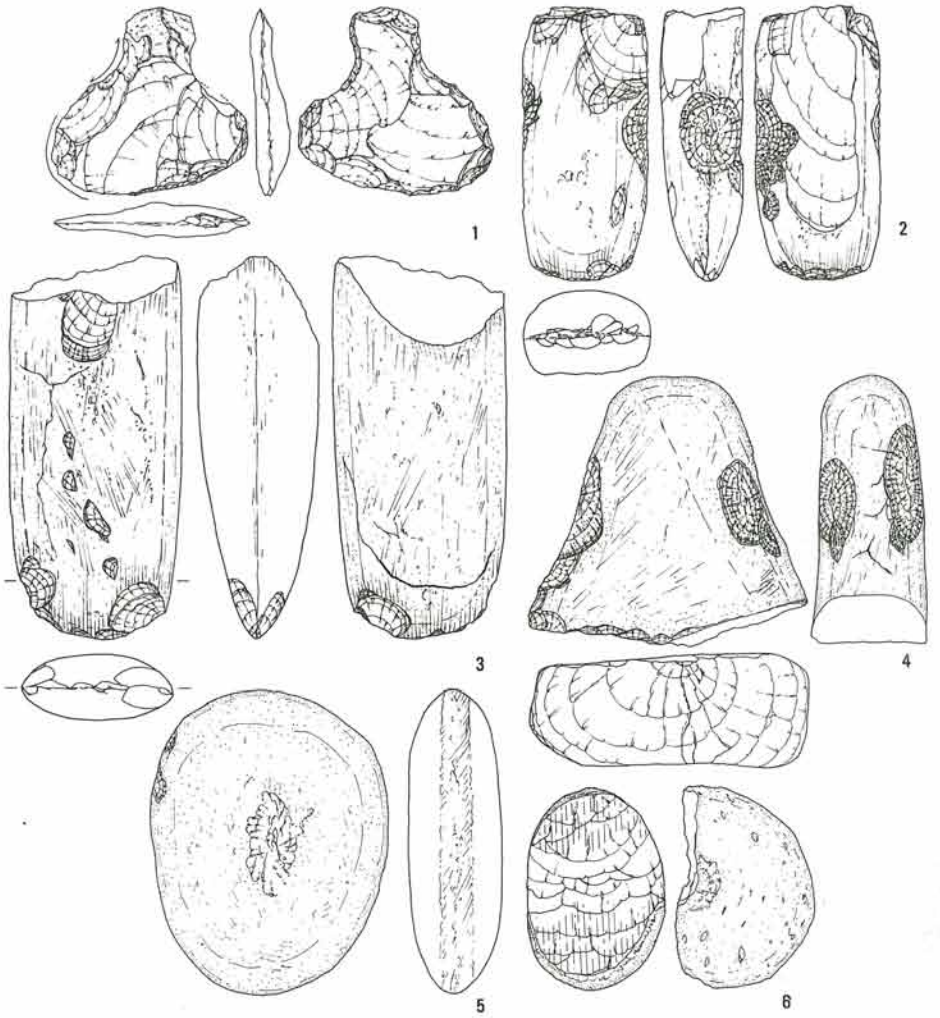


第34図　1964年度調査出土土器実測図（1/6）

b・石　器（第35図1～6．図版32～36）

当調査時に出土した石器は，石鏃3点，削器2点，石匙1点，打製石斧201点，磨製石斧2点，凡字形石器1点，加工痕を有する剥片1点の計211点である。図示したものの石質，出土地点，法量等は表12に示した。

（小松）



0　10cm

第35図　（1～6）1964年度調査出土石器　⟷：使用痕　——：敲打整形痕　1/3

註

＊1　1965年の報告（松井・藤間　1965）では，D地点，I地点においても土器の出土が認められたとの記載はあるが，今回借用した資料中には，両地点出土の土器は見当らなかった。なお，発掘地点については「付篇」を参照されたい。

＊＊　1964年度発掘資料のうち，第34図31・35は国分寺文化財保存館にて保管・展示されている。

1948年発掘土器（第36図1・2，図版37）

ここに図示した2個体は，1948年に塩野半十郎氏が恋ケ窪遺跡内において発掘された資料の一部で，国分寺文化財保存館が保管する土器である。[*1] なお，直接塩野氏にお伺いする機会を得なかったので，この2個体が同一住居址，あるいは同一地点の出土なのか否かは不明である。

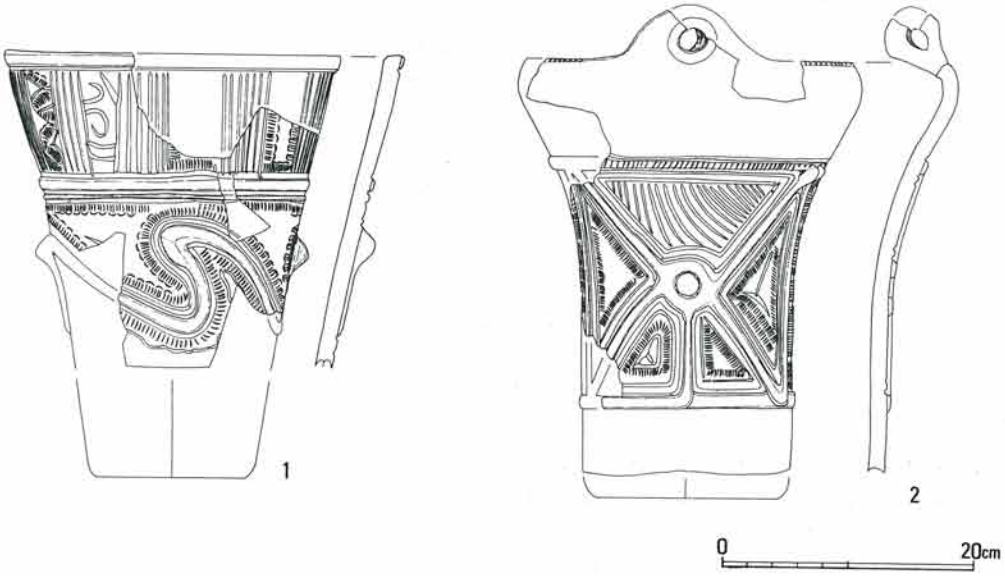
1. 口径26.6㎝，現高25.5㎝，推定高34㎝を測り，胴下半部を欠失している。文様帯は口縁部と胴部に展開しており，文様モチーフは各々異なる。口縁部文様帯は竹管状工具による縦位の，数条単位の沈線間に別々なモチーフを表出させており，一方胴部文様帯には，隆帯を波状に貼付け，その裾に沈線と竹管状工具による連続爪形文を付し，モチーフを表出している。胎土，焼成とも良好である。

2. 口径25㎝，推定高39㎝。全周の約½と把手の一部及び底部を欠失している。口縁部が緩やかに彎曲するキャリパー形を呈し，口縁にいわゆる眼鏡状把手を一つ配している。文様帯は胴部のみに存し，隆帯によるX字状の区画が表出されており，文様区画の構成は，X字状区画の両脇に縦長の矩形区画を表出し，さらにX字状区画がもう一つ表出されていたものと思われおそらく2単位構成であったと思われる。

（秋山・山崎）

註

＊1　星野亮勝氏よりうかがった。



第36図　1948年調査出土土器実測図　(1/6)

類別 / 出土区	深鉢形土器										浅鉢形土器	合計
	勝坂			阿玉台	加曽利E			連弧文	曽利	不明		
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ					
(4, 5)		2	1	3	1				1	10		18
(5, 1)		2			7	29	1		8	44	3	94
(5, 3)		4	5		11	21	2		8	101	4	156
(6, 3)					1	2		1		2		6
その他		19	5	10	30	12	5	7	23	187	12	310
合計		27	11	13	50	64	8	8	40	344	19	584

表1. 第4次調査出土土器一覧

類別 / 出土区	深鉢形土器										浅鉢形土器	合計
	勝坂			阿玉台	加曽利E			連弧文	曽利	不明		
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ					
4号住居址	3	61	51	16	36	42	15	25	31	511	15	806
10号住居址	2	98	45	17	34	12	9	4	10	617	16	864
11号住居址	2	95	76	17	97	61	28	40	68	1,012	19	1,515
遺構外	3	39	21	7	36	18	21	9	21	530	15	720
合計	10	293	193	57	203	133	73	78	130	2,670	65	3,905

表2. 第5次調査出土土器一覧

類別 / 出土区	深鉢形土器										浅鉢形土器	合計
	勝坂			阿玉台	加曽利E			連弧文	曽利	不明		
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ					
18号住居址		18	8	1						111	2	140
14号土壙		8	13	1						97	1	120
15号土壙			7		4				1	40	7	59
「遺物集中」			14							40	7	61
(26～40, 30)		27	46		7	2				223	8	313
(31, 11～35)	1	35	60	4	32	2		5	6	350	14	509
(21～40, 50) (31, 41～60)												0
合計	1	88	148	6	43	4	0	5	7	861	39	1,202

表3. 第6次調査出土土器一覧

類別 / 調査次数	深鉢形土器						浅鉢形土器	合計
	勝坂	加曽利E	連弧文	曽利	その他	不明		
7次調査	9	9	2	7	0	27	4	58

表4. 第7次調査出土土器一覧

類別 / 調査次数	深鉢形土器						浅鉢形土器	合計
	勝坂	加曽利E	連弧文	曽利	その他	不明		
8次調査	2	1	0	0	0	19	0	22

表5. 第8次調査出土土器一覧

類別 / 出土地点	深鉢形土器										浅鉢形土器	合計
	勝坂			阿玉台	加曽利E			連弧文	曽利	不明		
	I	II	III		I	II	III					
A		6			15	11		2	15	9	1	59
B		4			4	10	4	3	7	6	2	40
C		24	7	2	7	4	5	2		9		60
D												0
E		37	55	2	72	4	4	6	8	46	23	257
F	1	47	28	2	19	28	3	8	12	10	1	159
G		9	24	2	47	6		7	11	4	11	121
H		2	13		19	4	6	1	2	5	1	53
I												0
合計	1	129	127	8	183	67	22	29	55	89	39	749

表6. 1964年度調査出土土器一覧

図版番号	長さ(cm)	頭部幅(cm)	胴部幅(cm)	刃部幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	出土区
第6図3	11.52	4.12	3.64	(1.67)	1.46	96.5	砂岩	(1,7)
4	11.46	(0.99)	4.04	(2.43)	1.63	100.0	砂岩	(3,1)
5	9.17	3.74	4.63	4.21	1.09	70.0	砂岩	(3,1)
6	(8.57)	3.73	3.72	—	1.98	105.0	砂岩	(3,1)
7	(9.07)	3.53	4.80	—	1.94	85.0	砂岩	表採
8	(6.36)	3.58	3.60	—	1.14	39.0	砂岩	表採
9	(4.35)	3.08	3.77	—	1.24	27.5	砂岩	表採
10	10.36	5.69	6.38	6.47	3.11	242.0	砂岩	(3,1)
11	(4.16)	—	—	5.32	1.44	43.5	砂岩	(1,5)

表7. 第4次調査出土打製石斧計測値　法量（　）：一部欠損　—　：計測不能

図版番号	長さ(cm)	頭部幅(cm)	胴部幅(cm)	刃部幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	出土区
第13図6	6.70	2.42	4.37	5.42	1.83	85.0	頁岩	2区
7	11.38	3.61	4.10	5.29	1.75	110.0	砂岩	5区
8	13.00	3.47	3.96	3.20	1.89	126.5	頁岩	4区
9	12.43	3.90	4.43	4.61	1.14	121.0	砂岩	4区
10	10.65	4.14	4.61	5.82	1.47	95.0	砂岩	3区
11	12.92	8.05	4.35	9.23	1.80	256.0	砂岩	1区

表8. 第5次調査出土打製石斧計測値

図版番号	長　さ(cm)	頭部幅(cm)	胴部幅(cm)	刃部幅(cm)	厚　さ(cm)	重　さ(g)	石　　質	出　土　区
第22図6	8.66	3.36	4.04	4.47	1.93	82.5	片　　岩	(22,31)
7	9.07	4.10	4.39	4.60	1.74	115.0	砂　　岩	(33,30)
8	8.65	3.21	3.63	5.70	1.30	70.0	砂　　岩	(37,30)

表9.　第6次調査出土打製石斧計測値

図版番号	長　さ(cm)	頭部幅(cm)	胴部幅(cm)	刃部幅(cm)	厚　さ(cm)	重　さ(g)	石　　質	出　土　区
第26図1	9.4.3	2.73	3.69	3.42	1.35	110.0	片　　岩	1　住
2	(8.15)	2.19	3.46	2.85	0.94	34.0	砂　　岩	1　住
3	(4.03)	4.85	−	−	1.65	47.0	頁　　岩	1　住
4	(5.83)	3.47	4.34	−	1.18	40.0	砂　　岩	1　住

表10.　第7次調査出土打製石斧計測値　法量（　）：一部欠損
−　：計測不能

図版番号	長　さ(cm)	頭部幅(cm)	胴部幅(cm)	刃部幅(cm)	厚　さ(cm)	重　さ(g)	石　　質	出　土　区
第30図1	(13.90)	2.90	4.20	−	1.73	132.0	砂　　岩	F

表11.　第8次調査出土打製石斧計測値　法量（　）：一部欠損
−　：計測不能

図版番号	器　　種	長　さ　(cm)	幅　　(cm)	厚　さ　(cm)	重　さ　(g)	石　　質	出　土　区
第36図1	石　　匙	7.33	7.62	1.38	58.0	粘板岩	C
2	磨製石斧	(10.85)	4.92	3.20	316.0	輝緑岩	E
3	磨製石斧	(15.05)	6.86	4.80	76.0	輝緑岩	A
4	凡字形石器	10.70	10.65	4.19	678.0	砂　　岩	B
5	磨　　石	12.03	9.36	3.68	634.0	閃緑岩	B
6	磨　　石	8.04	5.54	5.50	336.0	花崗岩	A

表12.　1964年度調査出土石器計測値　法量（　）：一部欠損

Ⅶ まとめ

勝坂式土器に関して

5次～7次，1948年，1964年度発掘資料中の勝坂式土器について，古い方から新しい方へと順に若干の説明及びコメントを加えていきたい。

第12図7

口縁部から底部近辺にかけて矩形区画文を重畳するという，極めて特徴的な文様を持つ型式（type）であり，同型式（type）として長野県岡谷市後田原遺跡（戸沢充則ほか　1970）に完形個体がある。ただ，後田原遺跡例では矩形区画の裾をいわゆるキャタピラ文で施文し，区画内の波状刺突文を角押文で表出しているのに対し，本遺跡例では双方とも三角押文にて施文，表出している点が異なる。なお，文様モチーフの系統としては，佐藤達夫氏が「新道式に伴う矩形区画紋の系統が，狢沢式の系統に影響を与えているのではなかろうか。」（佐藤　1974）と論述されている。狢沢式と新道式の成立及び相互の時間的関係については，筆者自身まだ充分に把握しきれていないので，狢沢式，新道式のどちらがどのように影響を与えたかは言及しかねるが，矩形区画文は新道式，区画文の配列及び区画隆帯上の刺突は狢沢式の系統と思われ双方の系統が融合してこの文様モチーフが成立したと筆者も考えている。

第31図8

本土器は，1965年の報告（松井新一郎・藤間恭助　1965）ではC号住居址出土と記載されているが，同時にC号住居址の「北側に他の住居址が複合しているのかも知れないと思われた。」とある。この記述の如く，1979年に行なわれた恋ケ窪遺跡第10次調査[*1]にて，このC号住居址の北側に重複する住居址が確認出来，しかも，それが1次調査で確認された3号住居址（「恋ケ窪遺跡調査報告Ⅰ」1979）であることが判明した。さらに，本土器は1次調査の3号住居址の第18図3の土器と，口縁部重三角区画文（1964年度発掘資料は欠失），頸部が楕円区画文，胴部が大波状文，底部近辺が楕円区画文と文様構成が全く同じであることから，3号住居址に伴うものとして間違いないであろう。

第36図1・2

1の胴部に隆帯にて表出されているモチーフは，藤内式に見られる抽象文の系統をひくものであろう。2は器形やモチーフは1より後出的様相を示している。しかし，口縁の無文部の張りが緩い点，底部が屈折底でない点等より，勝坂式の終末段階までは下らないと思われる。このように，いわゆる勝坂Ⅱ式と同Ⅲ式の中間的な様相を持つ土器が認められる住居址としては，栗山遺跡3号住居址，多摩ニュータウンNo.46遺跡2号住居址，峯遺跡等がある。

第21図1～3，第25図1，第32図11～14

ここにまとめた土器は，勝坂式後葉期いわゆる勝坂Ⅲ式として把えられている土器である。

第21図１の形式（form）は，第25図１と共通し，他遺跡においても貫井遺跡１号住居址，椚田第Ⅲ遺跡S•B11例を始めとして比較的多く見られ，安定した形式（form）であるが，そこに表出されるモチーフは多岐にわたる。２・３は円筒形を呈する土器で，これも該期において普遍的に見られるが，加曽利ＥⅠ式の前葉の土器に共伴する例もしばしばある（中村橋遺跡，吹上貝塚１号・３号住居址）。第25図１も類例は確認出来なかったが，半肉彫的表出技法を始め，文様モチーフ，器形共に該期の特徴を備えている。第32図11は口縁部モチーフに勝坂式初期から系統のたどれる，キャリパー形の形式（form）の口縁部に重三角区画文を表出する土器であるが，胴部に磨消文が見られる。この磨消し手法は，甲信地方のいわゆる井戸尻式に多く見られる手法であるがこの型式（type)には，普通表出されないものである。

なお，第21図６と第32図16はそれぞれ勝坂式終末に共伴する加曽利Ｅ式の１typeである。

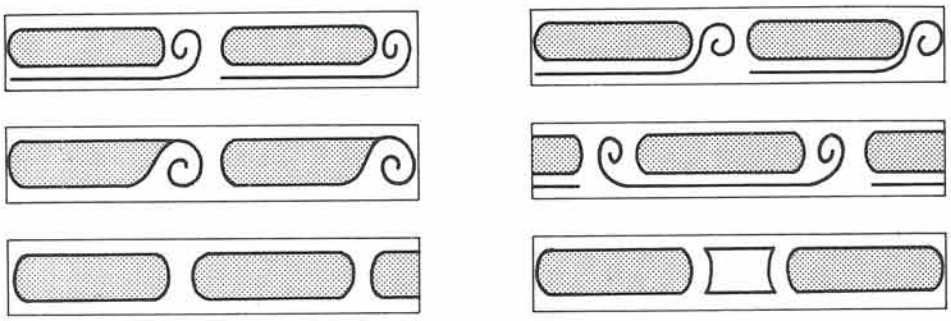
以上勝坂式土器に関して，出土土器の検討を中心に簡単に述べてきた。１次調査では復元個体の無かった勝坂式前葉期の土器と，同式後葉期の住居址及び土器が確認されたことより，恋ケ窪遺跡は勝坂式期に於いても，ほぼ間断なく生活の場として使用されていたと思われるのである。

（秋山道生）

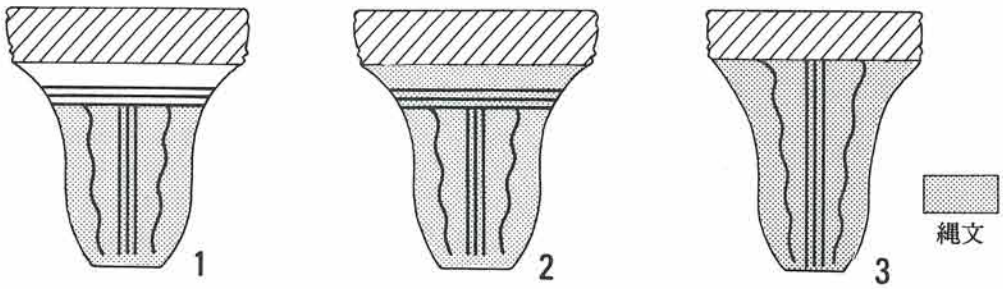
「連弧文土器」に関して

緊急調査の規模，件数の増大増加に伴い，発掘資料も爆発的な増加が認められるような情勢の今日，縄文時代中期の遺跡，資料は，その最も顕著な在り方として半ばあきらめにも似た集積であるといえよう。しかし，この１，２年の間で，土器組成に見られる共伴関係等から，土器型式の再認識と編年の再検討を進める作業が各地域で行われる気運が高まってきた（神奈川考古同人会　1978，米田明訓　1978，能登健・石坂茂　1980　等）。これらの研究によって，中期後半の「連弧文土器」の位置も大部浮彫り化されてきた感がある。それを踏まえ，ここでは「連弧文土器」を加曽利Ｅ式土器と曽利式土器との共伴関係等の分析より，その時間的位置及び消長について若干論及したい。

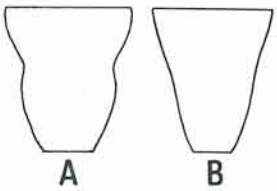
「連弧文土器」は，1940年（S.15）に山内清男氏が加曽利Ｅ式とは別の型式に属すると指摘されている。しかし，「吉田編年によるⅢ式設定以後加曽利Ｅ式土器細分の波にのまれてしまった」（能登　1975）まま，現在に到っている。「連弧文土器」はその分布域及び消長が共に加曽利Ｅ式の範囲内，時間内であった為，吉田格氏の論もスムースに受け入れられてしまったのであろう。しかし，高林均，能登健，戸田哲也の各氏の指摘のように（高林　1974，能登　1975，戸田　1975）「連弧文土器」は関東西部域において独自に成立した土器であり，加曽利



第37図　a・b段階、加曽利E式の口縁部文様帯モチーフ



第38図　a・b段階、加曽利E式の頸部、胴部文様帯モチーフ



第39図
「連弧文土器」のform

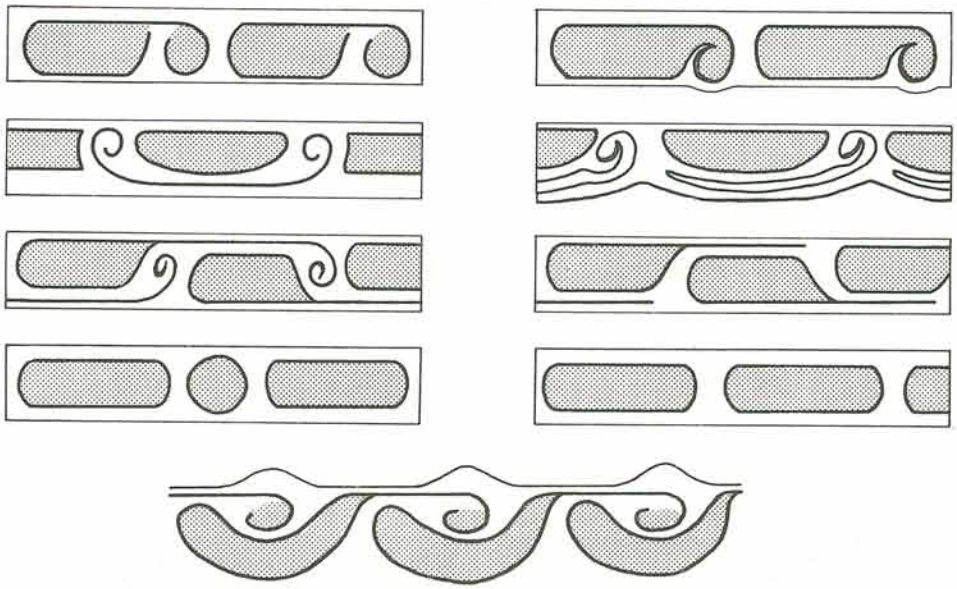
E式土器とは系統を異にするものである。そこで，ここでは「連弧文土器」を加曽利E式と分離して使用する。具体的には，加曽利E式は主にキャリパー状のformで，口縁部文様帯に渦巻状のモチーフを表出する系統上にある土器について使用し，「連弧文土器」は弧線文を主要文様モチーフとし，主に第39図A・Bのformを呈する土器群に対して使用する。[*2]

さて，「連弧文土器」の分布域である関東西部域で，「連弧文土器」と加曽利E式が共伴した各遺跡の各住居址を列挙してみよう。

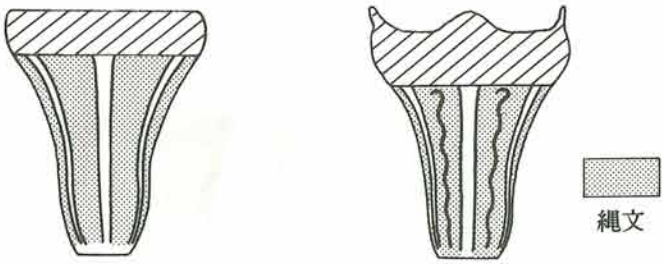
b類　恋ケ窪遺跡4住・恋ケ窪遺跡（吉田　1957），貫井南遺跡8住・13住，平山橋遺跡3住・5住，新座遺跡J－2，岩の上遺跡13住，島之上遺跡3住

c類　三鷹五中遺跡24住・33住，[*3] 坂東山遺跡27住，志久遺跡10住，当麻遺跡13住・16住

以上のb・cと分類した住居址はいずれも「連弧文土器」と加曽利E式の共伴例であるが，その加曽利E式には時間差が認められそうである。そこで，加曽利E式の文様モチーフと，口縁部以外の文様帯を概念図化すると，b類のそれは，第37・38図のようである。口縁部モチーフは，楕円区画間に渦巻文が表出される。また，頸部に無文帯を有する例（第38図1）と，口縁部文様帯下より直接懸垂文が施される頸部文様帯のない例（第38図3）がある。胴部文様帯



第40図　c段階、加曽利E式の口縁部文様帯モチーフ

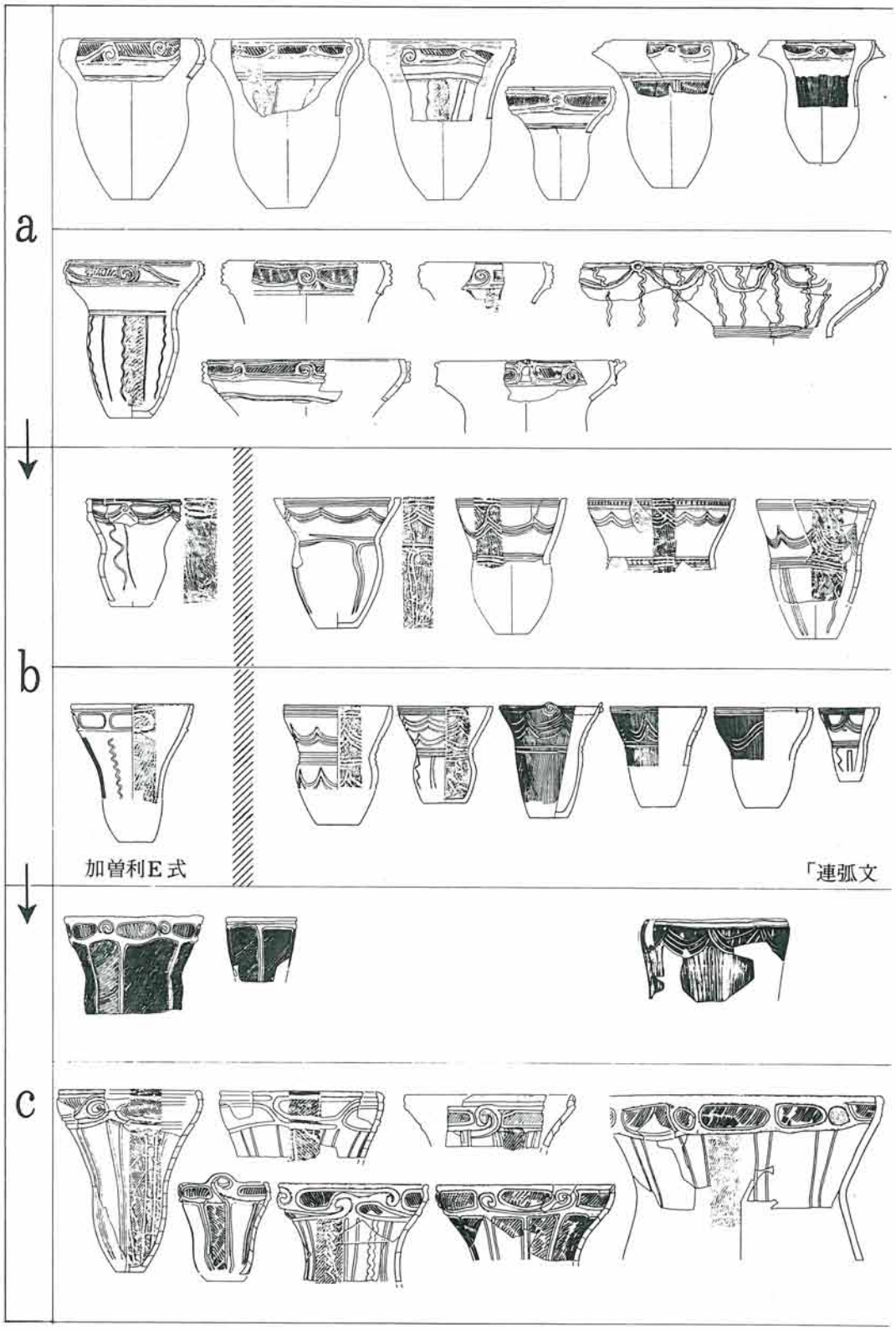


第41図　c段階、加曽利E式の胴部文様帯モチーフ

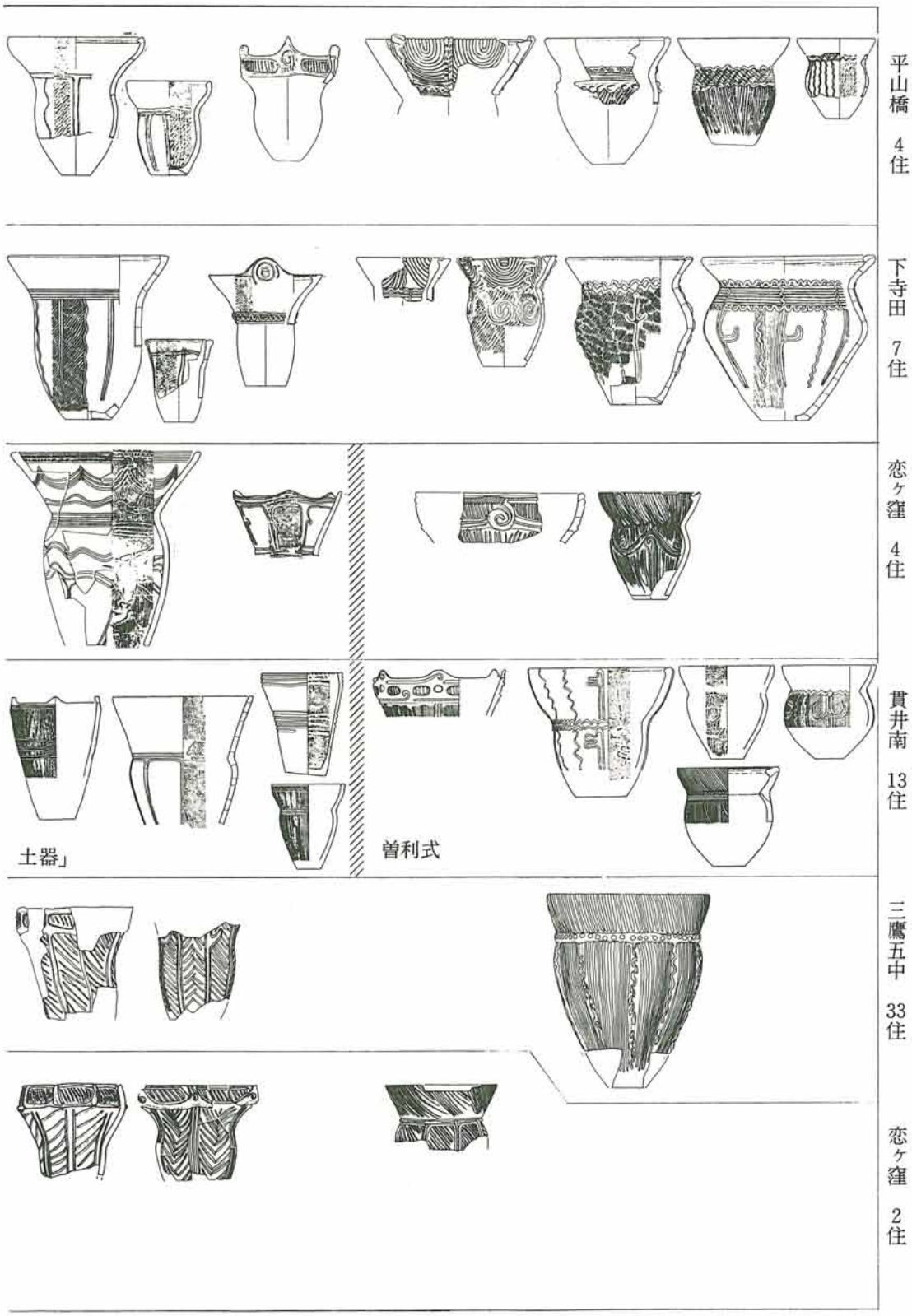
は，基本的には沈線表出による3本単位の懸垂文と，1本の蛇行懸垂文が交互に表出されるもので，加曽利E式前葉の基本的モチーフである。

一方c類の場合は，第40・41図のようである。口縁部文様帯の渦巻に“描き出し”の微隆起による表出技法が現われ，その渦巻きの内側にまで縄文が施文される例が増えてくる。また，頸部と胴部を画する横線区画は見られなくなり，胴部文様帯の懸垂文は，先の3本の沈線が中の1本を省略した形の区画となり，区画内は磨消される。このb類とc類の加曽利E式を比較すれば，b類からc類に推移したことは論をまたないであろう。

それでは，b類とc類に共伴する「連弧文土器」に差異は認められないのであろうか。まず加曽利E式系統と「連弧文土器」系統の土器組成上の割合いを見ると，次のような相違がある。b類の共伴関係では，概して「連弧文土器」の占める割合いが高く加曽利E式は極めて少ない。



第42図　a ～c 段階の代表的



住居址の土器組成

武蔵野台地の遺跡では，加曽利Ｅ式を伴わず「連弧文土器」の類だけという例もあるほどである。一方，ｃ類の共伴の割合いを見ると，「連弧文土器」の方が加曽利Ｅ式の系統よりも逆に低くなる。中には「連弧文土器」を伴わない例もあり（恋ケ窪遺跡２住，三鷹五中遺跡23住，花影遺跡９住），ｂ類とｃ類の土器組成上の差異が指摘される。

次に，弧線文土器のモチーフを見ると，ｃ類は弧線モチーフ特有のめりはりがはっきりしないだらだらしたモチーフとなり，円形や磨消し等の新しい文様が見られるようになる。このようにｂ類とｃ類の関係は，加曽利Ｅ式の在り方から指摘されたように，「連弧文土器」にも時間差が認められるであろう。

さて，加曽利Ｅ式の系統には，第37・38図のｂ類と区別しかねる土器がまとまって出土する住居址が多々存在する。それらの住居址を仮にａ類とすれば，次のようである。

ａ類　貫井南遺跡14住，二宮遺跡３住，平山橋遺跡４住，下寺田遺跡Ｓ・Ｂ07，椚田遺跡Ｓ・Ｂ08，鶴川Ｊ遺跡17住，坂東山遺跡９住

このａ類が，ｂ類の加曽利Ｅ式と区別しかねることは先述した。しかし，ここで認識すべきことは，ａ類とｂ類の土器組成であり，「連弧文土器」の存在及び，それの占める割合いの高さの違いである。即ち，ａ類には「連弧文土器」は殆どと言って良い程伴出しないのである。

このａ類とｂ類の違いは地域差か，あるいは各々の集団における土器型式の嗜好上の差違といった要因に求められるものであろうか。

実は，この違いを解く鍵は，ａ・ｂ双方の類に伴出する曽利式系統の土器が握っているのである。曽利式土器は甲信地方に分布の中心を持ち，関東西南地域にも浸透しているが，ａ類の土器組成では曽利Ⅱ式が，ｂ類では曽利Ⅲ式が伴出するのが常である。[*4] 即ち，以上を概括的に整理すると次のようである。

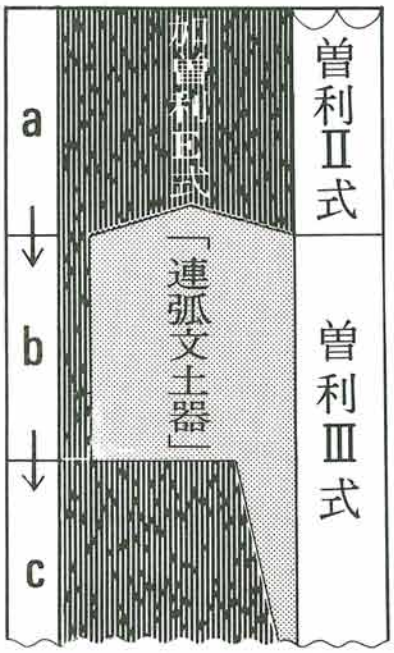
ａ．加曽利Ｅ式＋曽利Ⅱ式　（「連弧文土器」の伴出なし）

ｂ．「連弧文土器」（多）＋加曽利Ｅ式（ａ'と区別出来ず）＋曽利Ⅲ式

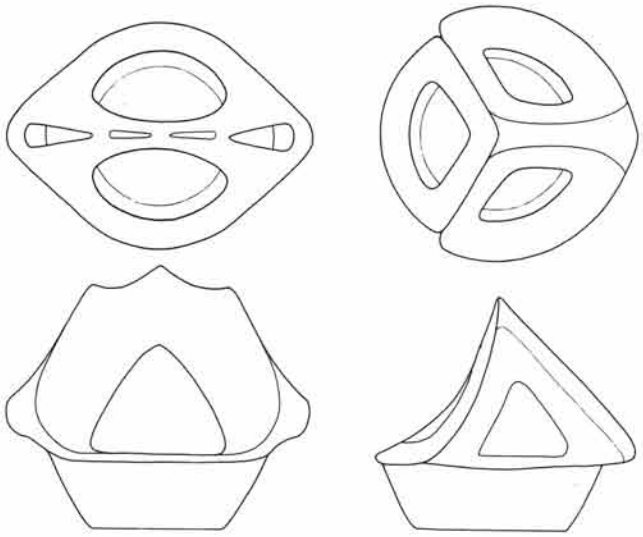
ｃ．加曽利Ｅ式（ｂより新）＋（「連弧文土器」）＋曽利Ⅲ式

土器型式の編年で，曽利Ⅱ式と同Ⅲ式の時間差が明らかな以上，ａ類とｂ類の組成の違いも，時間差と考えられよう。（第42図参照）

これらをまとめると，ａ→ｂ→ｃという時間的推移がたどれることになる。即ち，曽利式土器がⅡ式からⅢ式へ変遷する過程で，関東西部地域を本拠地とする集団は，他より弧線文モチーフを受容（受入）し「連弧文土器」を成立させた。[*5] そして，集団内で「連弧文土器」を一致して選択したために，それまで主流にあった加曽利Ｅ式の系統は傍に押しやられ，一時影を潜めた形で細々と息づいているのである（ｂ段階）。このように，一時は加曽利Ｅ式にとって代わった「連弧文土器」であるが，ある程度の期間専従的に使用されたものの，次段階に移ると



第43図　a～c段階の土器組成概念図



第44図　釣手形土器のform

その量を減じ，やがて衰退してしまう。そして，これに呼応して，東関東で息づいていた加曽利E式が復活してくるのである（ c段階 ）。これを概念的に図化すると，第43図のようになる。[*6]

（秋山）

釣手形土器に関して

1964年度発掘のA号住居址より一個体出土している（第34図31）。この釣手形土器は「中期中葉から後半にかけ，関東・中部地方に発達するが北陸地方でも作られ，東北地方例はまれである。」（小林達雄　1979）という指摘がなされている。この釣手形土器を数多く見ていくと，形式（ form ）が二種類存在するようである。一つは鉢部の径の両端より釣手部をアーチ状に渡す form （第44図１）と，いま一つは鉢部上にやはりアーチ状に渡し，加えて一方に背部を作出する form （第44図２）である。なお，本例は前者に属する。

釣手形土器の用途としてはランプ説がある（藤森栄一　1965　等 ）。そこで，本例もその説を考慮に入れて観察を行なった。その結果鉢の内面の底には煤痕の付着が顕著に認められた。しかし，鉢の口縁の折り返し部と釣手部の下面（鉢に面する部分）には煤痕は認められなかった。また，鉢部，釣手部共に被熱による脆弱化は特に認められず，鉢部外面にも煤の付着は見られなかった。

以上，今回報告の釣手形土器一例の観察よりランプ説の是非を論ずるには無理があるが，鉢内部底面の顕著な煤痕の付着等より，釣手形土器の用途は火と密接な関係があるとの指摘は出来よう。

（秋山）

註

＊1　10次調査は1979年5～8月に実施した。位置は1次調査の11～19区（「恋ケ窪遺跡調査報告Ⅰ」1979　参照）の東側区域であり，その調査の際1964年度調査のC号住居址も確認された。なお，10次調査に関しては「恋ケ窪遺跡調査報告Ⅲ」として報告する予定である。

＊2　「連弧文土器」にもバラエティーが存在し，弧線文モチーフが表出されない例や，他のモチーフを用いる例もある。そこで，ここでは用語を次の様に定義する。

弧線文土器：主に第39図A・Bの form に弧線文モチーフが表出されている土器（群）に対して用いる。

弧線文系土器：form，手法等は弧線文土器と共通するが，弧線文モチーフを表出しなかったり，他のモチーフを表出している土器（群）に対して用いる。

「連弧文土器」：加曽利E式等と対応する用語で，弧線文土器，弧線文系土器を包括する。

「連弧文土器」｛ 弧線文土器
　　弧線文系土器

＊3　24住は（山村貴輝ほか　1976）に，33住は（三鷹市遺跡調査会　1979）による。

＊4　曽利式土器と加曽利E式土器の分布の重なる神奈川県相模原市当麻遺跡72号住居址（白石浩之，山本暉久　1977）では，弧線文土器と弧線文系土器のほかはすべて曽利Ⅲ式である。この住居址もb類に属する。

＊5　弧線文モチーフは里木Ⅱ式，醍醐Ⅱ式に系統がたどれるという能登氏の指摘がある（能登　1975）。筆者も東海地方及びそれ以西に注目しているが，現在充分な分析，検討ができていない為，「他から」というような曖昧な表現になってしまった。今後の課題としたい。

＊6　このように理解すると，「神Ⅲ加曽利E期」（神奈川考古同人会　1978）はa～cの段階が同じ時期枠に包括されているものと解釈されてくるのである。

あ と が き

ここに第4次調査から第8次調査にいたる5回の調査の成果に若干の所見を加えて、刊行することになった。国分寺市教育委員会をはじめとする関係機関の努力にもかかわらず、思うように改善できない周囲の条件のもとで、一歩一歩遺物の整理を進め、ようやくにして一冊の報告書にまとめ上げた広瀬・秋山・小松3氏はもとより、大いに助言協力をしてくれた安孫子・砂田の両氏に対し、心からのねぎらいと謝意とを呈するものである。

わが恋ヶ窪遺跡調査会が実施した調査は、今年3月で実に12次にわたっている。ごく限られた当事者以外は、その一回一回の調査がどこでどう行われ、どういう結果を得られたかということについて、即座に思い浮かべられないであろう。まさに小間切れ調査の典型である。開発行為の後追いを続けていなければならない状況のもとでは、当然もたらせられる宿命的な結果として自嘲的にうけとっている。しかも、こうしてさらに数多く積み重ねられるであろう小調査の報告によって、果して、恋ヶ窪遺跡の全体像を浮かび上がらせることが可能となるのであろうか。残念ながら、たいへん心もとない予想をたてないわけにはいかないのである。

ともあれ、小規模ながら、恋ヶ窪遺跡という歴史的な存在を垣間見る調査の報告と、調査を通じて取り上げられた一・二の問題について記述が進められている。同学諸氏の御叱正を頂ければ望外の幸せである。

（永峯光一）

引 用 参 考 文 献

秋間健郎・服部敬史　1971「東京都狐塚遺跡の調査」長野県考古学会誌11
秋山道生・斉藤基生ほか　1978「貫井」小金井市文化財調査報告書5
浅川利一・戸田哲也　1971「町田市玉川学園清水台遺跡緊急発掘調査略報」文化財の保護3
安孫子昭二ほか　1969「№46遺跡」多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅶ
安孫子昭二・佐藤攻・小田静夫　1974「貫井南」小金井市貫井南遺跡調査報告
安孫子昭二・芹澤廣衛・大谷猛ほか　1978「文京区動坂遺跡」動坂貝塚調査会
安孫子昭二・広瀬昭弘・秋山道生・小松眞名　1979「恋ケ窪遺跡調査報告Ⅰ」国分寺市教育委員会・恋ケ窪遺跡調査会
石川和明　1968「調布市深大寺町東原遺跡調査報告」多摩考古9
伊藤富治夫ほか　1976「前原遺跡」前原遺跡調査会
伊藤富治夫ほか　1980「貫井南遺跡」小金井市貫井南遺跡調査会
大沢鷹邇・芝崎孝　1962「東京都中村橋遺跡の中期縄文土器」考古学手帖14
大山柏　1927「神奈川県下新磯村字勝坂遺物包含地調査報告」史前研究会小報1
岡崎完樹ほか　1975「中山谷遺跡」中山谷遺跡調査会
岡本孝之・鈴木次郎ほか　1977「尾崎遺跡」神奈川県埋蔵文化財調査報告13
小田静夫　1976「縄文中期の打製石斧」どるめん10
神奈川県考古同人会　1978「神奈川県における縄文時代中期後半土器編年試案」神奈川考古4
川崎義雄・早川泉　1966「東京都三鷹市第五中学校校庭内遺跡調査報告」考古学雑誌52－2
川崎義雄ほか　1970「北野遺跡」三鷹市史
紀野自由ほか　1978「二宮遺跡」秋川市埋蔵文化財調査報告書5
椚田遺跡調査会　1975「椚田第Ⅲ遺跡の調査」椚田遺跡群1975年度調査概報
久保常晴・関俊彦　1971「潮見台」
熊野正也ほか　1969「今島田遺跡」市川市文化財調査報告1
栗原文蔵　1959「吹上貝塚」
栗原文蔵　1962「大蔵遺跡」新修世田谷区史付編
栗原文蔵・野間徳秋・今泉泰之　1973「岩の上・雉子山」埼玉県遺跡発掘調査報告書1
河野実ほか　1972「Ｊ地点－鶴川遺跡群」
国学院大学久我山高等学校考古学部　1963「西田町谷戸第二遺跡第一次調査報告書」久我山考古学小報2
後藤守一　1933「府下に於ける石器時代住居址発掘調査」東京府史蹟保存物調査報告第10冊
後藤守一　1937「東京府下に於ける石器時代住居址」東京府史蹟名勝天然記念物調査報告書第14冊
小林公明・武藤雄六ほか　1978「曽利」
小林達雄　1979「縄文土器Ⅰ」『日本の原始美術1』講談社
埼玉大学考古学研究会　1970「膳棚」鳳翔7
坂詰秀一　1965「新座」
笹森健一ほか　1976「志久遺跡」埼玉県遺跡調査会報告書31
笹森健一ほか　1977「前島・島之上・出口・芝山」埼玉県遺跡発掘調査報告書12
佐藤達夫　1974「縄紋土器」『日本考古学の現状と課題』吉川弘文館
下総考古学研究会　1976「中峠式土器の検討」下総考古学6
下村克彦・城近憲市　1970「花積貝塚発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会報告15
白石浩之・山本暉久ほか　1977「当麻遺跡」神奈川県埋蔵文化財調査報告12
新藤康夫ほか　1975「下寺田」『下寺田・要石』

末木健ほか　1975「山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」
杉並区教育委員会　1974「杉並区縄文土器写真集成」
鈴木保彦ほか　1978「下北原遺跡」神奈川県埋蔵文化財調査報告14
高林均・斉藤基生ほか　1974「平山橋遺跡」
谷井彪ほか　1974「花影遺跡の発掘調査」埼玉県遺跡発掘調査報告書３
谷井彪　1977「勝坂式土器の変遷と性格についての若干の考察」信濃29－４・６
谷口一夫　1960「東京都下高井戸遺跡の中期縄文土器」考古学手帖11
寺村光晴　1966「蟹ケ沢」
土井義夫・横山悦枝・肥留間博ほか　1975「栗山」小金井市文化財調査報告書４
東京都国分寺市泉町廃寺址遺跡調査会　1972「恋ケ窪堂址調査報告」
戸沢充則ほか　1970「後田原遺跡」岡谷市文化財調査報告３
戸田哲也　1975「諏訪山遺跡」世田谷区史料８考古編
戸田哲也ほか　1977「釣鐘池北遺跡調査概報」
中田英ほか　1976「草山遺跡」神奈川県埋蔵文化財調査報告11
中田英　1977「地下式土壙研究の現状について」神奈川考古２
中西充ほか　1979「椚田遺跡群1978年度調査概報」八王子市椚田遺跡調査会
中西充　1980「八王子市恩方町大久保遺跡の調査」考古学ノート８
能登健　1975「縄文文化解明における地域研究のあり方」信濃27－４
能登健・石坂茂　1980「重弧文土器の系譜」信濃32－４
服部敬史　1972「岳の上遺跡」
肥留間博　1970「狭山遺跡Ａ地点」東京都瑞穂町文化財調査報告１
肥留間博　1973「平代坂Ｂ」小金井市文化財調査報告２
福田信夫ほか　1975「稲城市京王帝都相模原線遺跡発掘調査報告書」
藤森栄一ほか　1965「井戸尻」
松井新一・藤間恭助　1965「恋ケ窪遺跡発掘調査概報」多摩考古７
水沢裕子・倉沢和子ほか　1979「松原遺跡」松原遺跡調査団
三鷹市遺跡調査会　1979「三鷹市第五中学校遺跡発掘調査報告書－図版編－」三鷹市埋蔵文化財調査報告１
宮坂英弐・藤森英一ほか　1970「茅野和田遺跡」
宮崎朝雄ほか　1972「西原遺跡発掘調査報告」埼玉県遺跡調査報告14
武蔵国分寺遺跡調査会　1976「武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ⅱ－恋ケ窪堂址第二次調査－」
山内清男　1940「日本先史土器図譜Ⅷ」
山村貴輝ほか　1976「三鷹市立第五中学校遺跡」
横山悦枝・新藤康夫　1975「中山谷遺跡」小金井市文化財調査報告書１
吉田格　1957「東京都国分寺町恋ケ窪竪穴住居址の土器に就て」銅鐸12
米田明訓　1978「曽利式土器編年の基礎的把握」長野県考古学会誌30
米田明訓　1980「南信天竜川沿岸における縄文時代中期後半の土器編年」甲斐考古17－１
和田哲　1975「西上遺跡」昭島市教育委員会

恋ヶ窪遺跡調査会（組織）

会　長	興津精二	国分寺市教育委員会教育長
副会長	星野亮勝	国分寺市文化財保護審議会副委員長
理　事	滝口　宏	東京都文化財保護審議会委員
	永峯光一	東京都文化財保護審議会委員
	坂詰秀一	東京都文化財保護審議会委員
	吉田　格	国分寺市文化財保護審議会委員
	清　祥一郎	東京都教育庁文化課埋蔵文化財係長（1980. 6　退出）
	高橋幸三郎	（1980. 6　就任）
	坂本喜市	国分寺市社会教育委員会議議長
	藤間恭助	国分寺市文化財保護委員会副委員長
	進藤文夫	国分寺市教育委員会教育次長
監　事	山田　弘	国分寺市教育委員会社会教育課長
事務局長	山下　実	国分寺市教育委員会文化財課長
事務局員	安田　暉	国分寺市教育委員会文化財課庶務係長
	広瀬恒雄	国分寺市教育委員会文化財課員（1980. 3　退出）
	鈴木　晃	国分寺市教育委員会文化財課員

調　査　団

団　長	永峯光一	東京都文化財保護審議会委員
顧　問	滝口　宏	東京都文化財保護審議会委員
参　与	吉田　格	国分寺市文化財保護審議会委員
調査員	安孫子昭二	東京都教育庁文化課学芸員　（1978. 9　退出）
	川崎義雄	東京都教育庁文化課学芸員　（1978. 3　退出）
	広瀬昭弘	国分寺市教育委員会文化財課員
	秋山道生	
	小松眞名	（1980. 3　退出）
	砂田佳弘	（1980. 4　就任）

付　　篇

凡　　例

1. 本文は原文のままとすることを原則としたが，次の語句は訂正した。

　恋カ窪 → 恋ケ窪，　摺 石 → 磨 石，　石 匕 → 石 匙

　巾 → 幅，　耀 → 曜，　メートル・米 → m，　センチ，糎 → cm

2. 挿図の大きさは，原本どおりとすることを原則としたが，例外もある。なお，地形図，土器，石器以外の挿図は新しくトレースし，文字は写植に改めた。

3. 挿図番号は原本どおりとした。

4. 遺構挿図のうち，土器は●（完形土器は◉），石器は□，礫は○，土製品・石製品は△で表現した。

国分寺市恋ヶ窪遺跡発掘調査概要

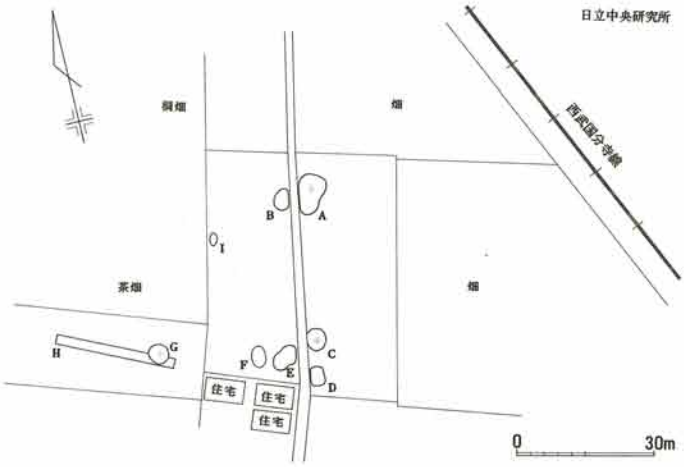
松井新一・藤間恭助

発掘経過

(1) 遺跡の位置

恋ケ窪遺跡は，東京都国分寺市恋ケ窪の，日立中央研究所構内から，その西，西武国分寺線の線路を越えた畑地に続く，南面する丘一帯に散在する縄文中期の遺跡である。すでに，甲野勇氏，塩野半十郎氏，松井新一氏その他による発掘調査が過去数回行なわれ，多くの加曽利E式・勝坂式の竪穴住居址や遺物が発見されている。

第1図　恋ヶ窪遺跡付近地図（×印遺跡）



第2図　発掘地点見取図

今回調査の地点は，国分寺線の西の畑地（国分寺市恋ケ窪167番地及び168番地）で，南東に丘を下ると，現在は埋め立てられてしまったが，野川の源流の一部をなしていた泉があり，また，南西に下ると一葉松，敷石式住居址を経て姿見の湧水に至る。附近には土器片多数が散在し，石斧等もまれではあるが表面採集できるような所であって，住居址の存在は早くから推定されていた地点である。

(2) 発掘の端緒

昭和39年10月19日，市営水道の導水管埋設工事が，前記の畑を南北に通ずる幅約2mの市道で行なわれた。この工事は，道路の東側にそって幅40cm，深さ1.2mほど掘ったものだが，こ

の際，多数の石およびりんご箱１箱ほどの土器片，打製石斧５本が出土した。連絡をうけた市教委社会教育課の職員が調査し，出土品を採集したが，土器片の中には20cm角ほどの大きさのものもあり，破片の状況からみると，かなりまとまった大きさのもので，工事の際破損したものもあったようである。その多くは加曽利Ｅ式のものであり，勝坂式とみられるものもあった。

(3) 発掘準備

昭和39年11月，市文化財専門委員会でこのことがとりあげられ，附近は近年著しく急速に住宅地化していく傾向にあり，現地の住宅地化も避けられないと思われるので，この際早急に発掘調査をし，記録による保存を計りたいとの結論が出された。都教育委員会，並びに文部省への所定の届出をすませ，12月19日の専門委員会では，発掘調査の具体的計画が承認された。すなわち，発掘の主体は国分寺市教育委員会並びに市文化財専門委員会とし，国分寺市教職員協議会（会長市立三小校長宮本至道氏）に後援を求め，実際の作業は市内小・中学校教職員の希望者18人と，中学生の希望者131人が行ない，調査指導は，国立音楽大学教授甲野勇氏，市文化財専門委員であり市立第一中学校長の松井新一氏の両名が当る等である。

なお，これに先立って，12月９日，市教職員協議会から参加者の募集についての案内が市内各校に配布されたのであるが，このような調査を市内の学校関係者だけで行なうことは全く例のないことなので，参加希望は大分あったが，何分にも調査期間が学期末・年末でもあったため，希望であっても参加はできないというう らみがあった。しかし，畑の空いている時期をえらばなければならないので止むを得ない事情だった。中学生の希望は，初め予定したのは１日約30人だったが，この方も休みになるところからかえって希望者が多く，131人にも達し，むしろ予算上から心配になるほどだった。また，市公民館を中心として活躍している婦人学級の一つ「りんどうグループ」は，かねてから郷土史の研究を熱心に進めていたが，今回の調査について案内をしたところ，たいへん積極的に協力してくださった。12月17日，市立第一中学校に参加者の集合を求め，松井校長から現地並びに発掘一般についての説明や諸注意を聞いた後，班編成その他具体的な打合せをした。生徒数が多かったので，ＡＢ二班に分け各班を更に二班に分けること，教職員も二分してそれぞれの作業の日時を定め，Ａ班を藤間が，Ｂ班を一中吉川教諭が指導することと等を定めた。

(4) 発掘経過

12月20日（第１日）日曜日だったので午前９時に附近の熊野神社境内に集合。たいへん寒い朝だったが，手に手にシャベルと弁当を持って，はりきって集った。

まずＡ地点附近をボーリングしたところ，さっそく数10cmの深さに遺物らしいものの存在が知られたので，まずここから表土をはがしていった。作業を始めると間もなく，多数の小土器片が出てきた。石斧も地表下 4,50 cm辺から出土しはじめ，中学生諸君も大いにはりきってシ

ャベルを振るった。はじめにボーリングした時，かなり大きな石らしいものに当ったが，これは長径30cmほどの大石だった。マイナス（深さ）70cmにあって，動いていないので，この地点の測量の原点とした。この石のほかにも数個の大石があったが，深さは大体同じレベルのようであった。その１つは数個に横割れしていた。原点の石の北40cmから大型磨製石斧が片面に焼けたひび割れのある方を上面にして出土した。黒曜石破片１個が南よりに出土したあたりから南東にかけて，黒褐色土の層は幾分傾斜して下がっているようであった。この日，この地点の出土品の主なものは，前記磨製石斧を含む石斧12であった。

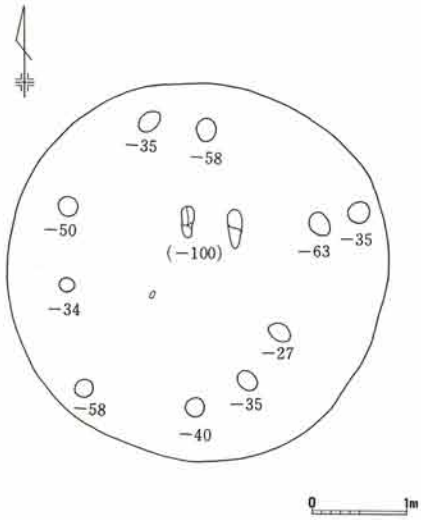
Ｂ地点からも，ボーリングの結果同様の手応えを認め，Ａ－２班が掘った。ここからも小土器片や小石多数と共に，黒曜石片１，石斧９，石匙１，磨石１，加曽利Ｅ式の連続するやや大きな土器片２が出土した。

また，たまたま畑の西はずれにボーリングを試みていて，多数の石を発見し，小ピットをあけてみた。（Ｉ地点）ここには，焼けた石数個を含む拳大～児頭大の石10数個があったが，許可をうけていない土地に接していたので調査を進めなかった。（この土地は，本調査の終了後間もなく宅地化し，２階のブロック建築数棟が立ち並んだ。）

午後はＢ班がＨ地点のトレンチを掘った。ここは草原になっていたので，幅２ｍで20数ｍにわたって掘ったのであるが，午前中のＡ・Ｂ両地点に比べて土器片等の出土は少なかった。そして，それはトレンチの西へ行くにしたがって一層少なくなっていった。結局，この個所での出土品は石斧17，小土器片多数（マイナス50～70cm），小石片等であった。

12月21日（第２日）Ａ班が午後からＡ地点の作業を続けた。黒曜石の小片数個，小は米粒大から大は２cm角ほどの大きさのものが出たので，石鏃の発見に注意していたところ，マイナス

第３図　Ａ住居址



第４図　Ｇ住居址

75cmから，有柄の一部欠損したものが１個出土した。同じ附近から木炭片も発見され，住居址に近いことが考えられた。このほか，窪みのある磨石１が出たが，最も大きな収穫は，作業を終わろうとする直前に，この日掘っていた最北部で，深さ70cmから発見された皿様の土器であった。これには一部に把手様の突起があり，対称となる方は欠損していたが，勝坂式末期と認められるものであった。（後に釣手付土器と判明）

Ｂ地点からは石斧磨石等が発見されたが，水道工事の際発見された土器片等の出土地点は，Ａ・Ｂ地点よりも南である（Ｃ・Ｄ附近）ことがわかったので，ここは埋め戻すこととした。

12月22日（第３日）午後Ｂ班がＨトレンチを掘り下げたが，石斧以外には特記するような出土品もなく，地下の状態にも変化が，認められなかったので，西より順次埋め戻した。

12月25日（第４日）前日雨天のため予定が１日遅れてしまったので，午後からＡ・Ｂ２班が作業した。この日からＣ・Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｇの５地点を追加して調査した。Ｃ～Ｆは水道工事の際出土品のあった附近，ＧはＨトレンチの東端である。各地点から石斧や土器片多数が出たが，Ａ地点の最南部で黒曜石片数個と共に石鏃１個，及び勝坂式の大型土器片（径40cmの胴部と小さな底部の破片）を発見した。深さは共に80cmであった。Ｃ地点のマイナス30cmから，小量の堀之内式土器片，Ｅ地点からは阿玉台式と認められる土器片が２・３出た。Ｆ地点からは加曽利Ｅ式土器片が多数発見された。

この日，釣手付土器の出土点から北東に40cm離れて，炉址様の石組みが発見された。これは，大小10数個の石からなり，北に開くコの字形をしており，石の上面は55～65cmの深さであった。南側（奥）の石は１本の棒状をなす閃緑岩様の石で，上部はすでにぼろぼろくずれるような状態であった。北の開口部に浅い小ピットがあり，この中から焼けた土及び小量の木炭片が認められたこと，及び，東側の石の１つに発火台として用いられたかと推測される丸い窪みがあることなどから，まず炉址と考えて間違いないだろうということになり，柱穴，壁の追求に努めたが共に発見するに至らなかった。また，この地点の南西部（炉址から約４ｍ）に，径１ｍ，深さ95cmの穴があったが，調査の重点が北部へ移ったので詳しく調べることはできなかった。

12月26日（第５日）学校も休みになって，午前からＡＢ２班が作業した。Ａ地点から炉の北ならびに北東約２ｍに，柱穴らしい土色の変化が認められたほか，かなりまとまりそうな加曽利Ｅ式の土器片二個分と，黒曜石片数個が出た。Ｃ地点からも，完全に近い土器片（加曽利Ｅ式）および文様からは加曽利Ｅ式とみられるが形は勝坂式に近い土器片などが出土した。

Ｃ地点からは炉址が発見された。この炉は，13個の丸石を楕円形に並べたもので，南に10度低く傾斜していた。炉の内側で南北（長径）50cm，東西（短径）35cmほどの比較的小さいが整った形であり，地表からの深さは68cmであった。

Ｇ地点はロームまで掘り下げたが，地表下１ｍのローム上に長楕円形の大石が２個（長径35

cm，および45cm）発見された。この石は東西に向かい合って平行しており，２個ともひびわれがはいっていた。中心の土はかなり焼けていたので，コの字型の炉の一部が欠けたものと判断した。Ａ・Ｂの炉に比べて深く，完全にローム上にあること，及び，出土する土器片等から勝坂式の住居址と考えられた。柱穴と見られるもの２個所も引続いて発見された。

12月27日（第６日）朝から曇天の寒い日だった。Ｇ住居址から柱穴らしいもの３本目と，明瞭ではないが壁らしい一部とを発見した。Ｄ・Ｅ・Ｆの３地点は，日時の余裕がないため，調査を打ち切って埋め戻した。

Ａの炉址から北東に向かって細いトレンチを試みたが，壁を発見することはできなかった。しかし，柱穴と思しきものが更に１本発見された。出土品の主なものには，無文様で簿手の大型土器片１個分（甲野教授は加曽利Ｅ式と見られた），石槍１個があった。この土器片は炉址の南東2.6ｍ，深さ75cmにあり，破損状態がひどく復原は不可能だった。石槍は片岩質のもので，炉址から南々東に3.6ｍの地点，深さ70cmにあった。

昼前から降り出した雨は方眼紙を濡らし，クリノメーターを泥まみれにしたが，炉址の10分の１実測図を書いた。りんどうグループのおかあさん方から熱い茶をすすめられたが，その厚意は忘れられない。止みそうにない雨のため，中学生諸君の健康を案じて，作業を昼で中止した。

12月29日（第７日）前日は雨天のため中止したので，予定を２日間延長し，30日まで作業することとした。３地点（Ａ・Ｃ・Ｇ）とも柱穴を追求して住居址を明らかにすることに努めた。Ａ地点はロームまで掘り下げて柱穴１本，Ｇ地点からもそれらしいものが幾つか発見されたが，Ｃ地点からは発見できなかった。

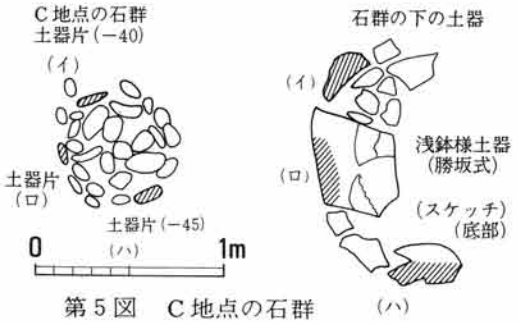
出土品としては，Ａ地点から小型磨製石斧および石錐，粘板岩の石匙が，いずれも炉址の西，深さ70～75cmから発見されたほか，25日に発見された石鏃の出土点に接した所から，更にもう１個の石鏃が見つかっている。深さはやはりマイナス80cmのレベルであった。

Ｃ地点に於いては，炉心から壷が発見されたほか，硬砂岩質の大型石匙１個，石鏃１個が出土した。炉心の壷は，例によって底の抜けた小型の加曽利Ｅ式であった。このほか，床面と同じレベルから，磨石や石斧，加曽利Ｅ式の壷上半分などの出土品があった。

Ｃ地点の炉址の南面1.30m，深さ40cmから数10個の石群が発見された。直径70cmの円形をなしており，周囲に３個の黒色の土器片が見えており，その一つは底部と認められた。この石を取り除くと，さきに露出して見えた土器片は，大型の浅鉢様土器の一部であった。更にこの土器片を上げてみると，その下にはまた数個の石があって，床面とほぼ同じレベルに達していた。この土器片はまだらに黒く焼けており，その外側の一部に勝坂式と認められる文様があった。

12月30日（第８日）３地点とも柱穴の発見に努めた。Ａ地点では，炉址を残して周囲をロー

ムまで掘り下げ，さきに発見されたものを含めて都合6本の穴を確認した。穴の深さは平均して45cm（床面より）であり，その一つの柱穴の中から石斧1個が発見された。この地点は最初炉址よりもはるかに南を掘っていたのだが，南部にはさきに述べてきたように，石斧，石槍，石鏃や黒曜石の小片，勝坂式の土器などの出土をみたところであり，また，深い円形の穴があったりして，A住居址よりも深い所に別の住居址が存在するらしいと推測されたが，この日をもって作業を終わらなければならなかったので埋め戻しを行なった。



第5図　C地点の石群

C地点の炉址も黒褐色土のレベルにあって，柱穴の発見は極めて困難であり，炉の中心から1.6 m南西に，床面からの深さ35cmの柱穴1個が認められたにすぎなかった。床面に石斧3個，磨石1個があったほか，炉址の北1.5 m辺には，やはり床面と同じ深さあたりから勝坂式土器の破片や木炭片などが見られた。この辺一帯（炉址から1.5 m以北）は黒褐色土の落ち窪みとなっていて，かなり深いようであったが，追求する時間がなかった。或いはA地点同様に，北側に他の住居址が複合しているのかも知れないと思われた。

G地点からは，結局10個所の穴が掘り出された。穴の深さは床面から27〜63cmあり，内1本は他の1本と接しており，傾斜していたようである。A地点でもそうであったが，この炉址も中心から多少ずれていた。

3地点の外周に杭を打ち，綱を張り，立て札なども立てて，現地説明会までの保全措置をし，新年を迎えるにあたっての整頓清掃を済ませた時は，もう足許にさえ小晦日の簿暮が忍びよっていた。

(5)　発掘以後

1月16日午後埋め戻し整地の作業を行なった。作業に先立って，市内各学校の職員生徒及び婦人学級の母親をはじめとする市民多数に対する現地説明会を行ない，甲野教授，松井委員より住居址並びに出土品等についての説明がなされた。この日も，半数の女子生徒を交えた40人の中学生諸君が最後まで熱心に励んでくれた。整地作業の途中，出土個所は明らかでないが，ナイフ形石器が発見された。

3月12日，都教育委員会指導主事の久田芳先生に石器の材質について鑑定をうけたが，このことについては後述される通りである。

3月30日，31日，並びに4月2日の3日間，市立一中校長室に於いて，一中の女子生徒協力

のもとに土器の復原作業を行なった。不馴れな上に，破損程度のひどい物が多く，容易な作業ではなかった。この作業途中に，12月25日Ｅ地点より出土した土器片の中から顔面把手を見出したことは，今回の発掘調査の最終的収穫として，一同の大きな喜びであった。

なお，整地後の１日，現地の所有者である尾崎さんから，Ａ地点で石鏃１個を採集したとの連絡をうけた。雁股の整った形の石鏃であったことを付記しておく。

（国分寺三小教諭，藤間恭助）

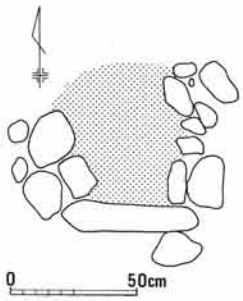
「ま　と　め」

今回の発掘は９個所をトレンチして，ＡからＦまでとＩは尾崎仙次郎氏（恋ケ窪 368）の所有地，ＧとＨは鈴木二郎氏（恋ケ窪 158）の所有地である。その中ＡＣＧの地点で竪穴住居址を確認した。ＢＤＥＦＨＩの６個所は，住居址からはずれているものと，調査の予定日数の関係上十分調べることができないものとであった。この遺跡は縄文中期の勝坂式，および加曽利Ｅ式を主とし，他に中期の阿玉台式，後期の堀之内式の土器片が若干含まれていた。今から大体３・4000年ぐらい前のものである。

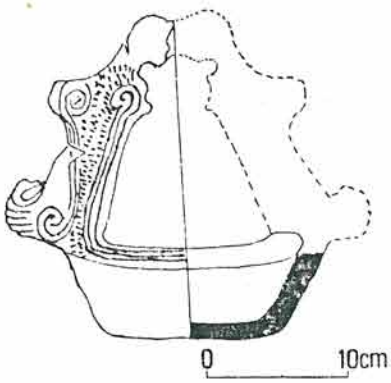
遺跡・遺物

(1) Ａ竪穴住居址（加曽利Ｅ式）

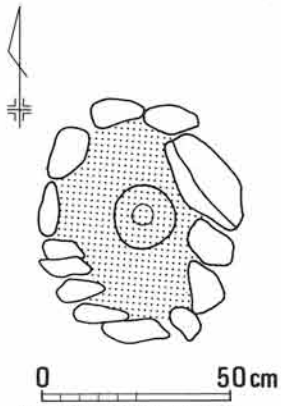
最初に調査を始めたところで，今回の発掘地の一番北にあたる。このＡ地点の中でも北寄りと南寄りに住居址が複合していた。始めその南寄りの黒土，黒褐色土が深いことを確め，これを調査しているうちに北側のやや浅いところに別の住居址の炉があることが分ったので調査の重点を一先ずこれに移した。炉石の上辺までの深さ55㎝乃至65㎝で，大体コの字形の北向きの炉である。炉の大きさはその外側で，間口，奥行とも約65㎝である。炉の奥側に長さ約45㎝の細長い石が東西にあり，この石は閃緑岩で大変もろく崩れやすかった。炉の内部はやや深い所にかなりの焼土や木炭があった。炉から推定した床面が浅いので柱穴の判定は困難であったがかなり掘り下げて調査したところ，床面から30㎝乃至50㎝の深さの柱穴と推定されるもの大体６本があった。東北の柱穴から短冊形の石斧が発見されている。住居址が浅いため壁面の判定は出来ない状況であったが柱穴から推定してこの住居址の直径は５ｍ位と思われる。床面と推定される層（60㎝位の深さ）からは加曽利Ｅ式の破片が主で，炉の東南２ｍ余の個所で，深さ75㎝に，文様の極めて少ない大型薄手の加曽利Ｅ式土器片がまとまってあった。この住居址の南側は次第に黒褐色土が深くなり，大型勝坂式土器の破片が多くなった（復原可能と思われるものもある）。西南部の道路際に地表面からの深さ１ｍ，径１ｍ程の穴があった。これらの近



第６図　Ａ住居址炉址



第７図　釣手付土器



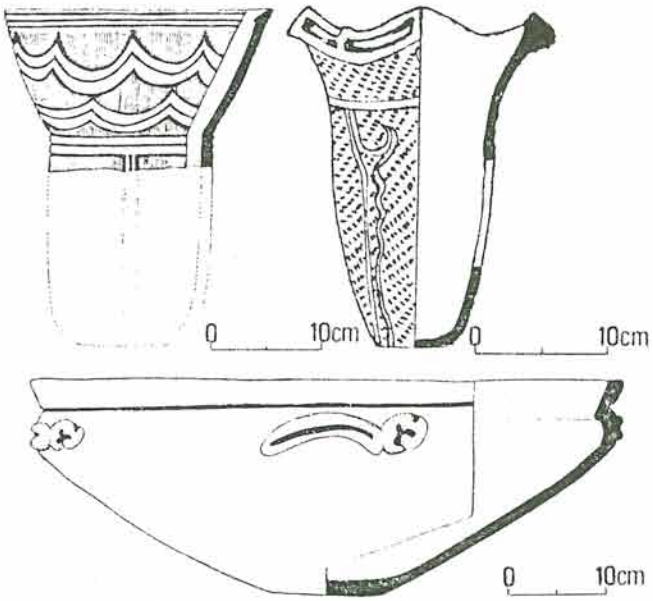
第８図　Ｃ住居址炉址

くに勝坂式の住居があったものと思われるが，前記の住居址と複合していること，又道路（幅約２ｍ）に接近しているため住居址を確認することが出来なかった。前記加曽利Ｅ式住居の炉の西南側40cmに釣手付の土器（直径18cm，釣手のある方は約24cm，高さ22cm）が発見され，勝坂式の末期であるが，炉石の面よりやや深いところから発見されたので，南側の勝坂式住居（推定）に属するものではないかと思われる。なおこの釣手付土器は三分の一ほどを欠損しているが，大変珍らしい土器で，同形式のものは八王子市犬目，山梨県上野原，長野県井戸尻などにある。

石器は磨製石斧２個（砂岩），大形の方は長さ15cm（一部欠），幅７cm，厚さ５cm。小形の方は長さ 6.5 cm，刃先の幅３cm，厚さ１cmである。つぎに緑泥片岩の石槍（長さ 4.7 cm，幅 1.9 cm）がある。これらはともに発見された位置は北寄りの加曽利Ｅ式住居址の範囲内であるが，深さ70cm乃至75cmであって，床面すれすれか，やや深いように思われる。南寄りの深い方には黒曜石の石鏃３個（雁股２，有柄の一部欠１）とその破片が特に多かった。右の磨製石斧を除いた一般の石斧は，Ａ地域全体で短冊形７，撥形９，不明確又は一部欠損のもの11，計27（砂岩26，片岩１）であった。

(2)　Ｃ竪穴住居址（加曽利Ｅ式）

Ａ住居祉の30ｍ程南で，12月25日から掘り始めた。道路（幅約２ｍ）の東約１ｍ80cmで，深さ65cmに，やや玉子形に近いような炉があった。その大きさは炉の外側で東西60cm，南北68cmであった。炉に使用された石はＡ住居址の炉に比してはるかに小さい。然しこの炉には径17cm程の小さい土器が，炉の中央よりやや東寄りに埋めてあった。炉の中にはかなり焼土が沢山あった。柱穴は炉から 1.5 ｍほど東南に一個所，床面から35cmの深さがあった。この炉を中心とした住居址は西１ｍ80cmに道路があり，炉の東北は１ｍ50cm位から先は黒褐色土が深くなり住居址が複合しているものと思われる。その上，炉のあった住居の床面が浅いので柱穴及壁の調査は非常に困難とみとめられたので，他の柱穴の追求は中止した。土器は炉の南１ｍ20cmに



第９図　（左上）加曽利Ｅ式土器（Ｃ住居址）
第10図　（下）　勝坂式土器
第11図　（右上）加曽利Ｅ式土器

薄手の加曽利Ｅ式（第９図）の土器片が一個分近くあり，他にも同式の土器片が見られるので，この炉を中心とした住居址は加曽利Ｅ式と思われる。然しその周辺は複雑で，炉の東北２ｍほどで，深さ30cmには縄文後期堀之内式の土器片が３片ほど発見されており，それよりやや炉寄りで，深さ35cm位から下に勝坂式のかなりまとまった土器片や，散らばった破片が沢山見られた。ごく少量の阿玉台式（中期）土器片もあった。炉の西南１ｍ30cm，深さ40cmから断片的土器片に囲まれて，径70cmほどの中に多数の石群があった。これは石を焼いてその熱を利用する炊事場ではないかと思われる。この石群の下に文様は少ないが勝坂式の特徴のある大きな土器の一かたまりがあった。（第10図）又，炉の東側１ｍ50乃至２ｍにも勝坂式の土器片がかなり見られた。以上の土器片の状況からこのＣ地点は比較的浅い炉を中心とした部分は加曽利Ｅ式住居址と思われるが，その周囲でやや深いところは勝坂式が多く，複合した住居址と推定される。石器は炉と石群の間に硬砂岩の石匙（長さ柄とも7.3ｃｍ，幅８ｃｍ）が１個，石斧は短冊形３，撥形15，分銅形２，その他明確でないもの，一部欠損など22個，計42個（砂岩26，片岩９，礫岩２，石英閃緑岩２，粘板岩１，不明２）であった。

(3)　Ｇ竪穴住居址（勝坂式）

Ｃ住居址の西方30ｍで，Ｈトレンチとともに12月20日から調査したところ，少量の加曽利Ｅ式を除いては殆ど勝坂式の土器が多い。炉は深さ約１ｍで，長さ35cmと，45cmの細長い石が33cmの間をおいて向い合っており，コの字形と思われる一辺の石は失なわれていた。簡単な炉であるが中はかなり焼けていた。柱穴らしきもの床面からの深さ27cmから63cmまで10個所あって，その中，間隔などを判断して５本位はこの炉を中心とした住居址にあてはまるが他は明確でない。初心の生徒が多数で指導の手不足もあって，壁の判定は困難であったが，柱穴の配置から推定してこの住居址の直径は，約４ｍで比較的小さい竪穴住居址である。前記二つの竪穴と異なってここは明確な勝坂式住居址である。石器は石斧が主で，撥形が特に多く24個，短冊形３，不明確なもの10，計37個あった。他は磨石，ナイフ形石器（砂岩）などで，後者は鎌に似てい

るが刃（幅８㎝）が外側にあるのでナイフ形とした。柄の部分は一部欠損している。

(4) その他の試掘地点

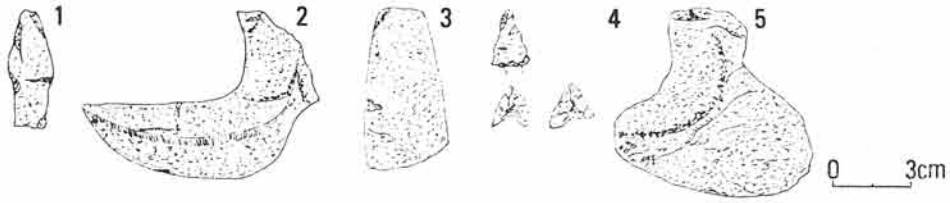
住居址は前記の三つであるが，トレンチ（ＢＤＥＦＨＩ）ではＥ地点に特に土器が多く（加曽利Ｅ式が主），中でも完全に近い加曽利Ｅ式土器（高さ25㎝，口縁部の直径20㎝，底部の直径７.５㎝）があった。（第11図）この式の文様の特徴である波形の紐が隆起線でなく沈線になっており，後期に近い加曽利Ｅ式である。ややまとまった土器が２個分（加曽利Ｅ１，勝坂１）ほどあった。特にこの地点で珍らしいのは顔面把手（勝坂）と無文赤色の大きな破片が１個あって，（土質がかなり赤い），その形からは加曽利Ｅ式と思われる。

このＥ地点の西につづくＦ地点は勝坂式がやや多いが，加曽利Ｅ式及び後期に近い土器片も若干見られた。その他トレンチＢ，Ｄ，Ｈはいずれもやや勝坂式が多く，加曽利Ｅ式の土器片が若干含まれていた。Ｉ地域のトレンチからは焼けた石数個が見られたが，すぐ隣りが許可を得ていない土地であったので調査を進めなかった。

今回調査の全体から発見された石斧は合計192個で，その内訳は左の通りであって，撥形が多く，ついて短冊形，不明確並びに一部欠損のものも多い。

地　点	A	B	C	D	E	F	G	H	I	計
短冊形	7	5	3	1	6	1	3	3		29
撥形	9	3	15	3	5	6	24	0		65
分銅形	0	1	2	2	0	0	0	0		5
その他	11	11	22	7	18	4	10	10		93
計	27	20	42	13	29	11	37	13		192

地点別出土の石斧（完全磨製２個を除く）



第12図　石器実測図　１、石槍 2、ナイフ形石器 3、磨製石斧 4、石鏃（３個） 5、石匙

第12図

以上今回の調査を要約すれば，縄文中期から一部後期にかけて，釣手付土器，顔面把手および変化に富んだ土器片が多数見られたこと。石器としては磨製石斧２，石匙３，石槍１，石鏃４，ナイフ形石器１，梵字形石器２，磨石10，石錐１など各種の石器と，192個の多数の石斧が発見されたこと。特に三つの竪穴住居址の炉が原則的にはコの字形であっても，その炉石の大きさ，形，炉全体の感じが大変異なり，又複合した竪穴住居の複雑さ，普遍性の中に特殊性

が多くみとめられ，発掘調査における興味を深くした。

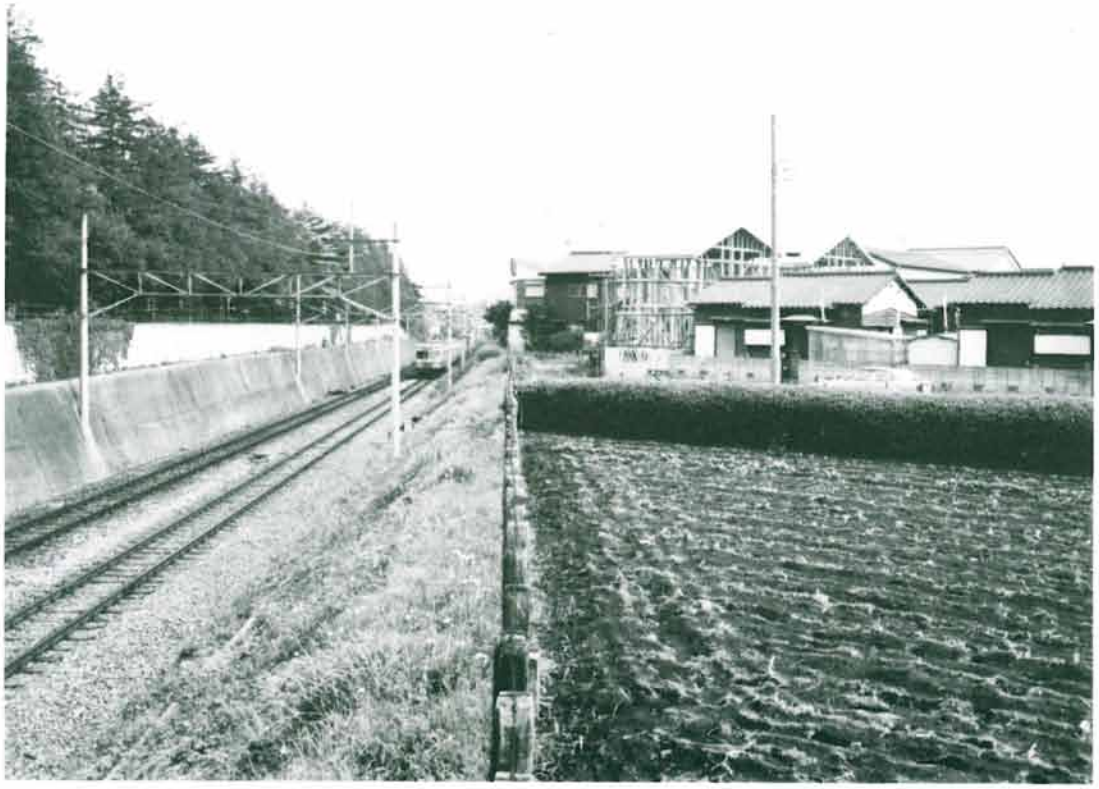
なお今回の調査は国分寺市教育委員会の主催であったが，市内の中学校の生徒を主とし，市内の小中学校の先生及一部地元の婦人会の協力を得て，最後の埋戻しまで完全に行なわれたこと，特に１月16日（土）の午後北風の強い日に女子生徒20名を交えて40人の生徒が三つの竪穴を埋め終わるまでよく協力した状況を見て私はほんとうに嬉しく思った。当日の模様はＮＨＫのテレビにも取材されて，後日放送された。この発掘における学問的多くの成果とともに，生徒の実地観察の態度，協力精神，責任感，勤労の精神の育成などに重要な意義があったものと思う次第である。

最後に国分寺には無土器文化の時代から，縄文時代にかけてその遺跡が多いのであるが，国分寺台地の南部は地形に変化があり，湧水が特に多いことが理由と考えられる。最近住宅が増加し，都市化されつつあるため，調査を急ぐ必要がある。

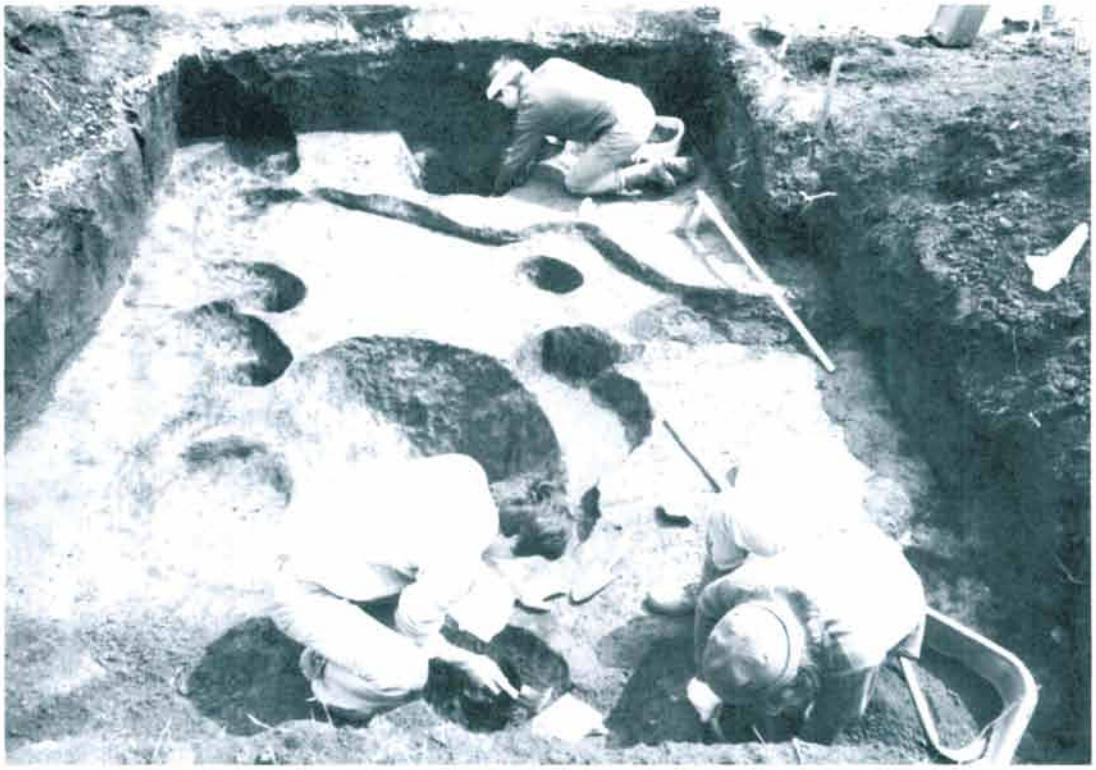
（国分寺一中校長　松　井　新　一）

図　　版

恋ヶ窪遺跡遠景（中央鉄道学園内より撮影）



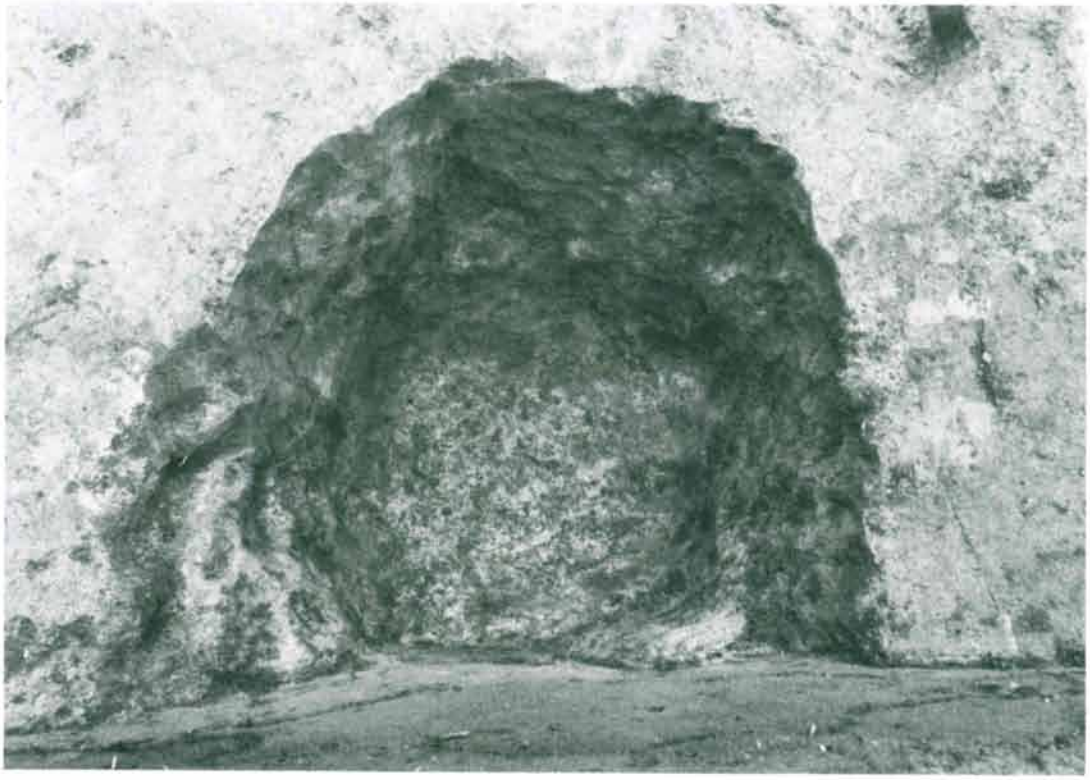
第４次調査地区近景



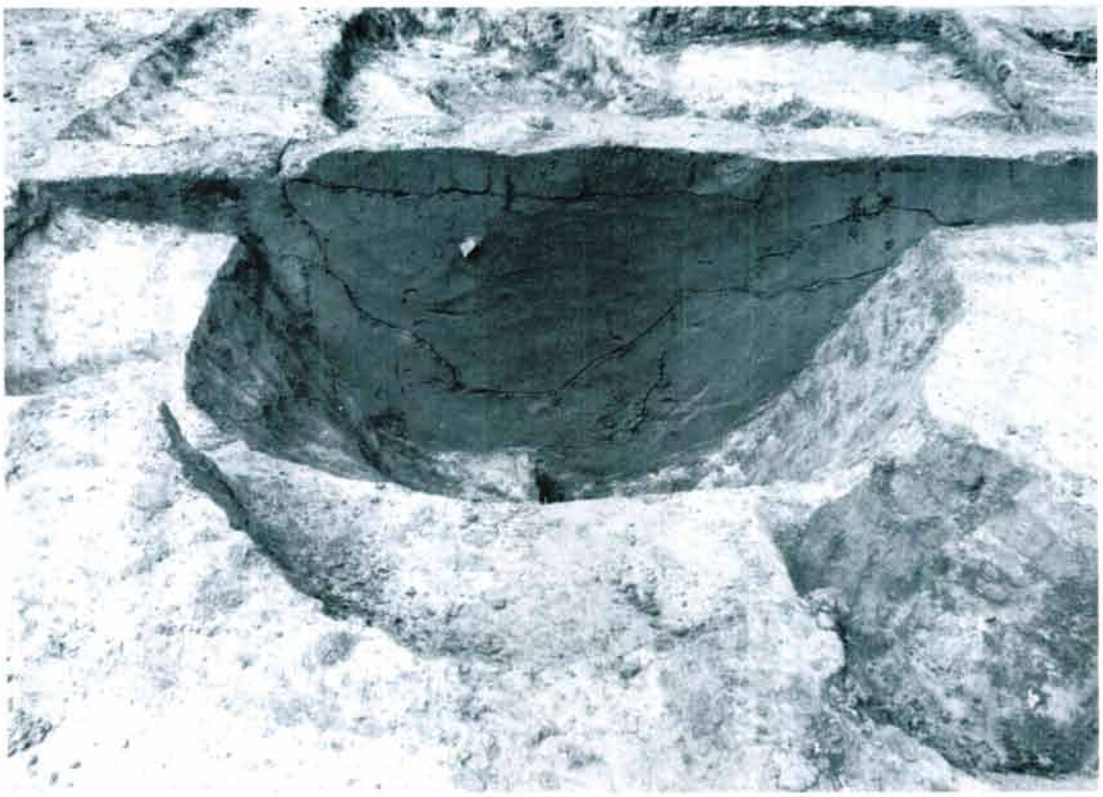
発掘風景

10号土壙

11号土壙

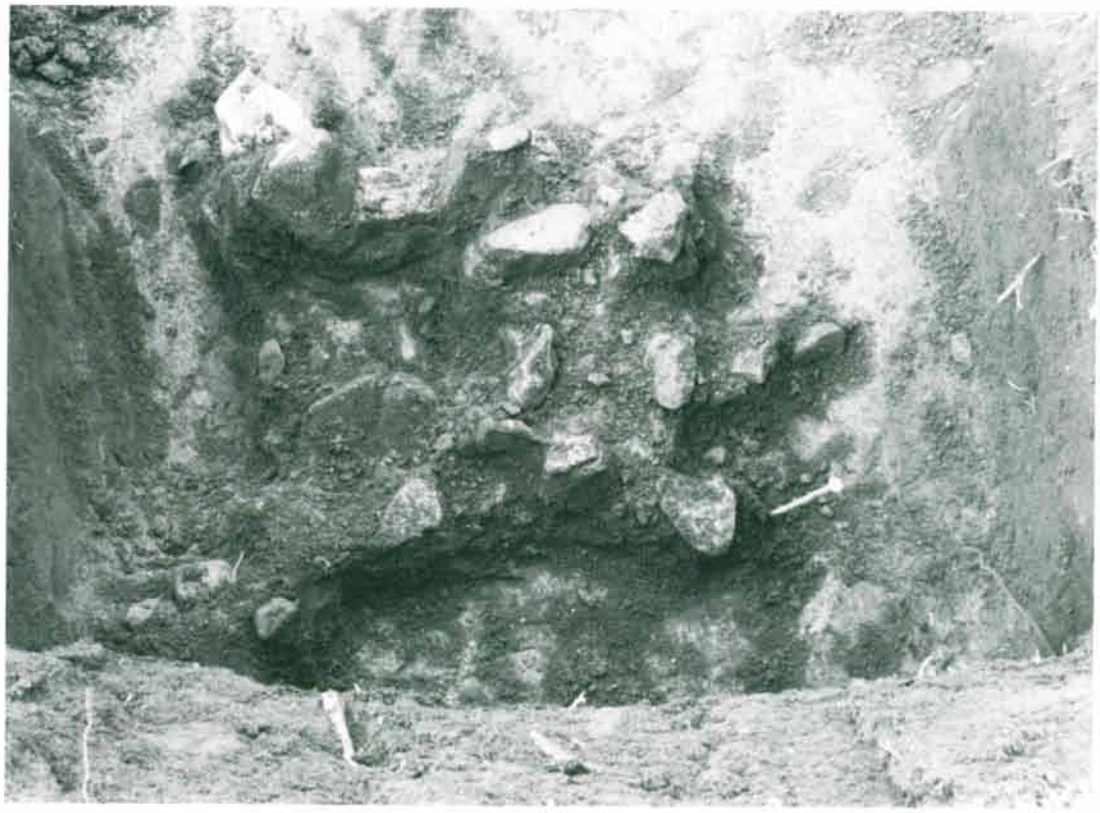


12号土壙



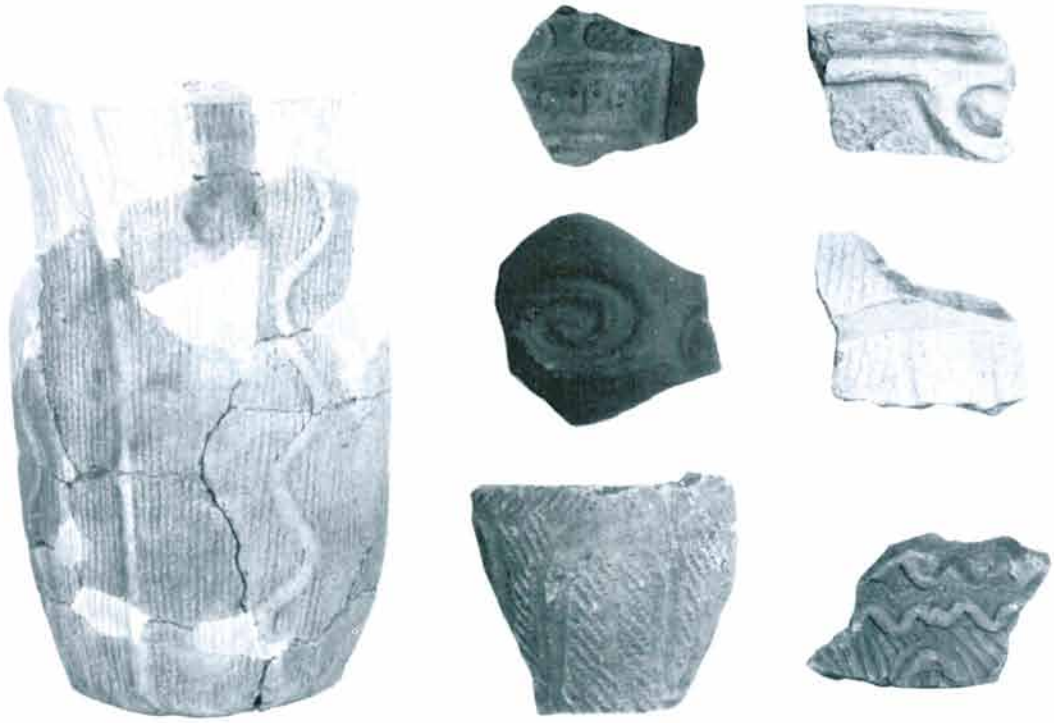
10号土壙断面

13号土壙

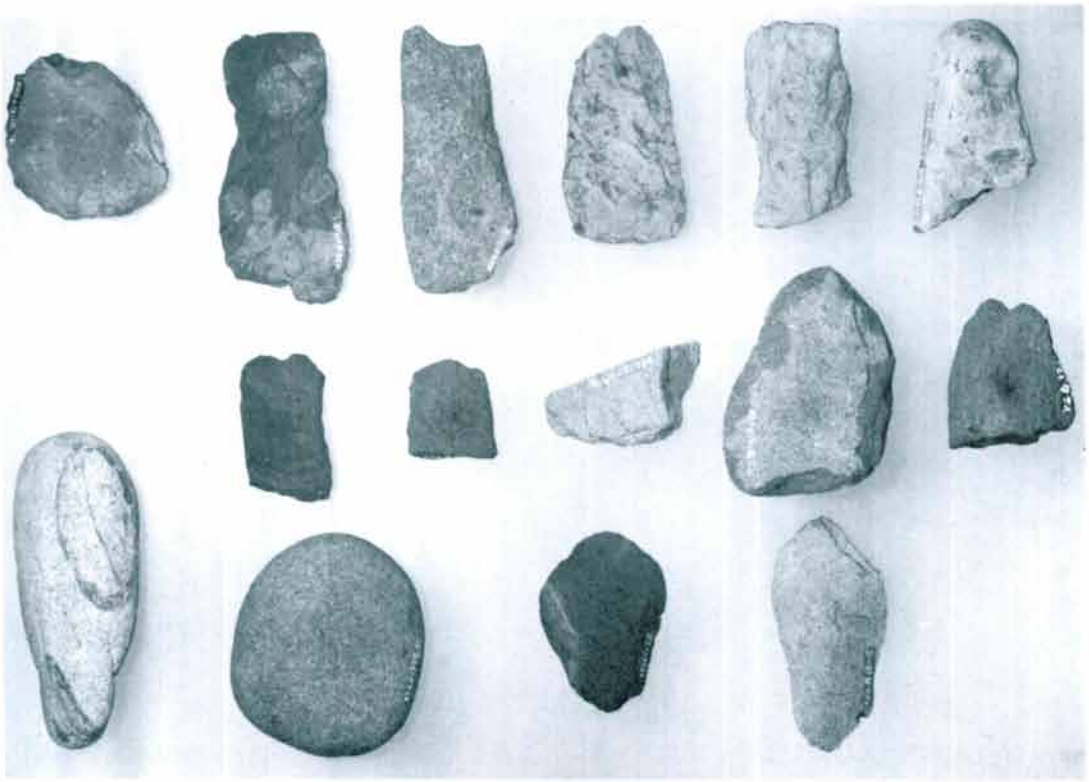


5号集石

5号集石



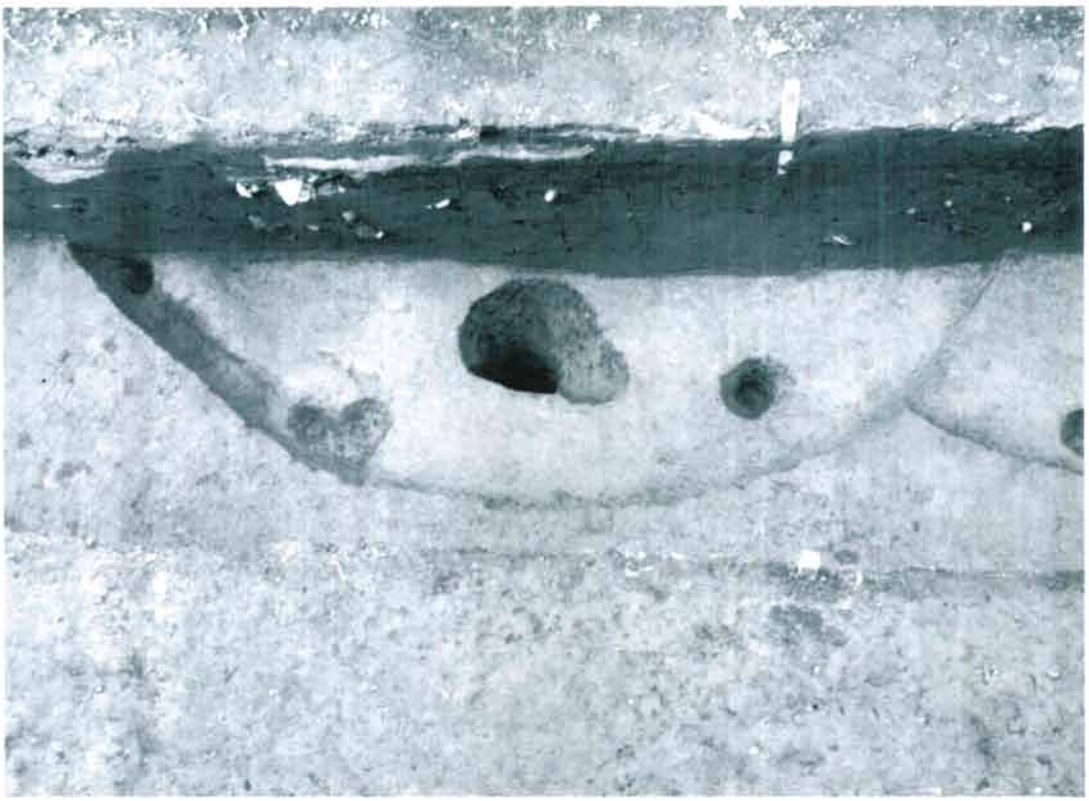
出土土器



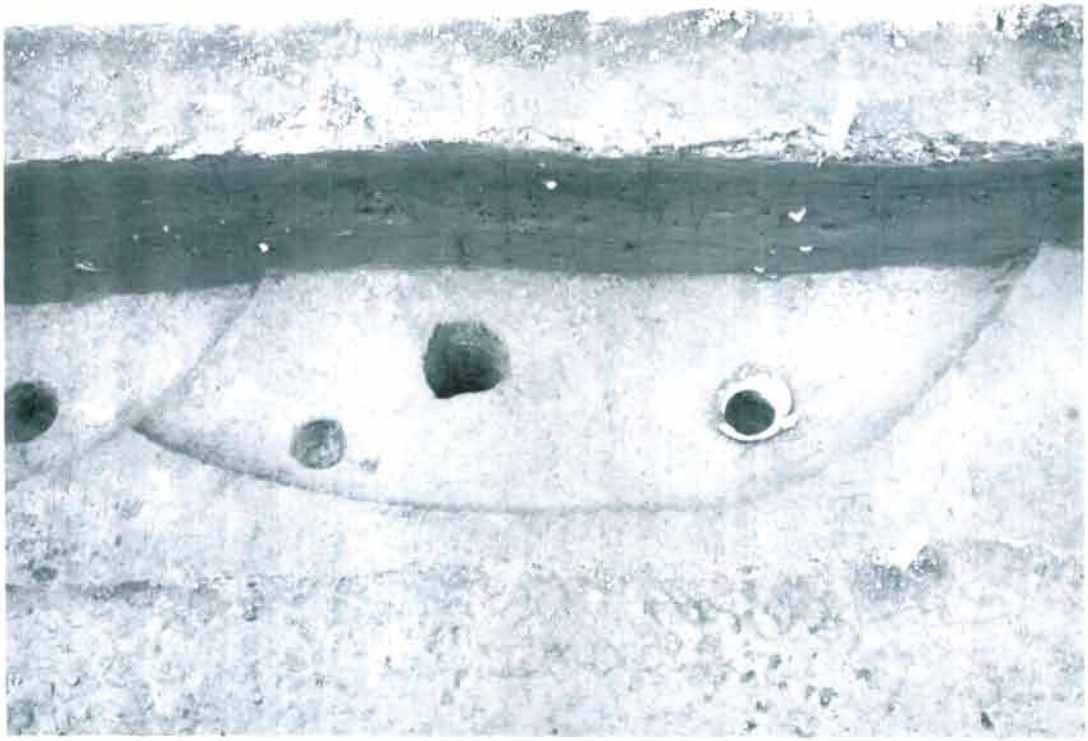
出土石器

発掘風景

発掘区全景

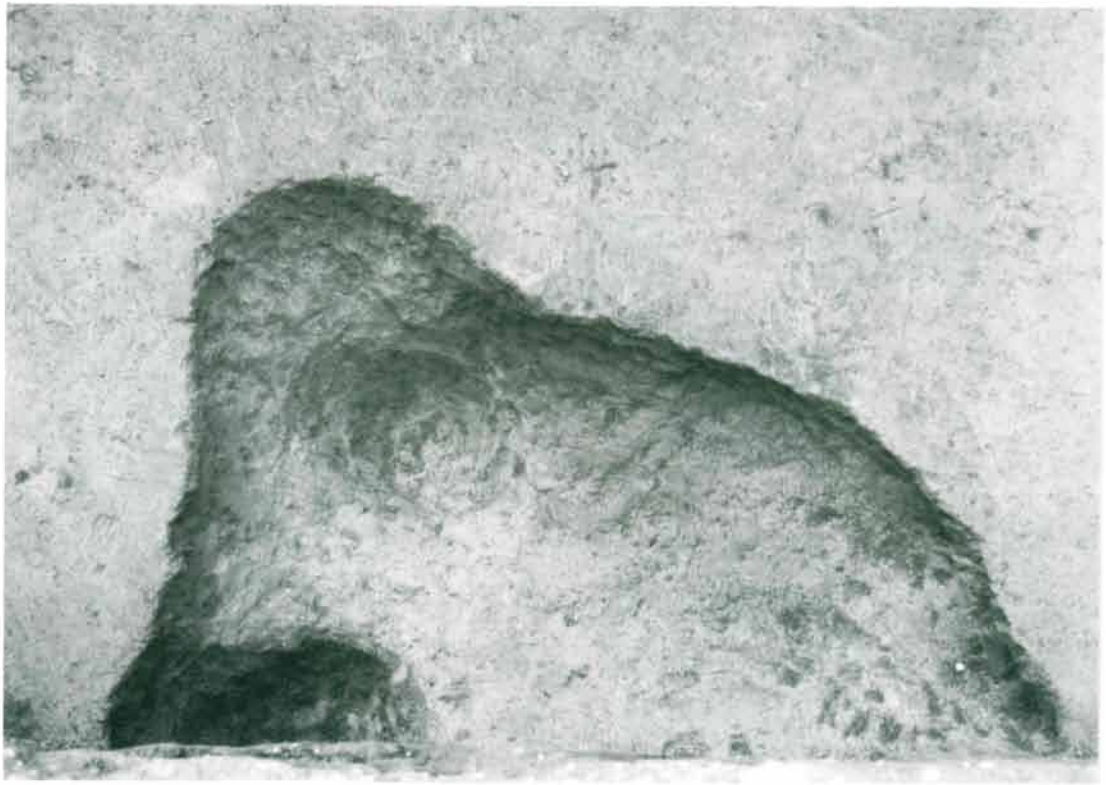


10号住居址



11号住居址

11号住居址埋甕

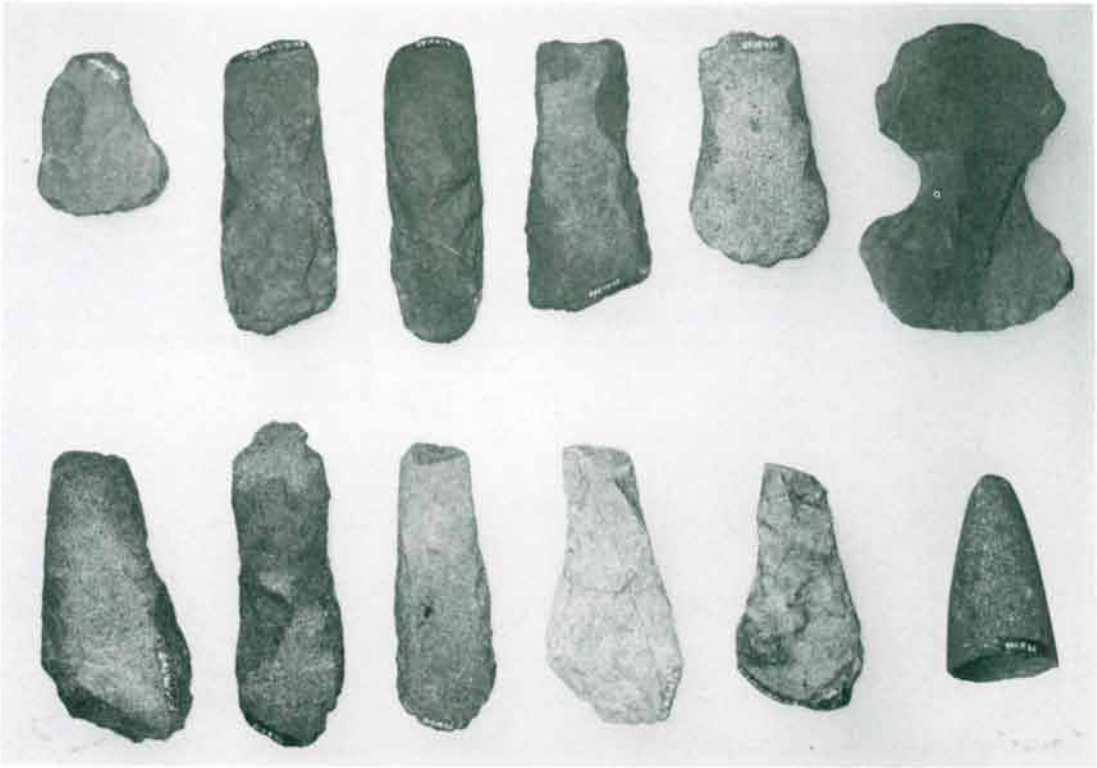


2号土壙

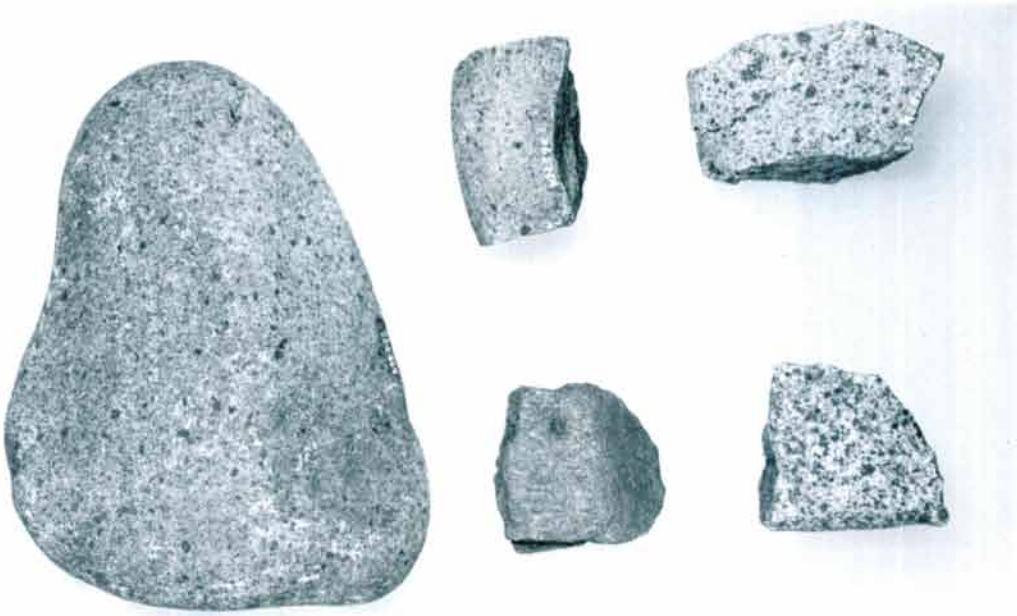
出土土器

出土土器

出土土器



出土石器

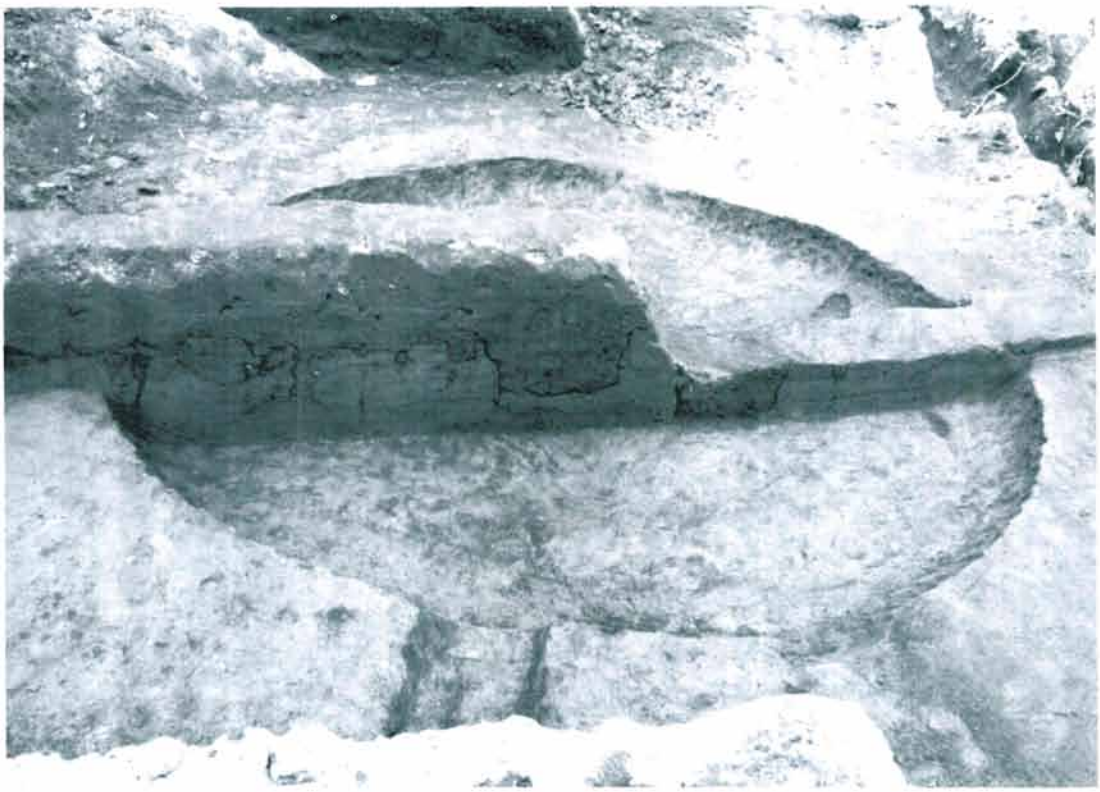


出土石器

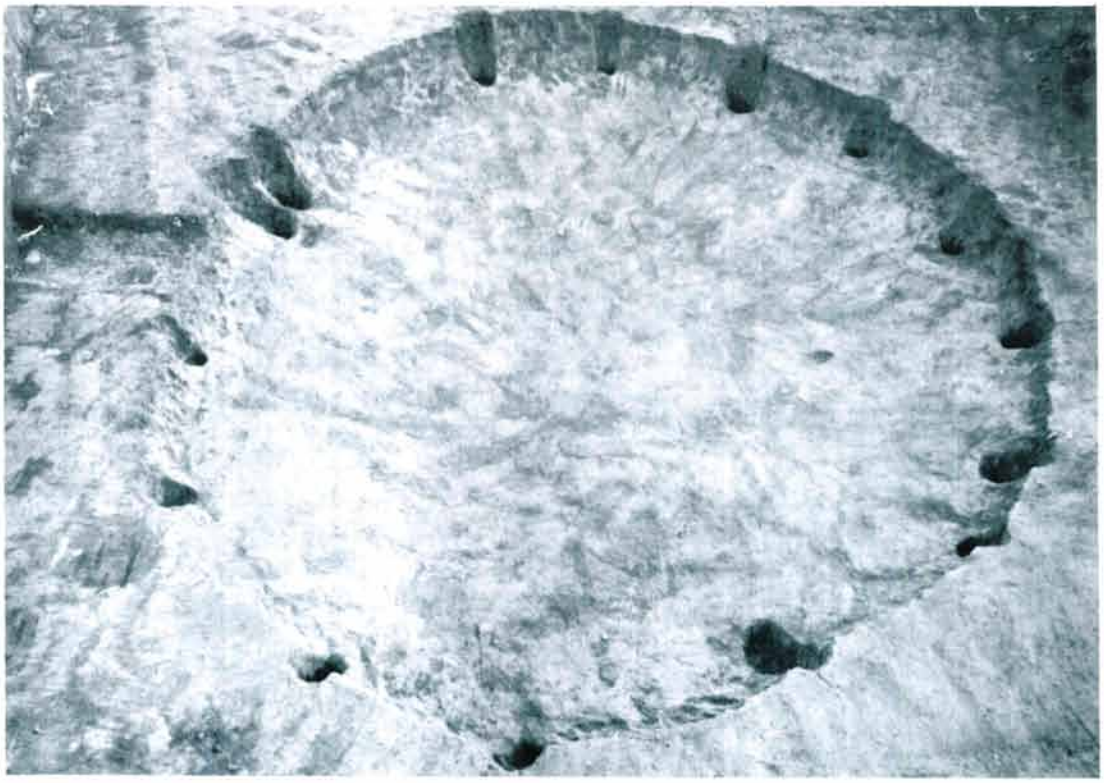
第 6 次調査地区全景

調査区全景

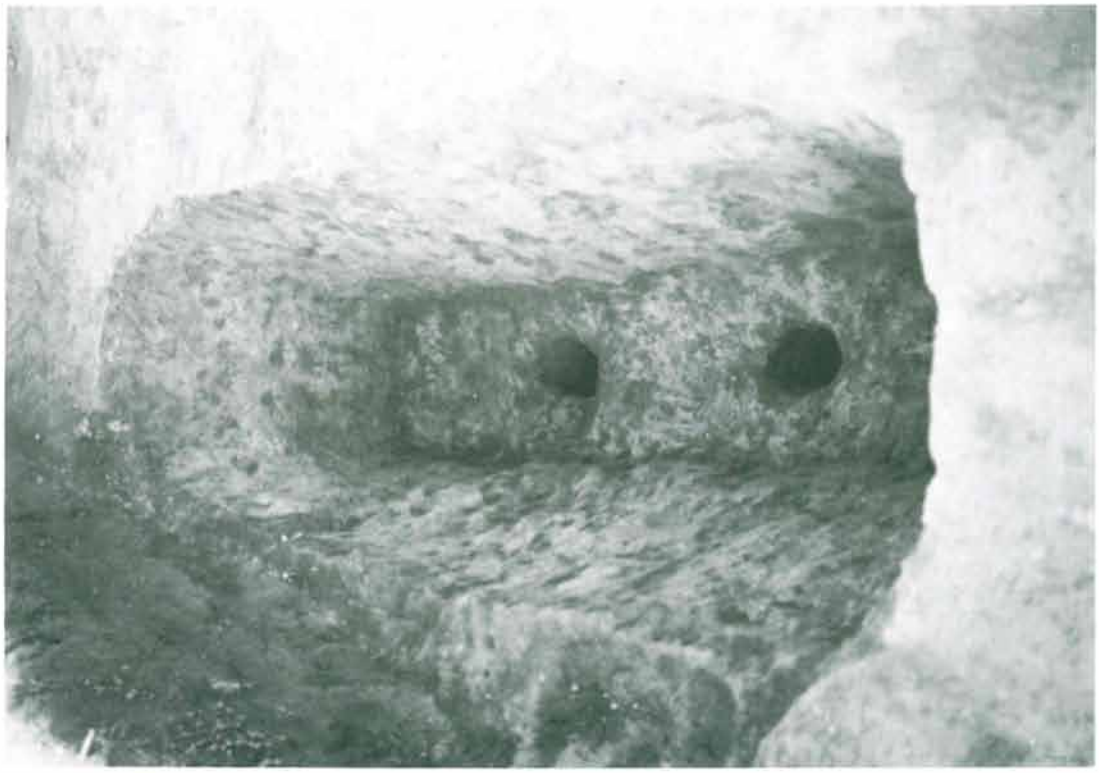
発掘風景



18号住居址



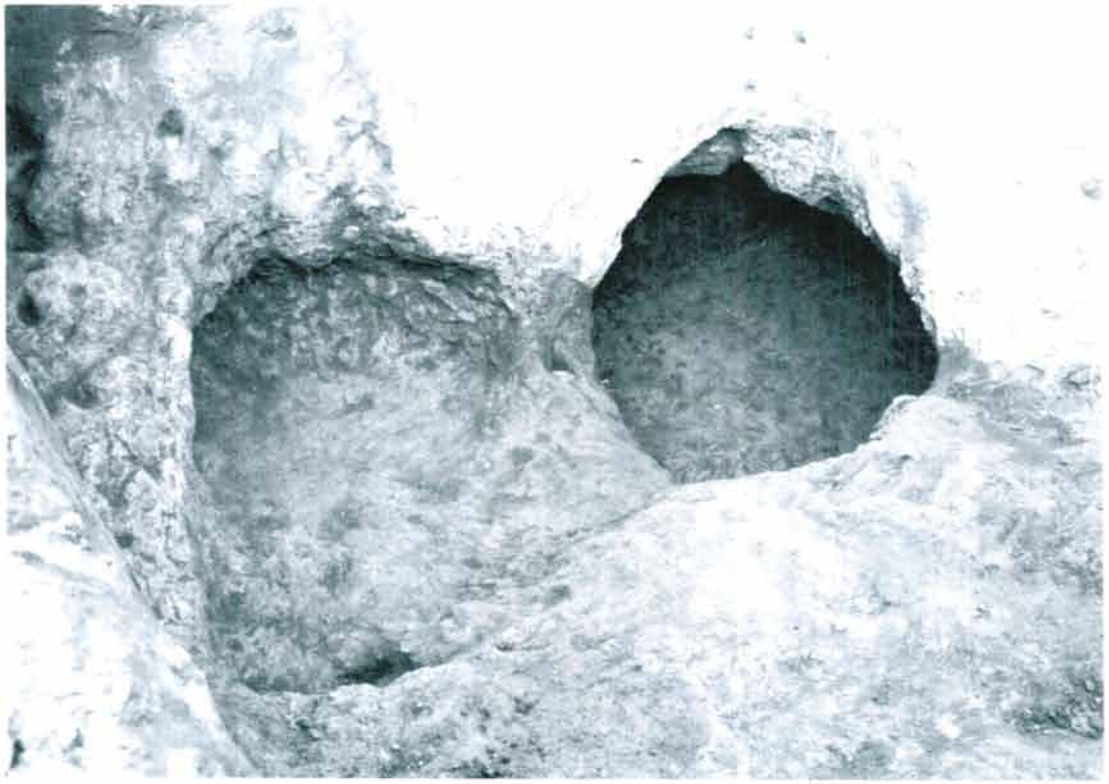
18号住居址



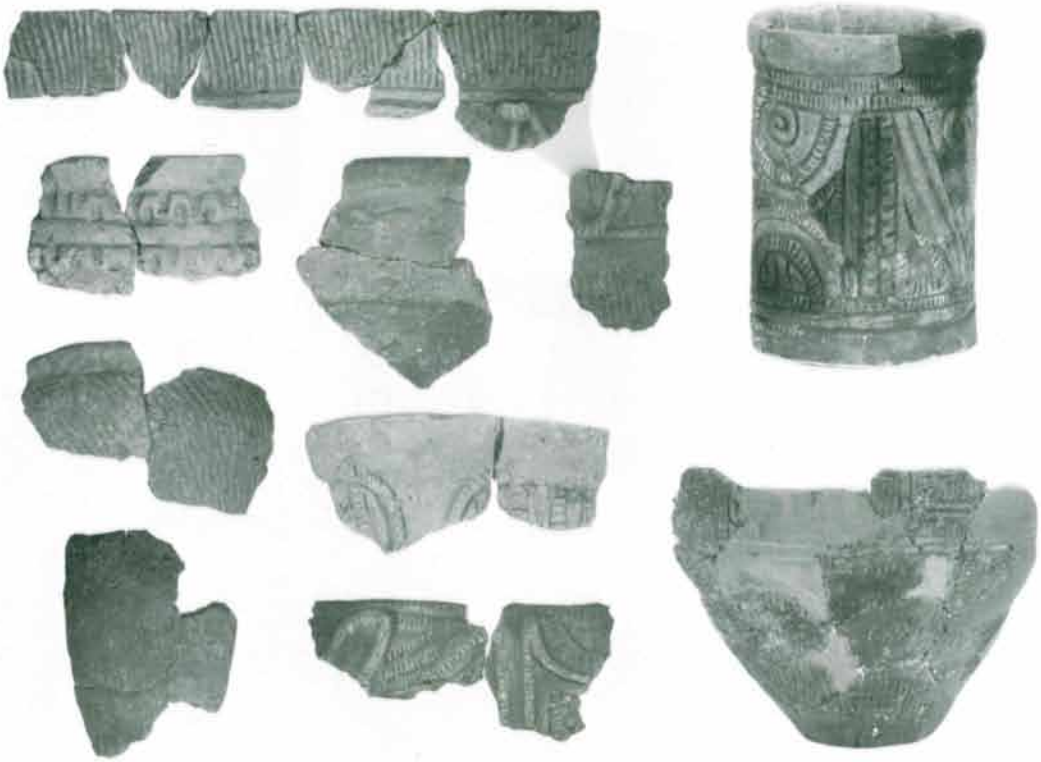
14号土壙

15号土壙

遺物集中



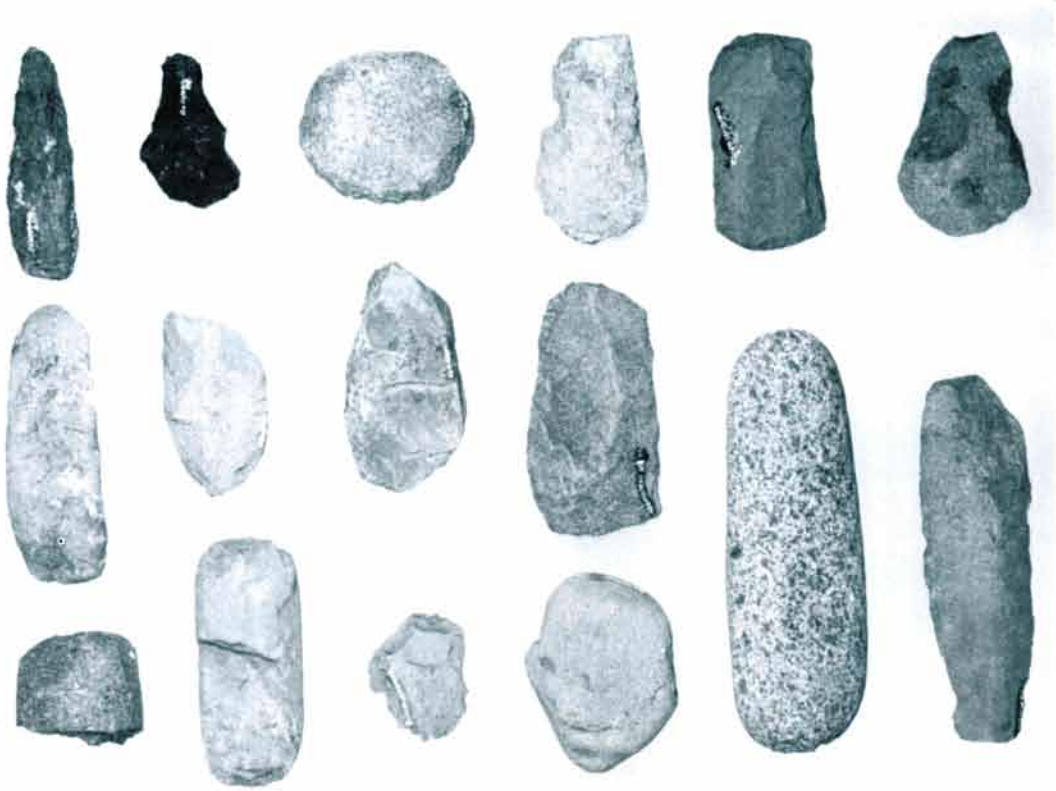
地下式壙



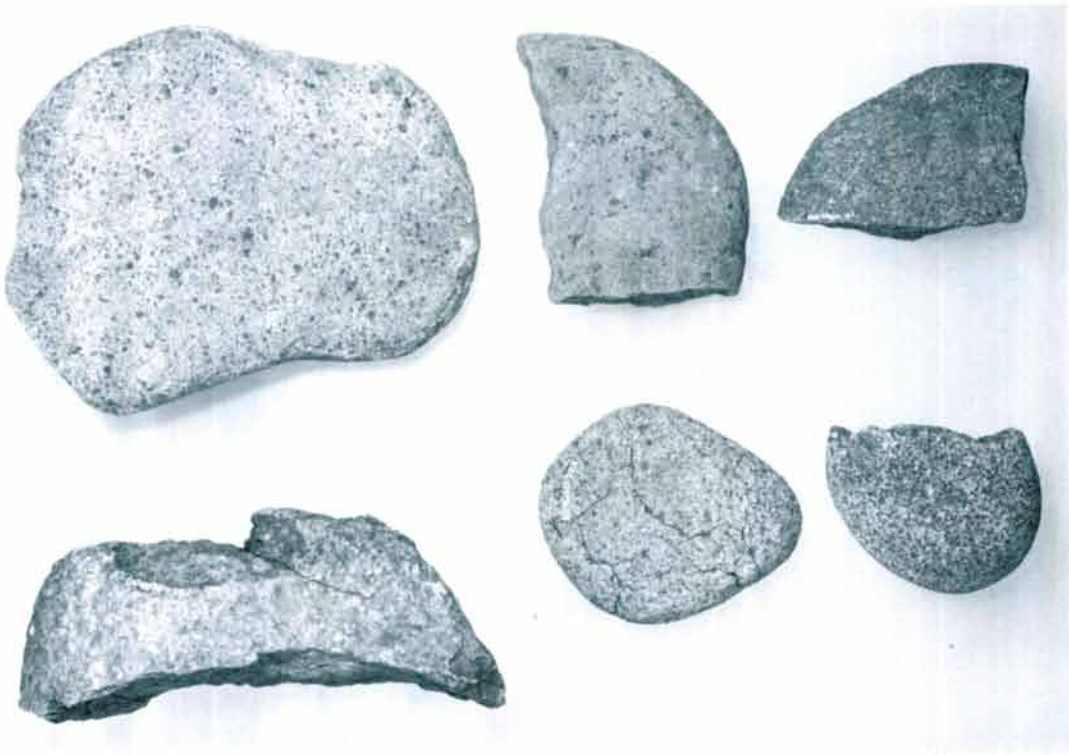
第 6 次調査出土土器

第 6 次調査出土土器

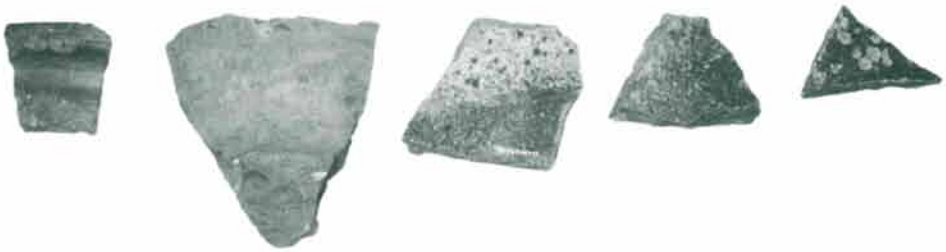
第 4 次調査出土石核（上段）　第 5 次調査出土石鏃（中段）
第 6 次調査出土石鏃（下段）



出土石器



出土石器

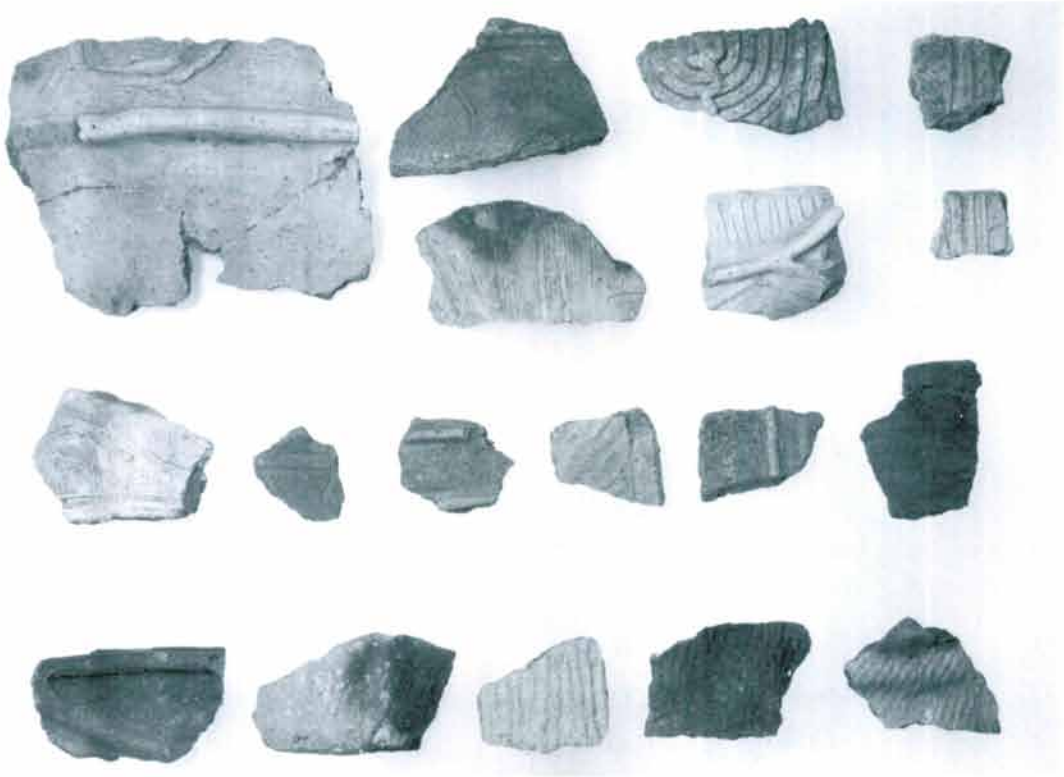


第６次調査出土陶器

第４次調査　第５次調査　第５次調査　第６次調査

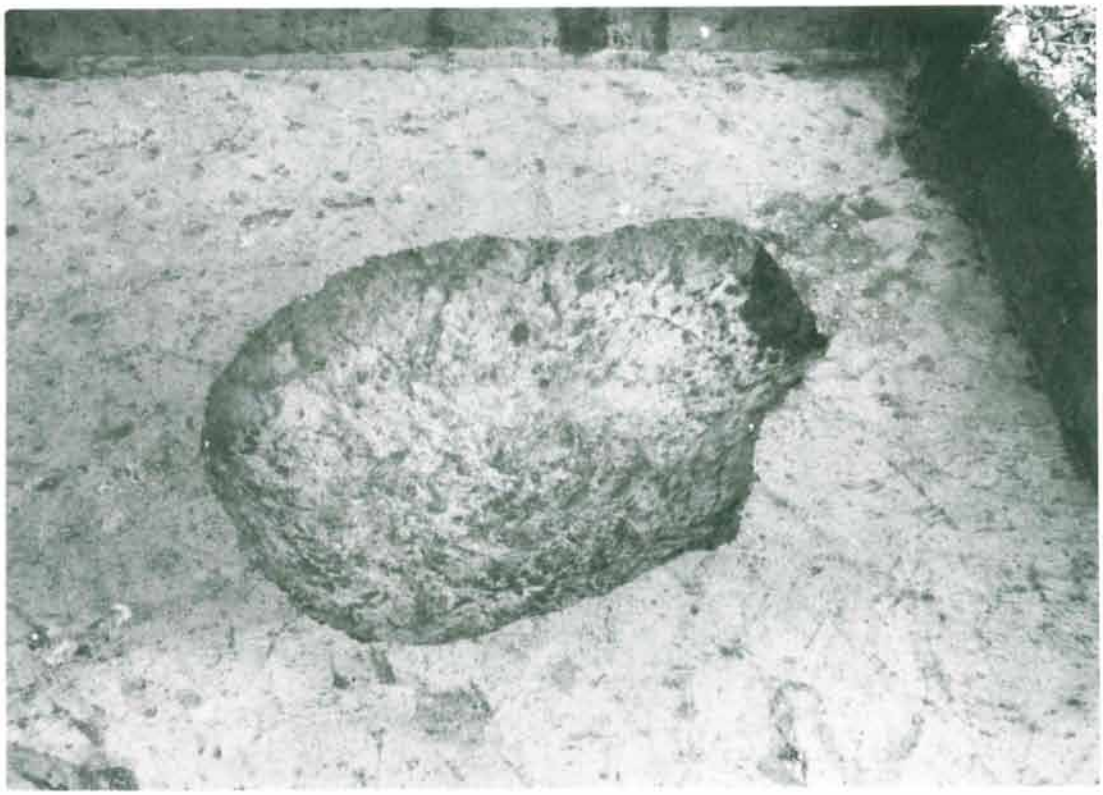
土製円板

第７次調査出土土器



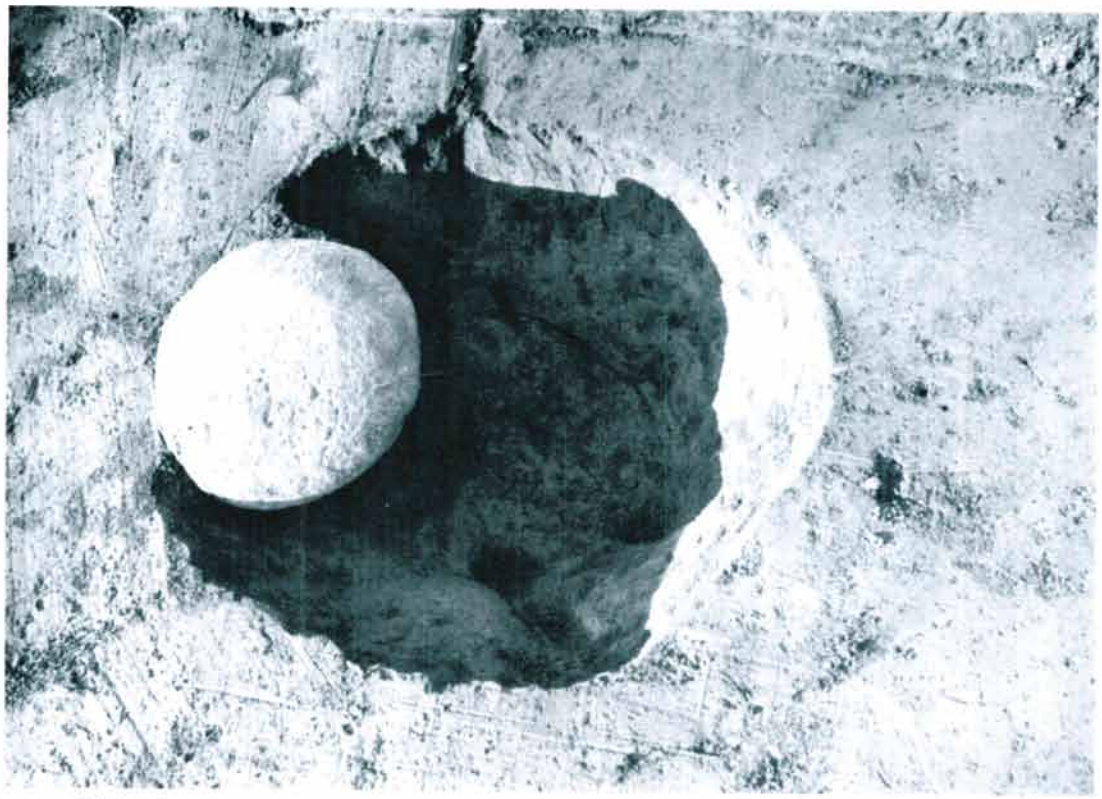
第７次調査出土土器（上３段）、第８次調査出土土器（最下段）

第８次調査地区全景

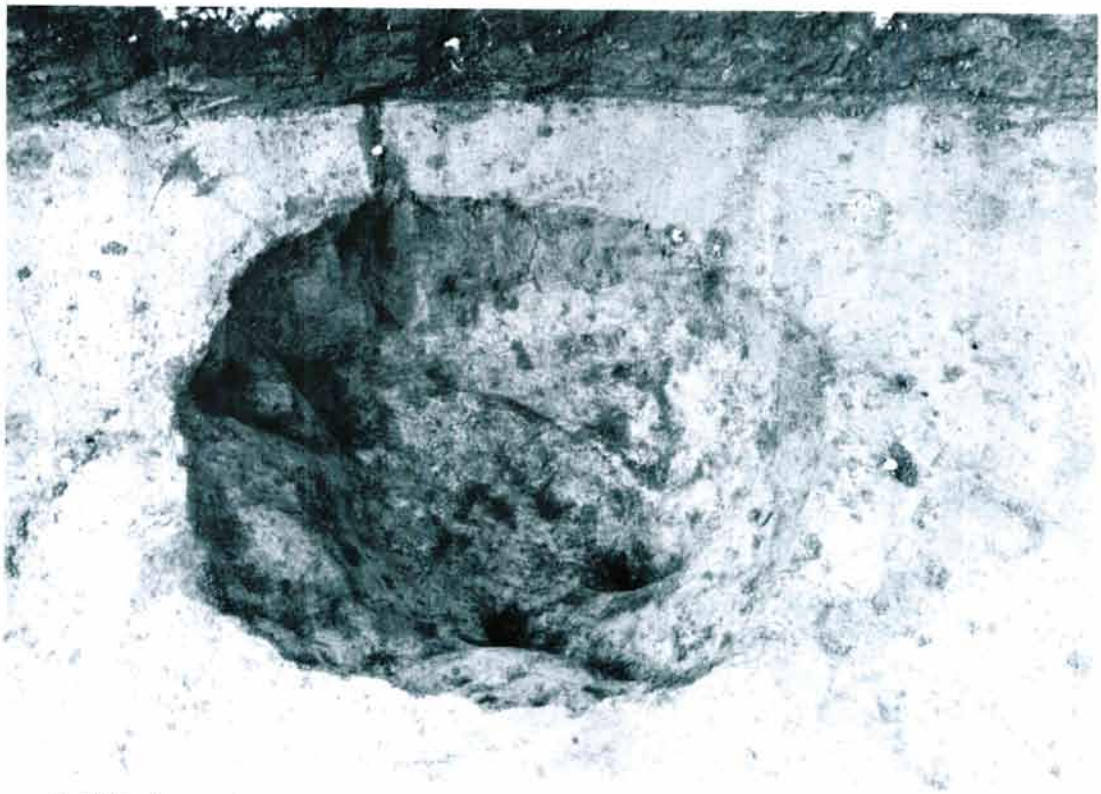


16号土壙

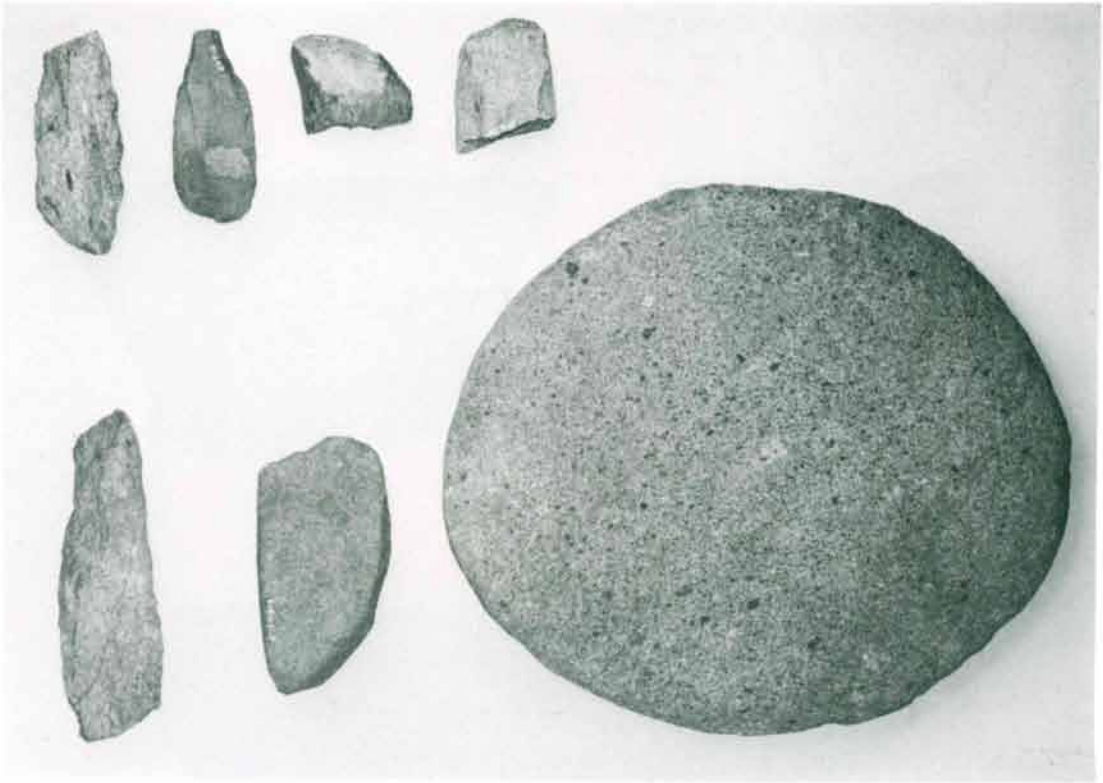
17号土壙



1号ピット

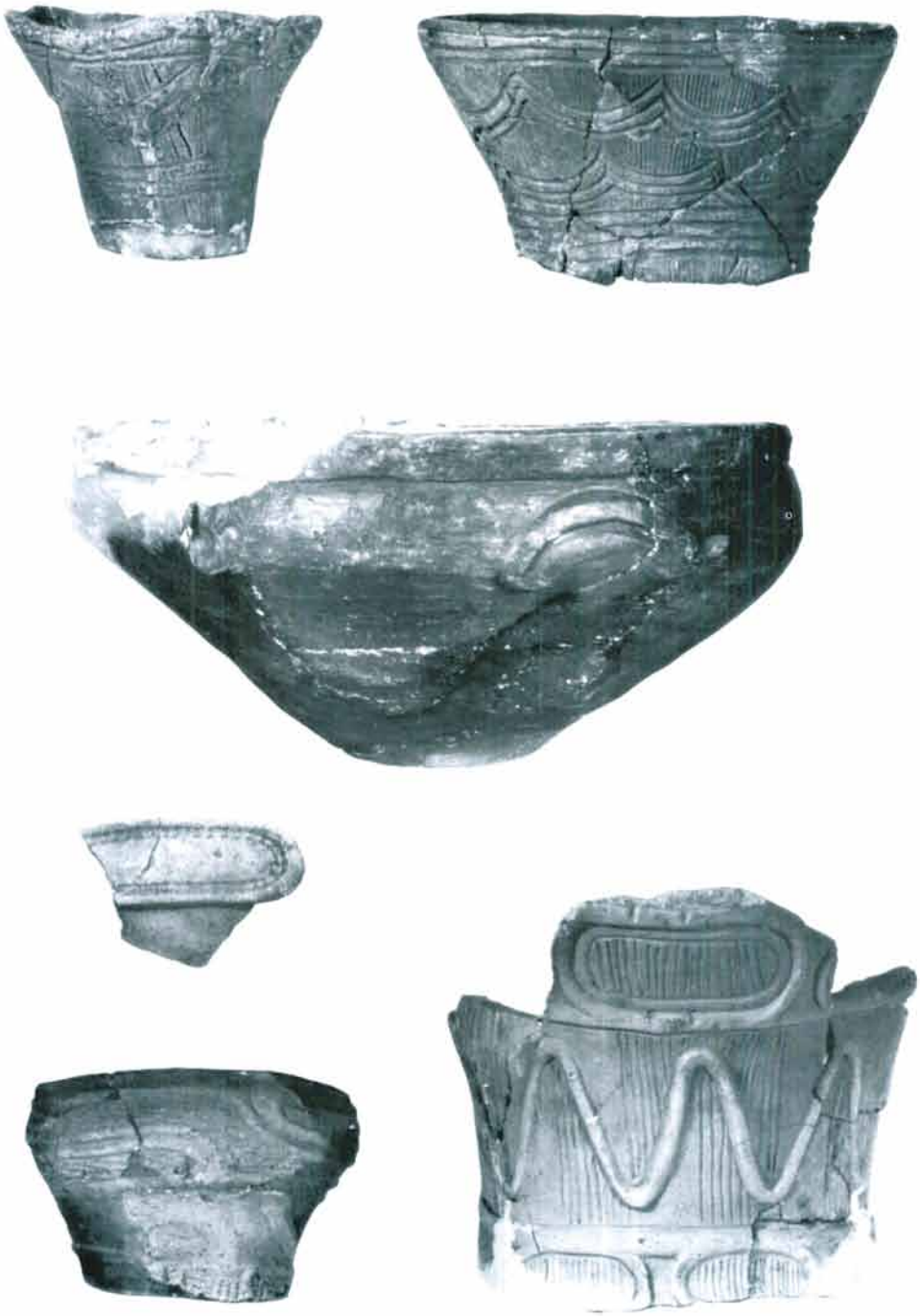


1号ピット

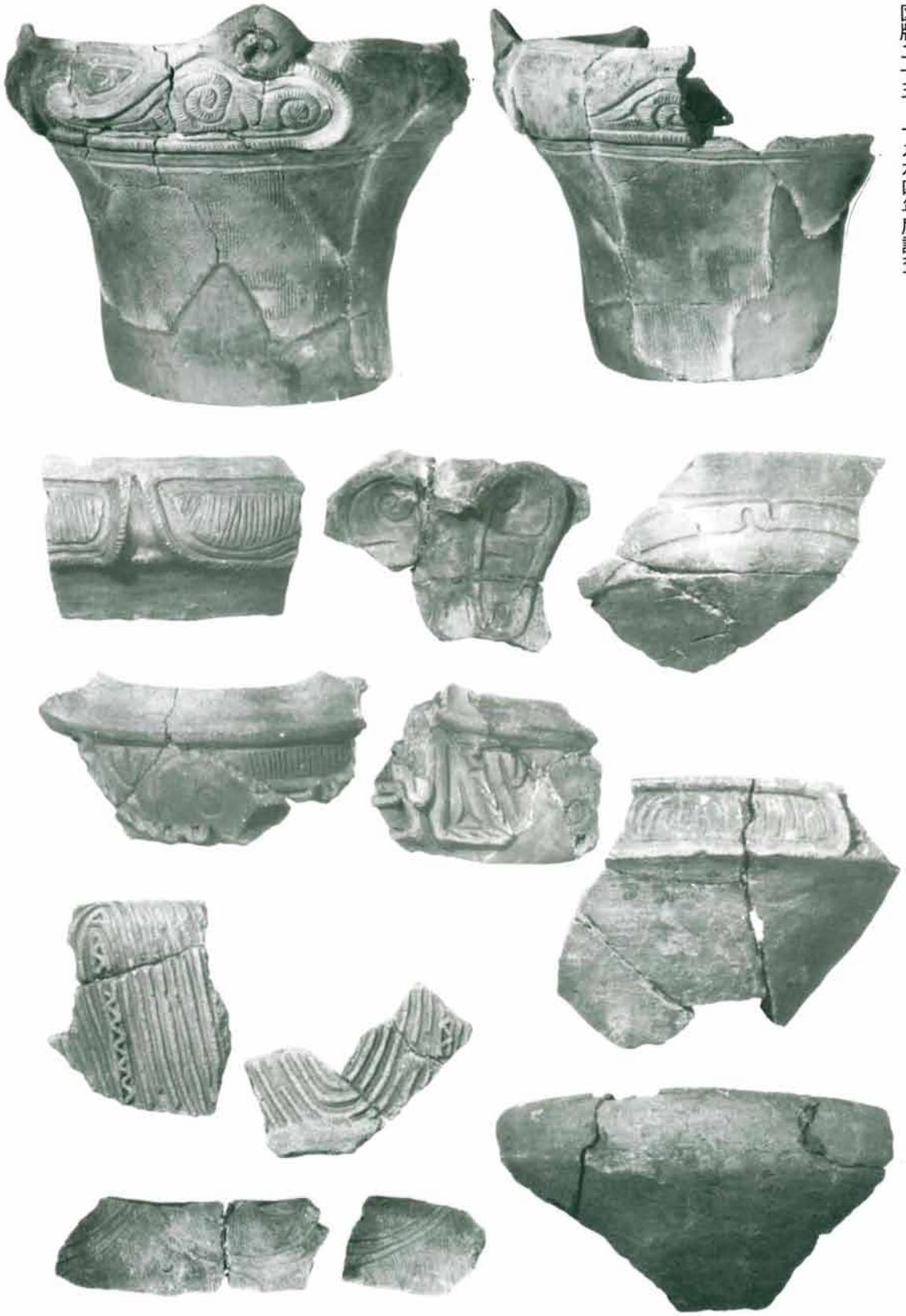


第７次調査出土石器（上段）　第８次調査出土石器（下段）

1964年度調査　Ａ住、Ｂ区出土土器

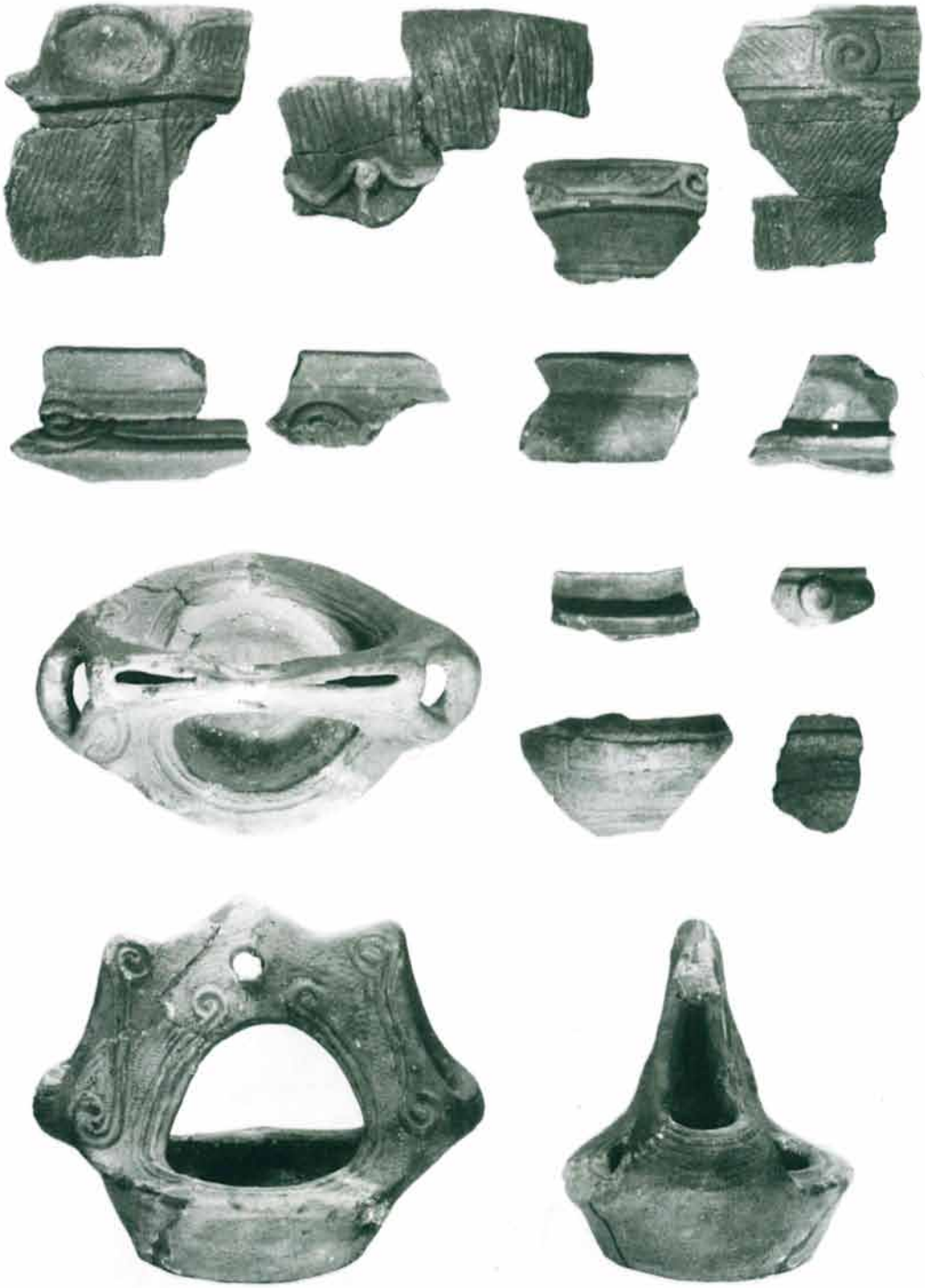


C 住居址出土土器



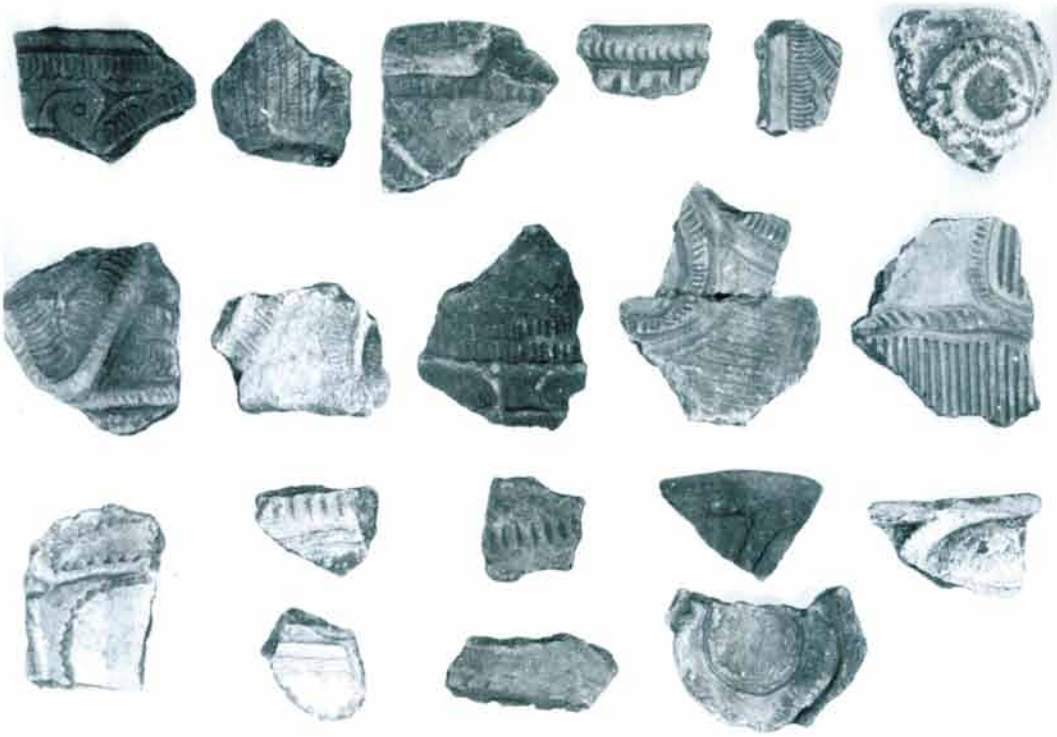
E地点出土土器

E地点出土土器

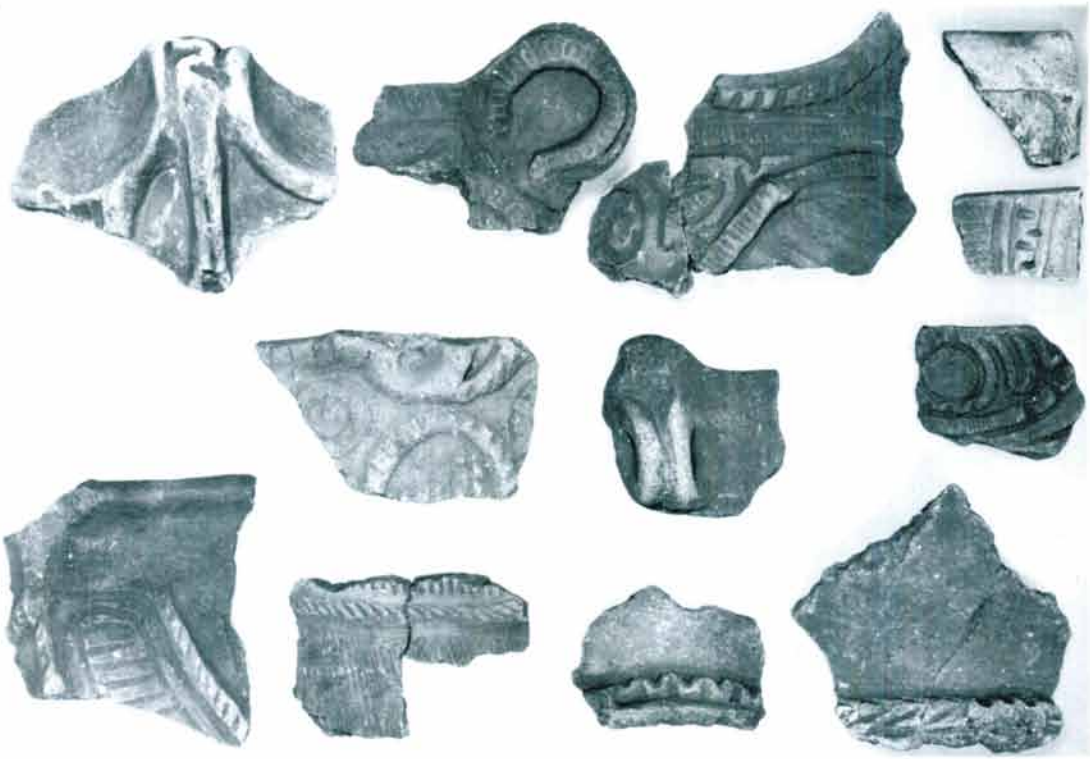


F地点、G地点出土土器、有孔鍔付土器、釣手土器（A号住居跡）、後期土器片

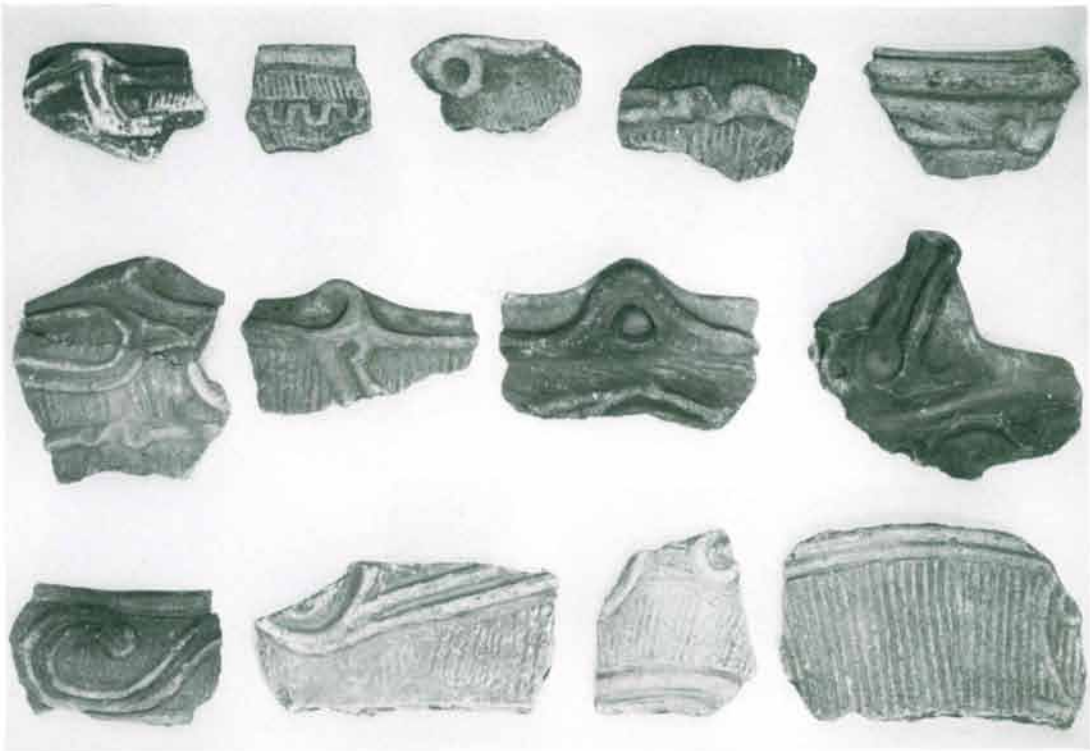
図版二十八　一九六四年度調査



勝坂式・阿玉台式土器

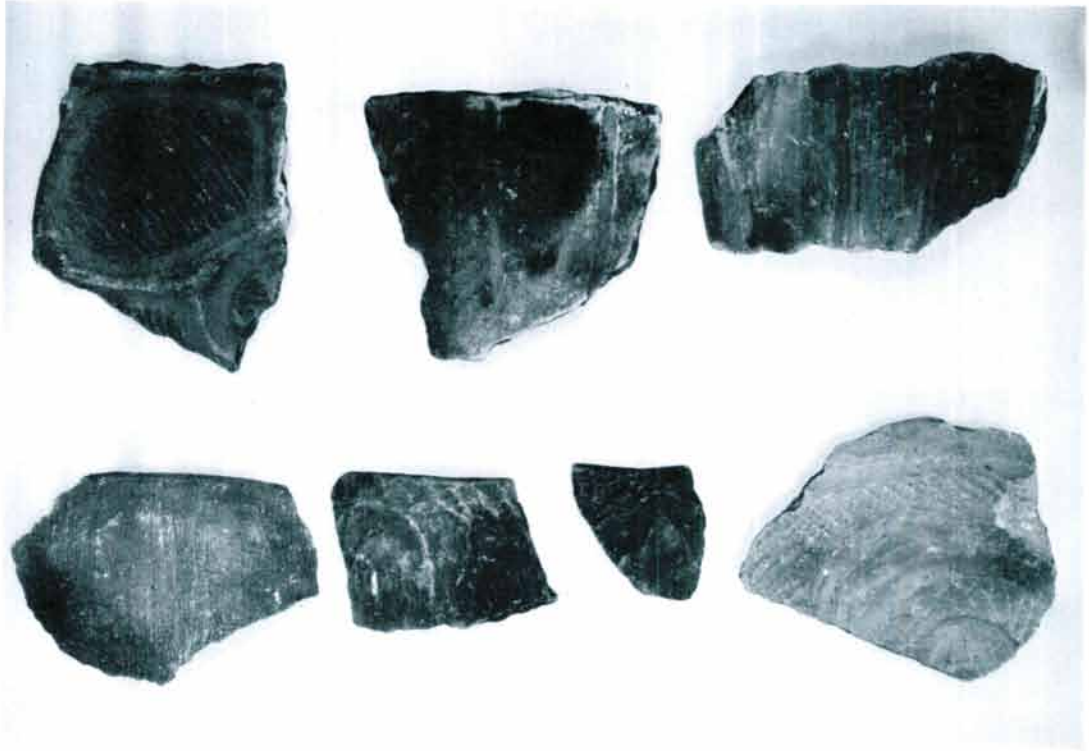


勝坂式土器

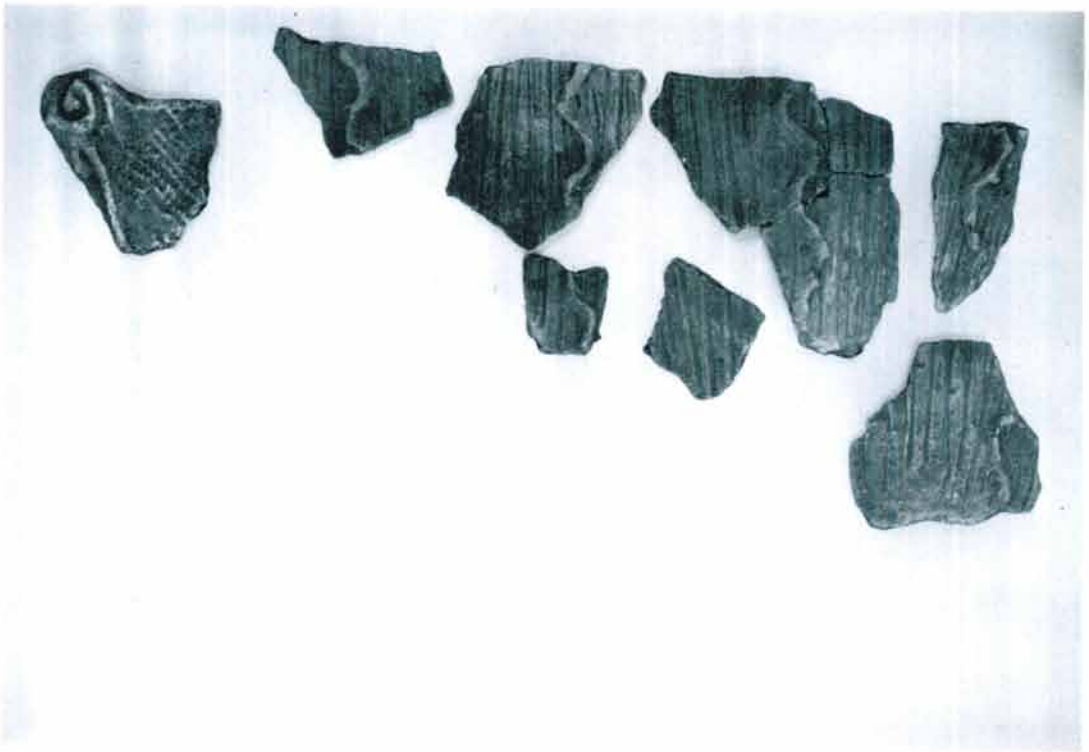


加曽利E式土器

加曽利E式土器

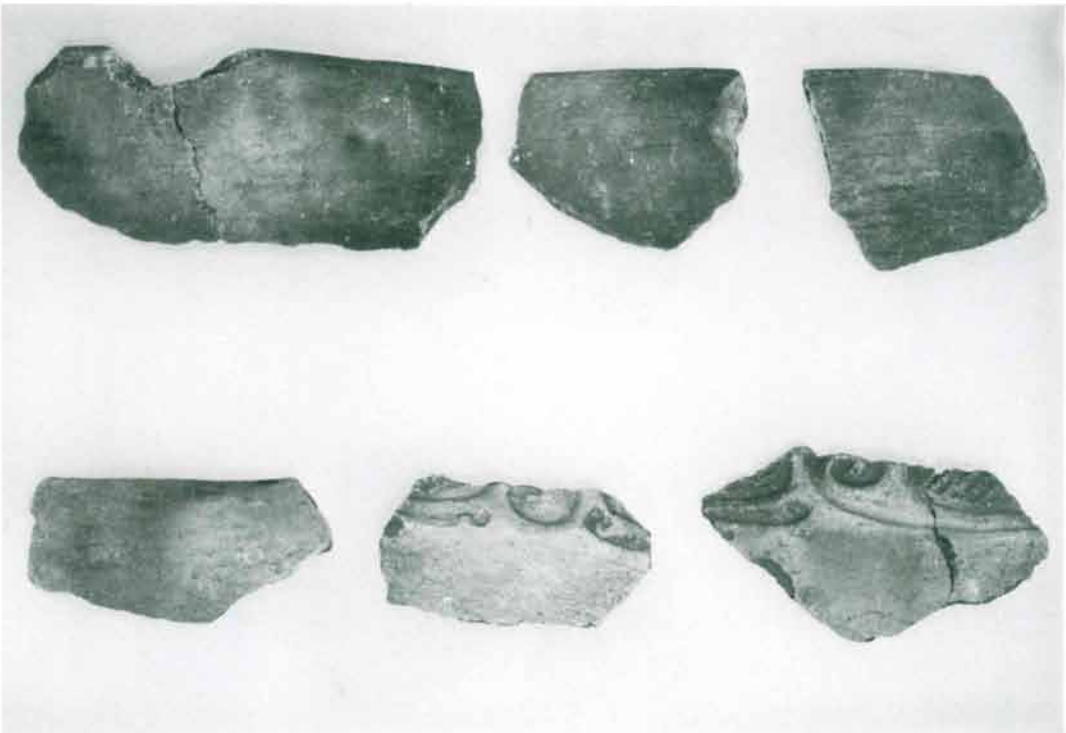


加曽利E式・大木式土器

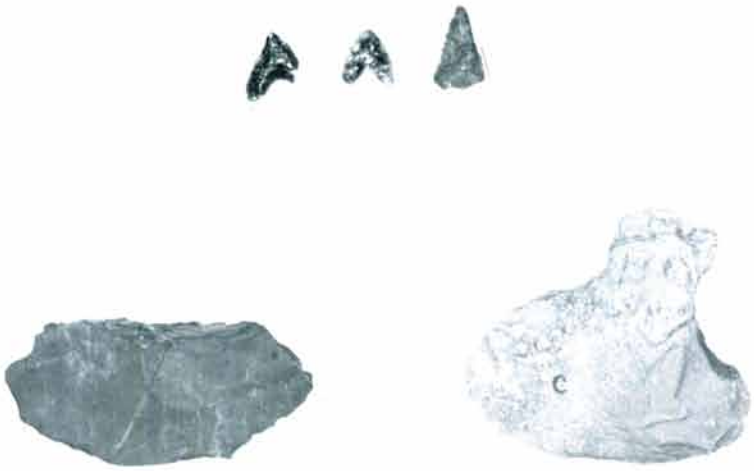


曽利式土器

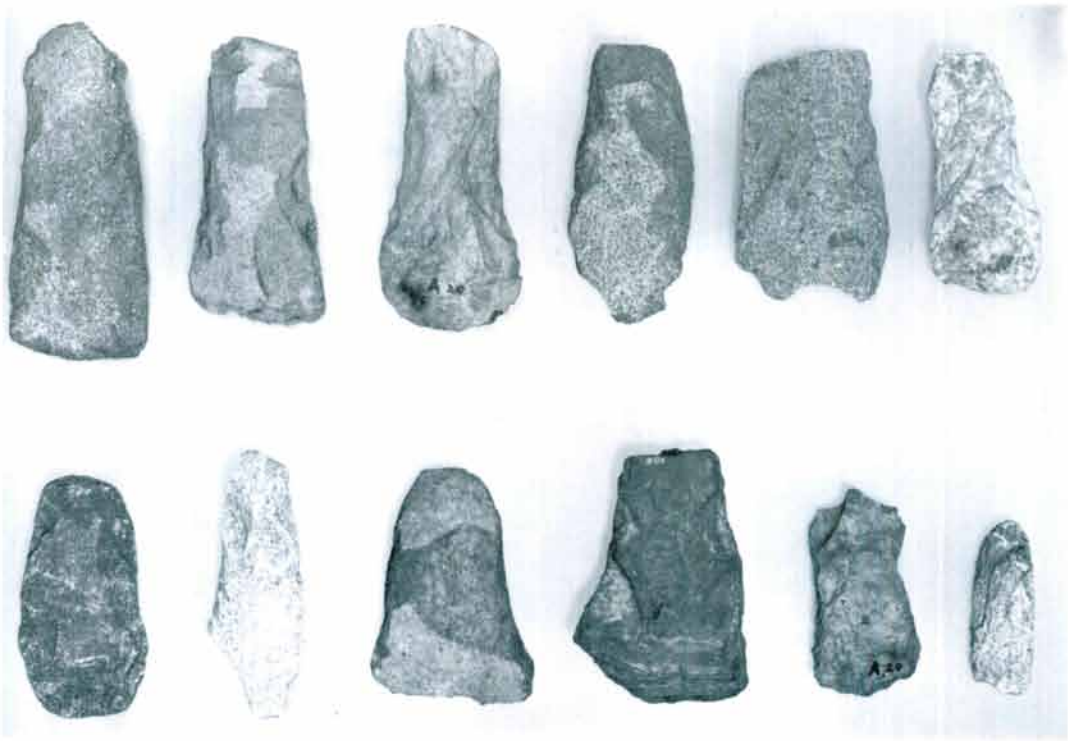
曽利式土器・浅鉢形土器



浅鉢形土器



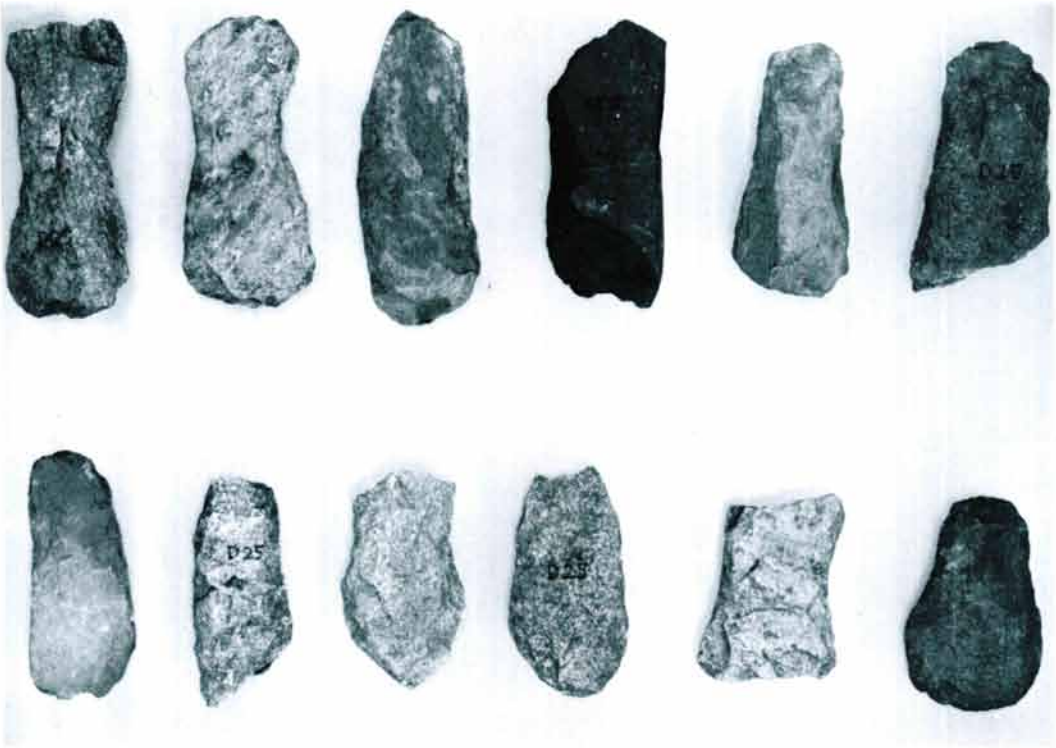
石鏃・加工痕を有する剝片・石匙



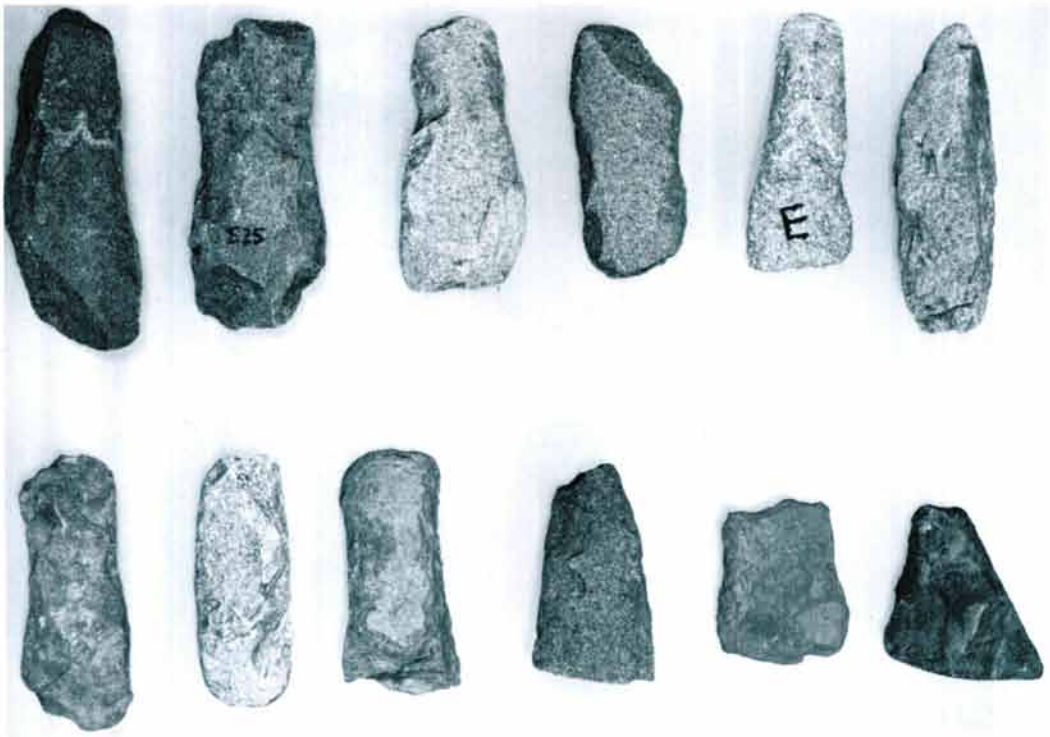
A 住居址出土打製石斧

B 地点出土打製石斧

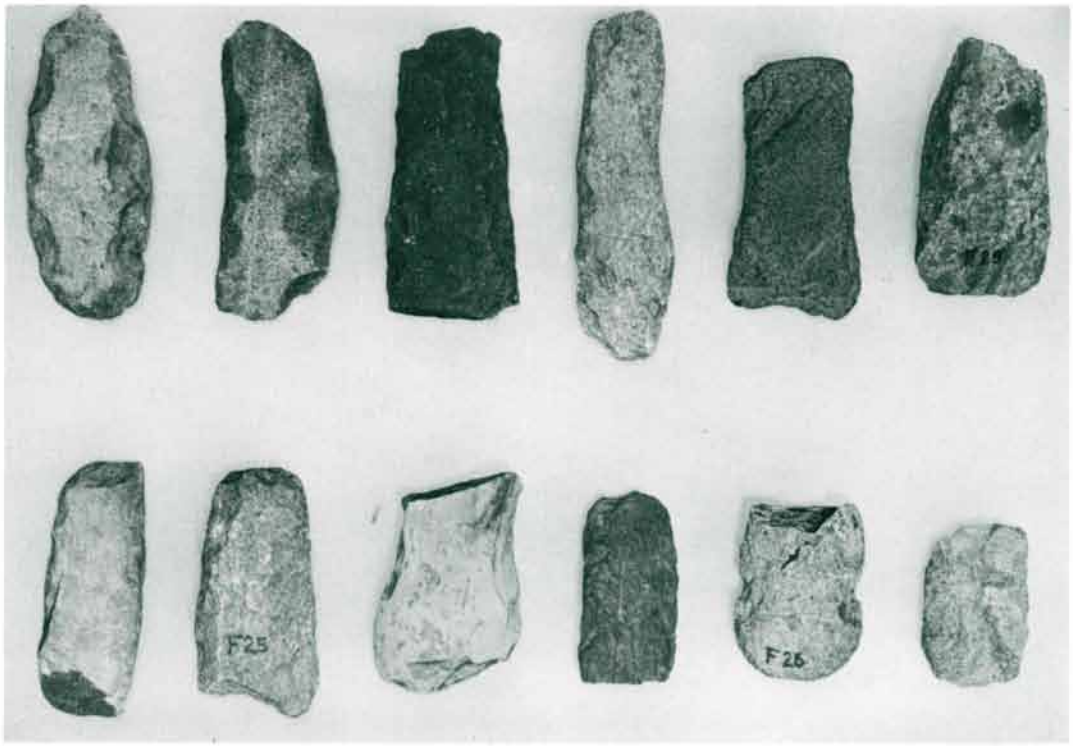
C 住居址出土打製石斧



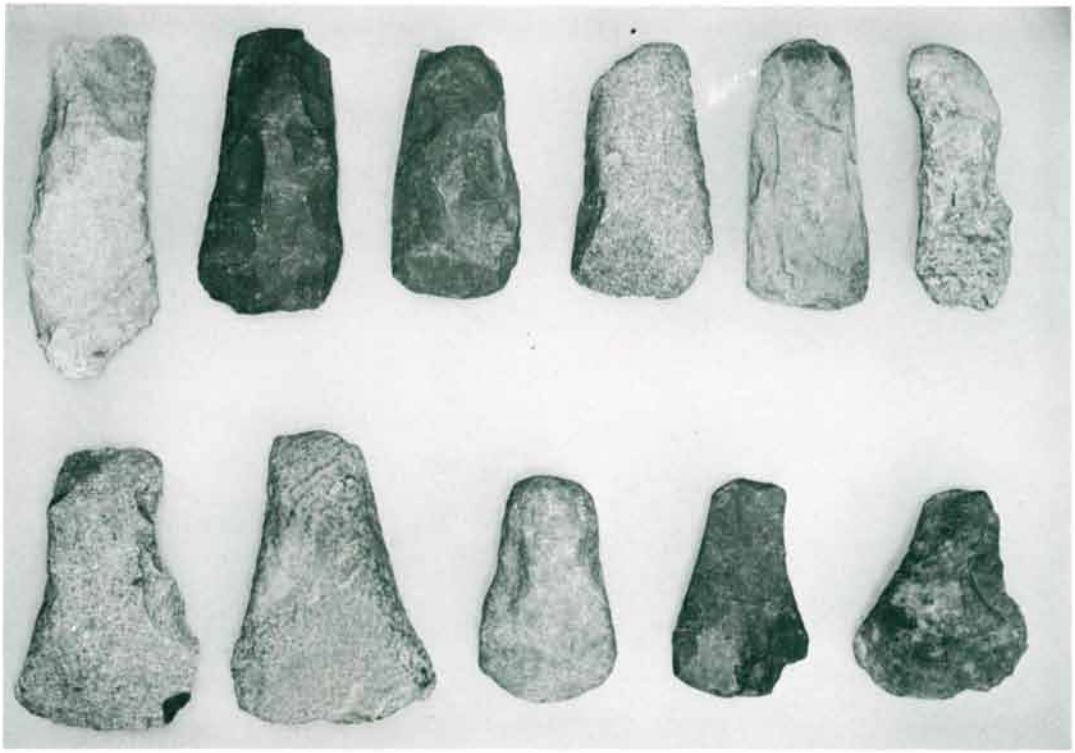
D 地点出土打製石斧



E 地点出土打製石斧

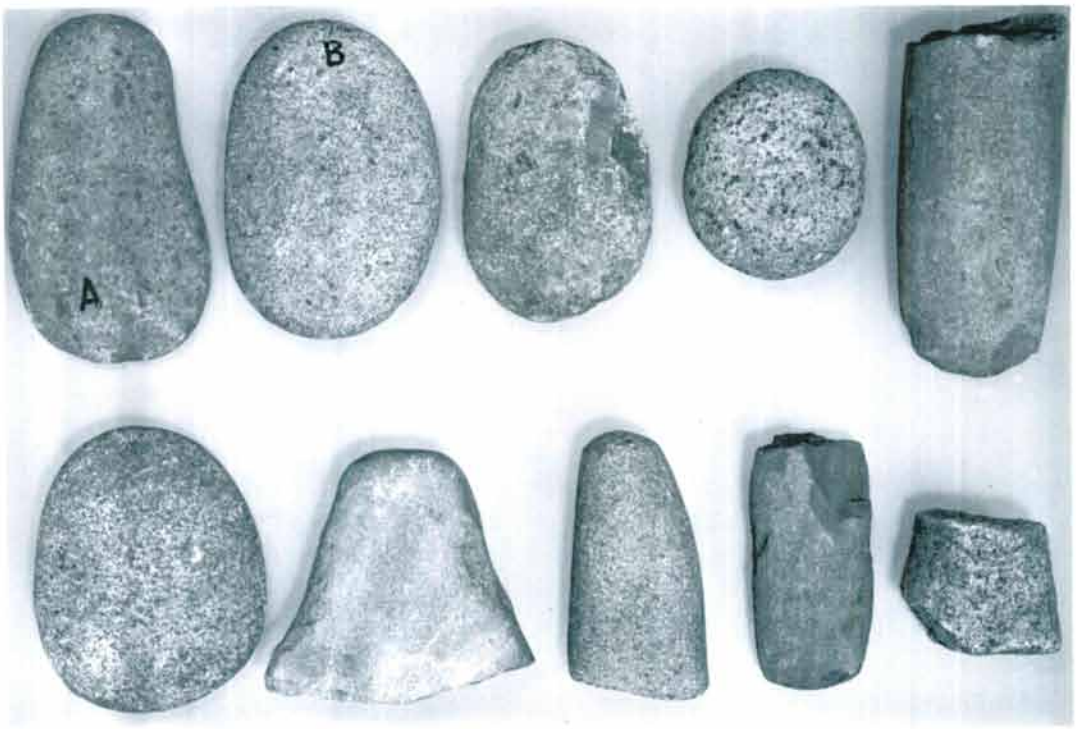


F地点出土打製石斧



G地点出土打製石斧

H地点出土打製石斧



磨石・磨製石斧・凡字形石器

図版三十七　一九四八年調査

出土土器

恋ヶ窪遺跡 Ⅱ

1980年10月 1日

編著　恋ヶ窪遺跡調査団
©

発行　恋ヶ窪遺跡調査会
東京都国分寺市教育委員会

印刷　第一法規出版株式会社

令和４年（2022）３月２日　デジタル版作成
底本はＢ５版。